IS-戦いを求めるもの

志祈月織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ－戦いを求めるもの

【Ｎコード】
Ｎ３９１８Ｘ

【作者名】
志祈月織

【あらすじ】
戦いが好きだ。戦って、戦って、戦いあいの末に、戦いたい。
だから、あの日出会った彼女はまさに運命だった。
俺より強く、凛々しく、美しい。俺は、彼女に勝つために銃を取り、技を磨き、戦略を学び、すべてをかけて戦った。
直向に彼女を求め、それはいつしか愛情となった。
ＩＳで男主人公の二次創作です。一夏の幼馴染という設定です。
テンプレ、ハーレム要素、最強、ご都合主義を含むのでご注意くだ

さい。
途中で更新が停止したらごめんなさい。

再会と再開（前書き）

投稿するのが初めてなので不備があれば教えてください。
あと、感想はどんどん募集しております

再会と再開

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」
そう、にっこりと微笑むのはこのクラスの副担任、山田真耶だ。
高校一年生である俺と同じか、それよりも幼く見える彼女は、まるで子供が大人のマネをしていますよ、といった風に教室を見回す。
「それでは皆さん、一年間よろしくお願いします」
どちらかといえば、こちらがよろしくする側ではないだろうか。
と山田先生の姿にそう考えてしまう。
教室中が俺と同じ考えなのか、それとも別の理由からだろうか。
クラスの誰も反応を返さない。
おそらく、二対八くらいで後者の割合が多いだろう。
「え、えっと……。じゃ、じゃあ自己紹介をしましょうか。出席番号順にお願いします」
その場の沈黙に耐えられなくなったのか。山田先生はうろたえながらそう告げた。
まったくもって、教師に思えない。
まあそれはそれでおもしろい。それに、その小動物を思わせる姿は年不相応にかわいい。これは、年齢より幼いという意味だ。
もっとも、俺よりも前方。クラスの真ん中最前列というお誕生日席に座る友人、織斑一夏はそんなことないらしく、引きつった顔で居心地悪そうに座っている。
ちらりと、幼馴染である篠ノ之箒に助けを求めるが、無視される。それにいっそ落ち込む一夏だが、まあ無視された理由には思い至ってないだろう。
まあ、俺個人としてはおもしろいから問題はない。だいたい、一夏もだらしない。せっかくこんなおもしろい状況に置かれたのだ。少しは楽しめばいいものを。
と教室中を軽く見回すが、俺と一夏以外の生徒は女子ばかり。そ

れだけではなく、この学校すべてを見ても、男子は俺と一夏だけ。他はすべて女子なのだ。
こんなハーレム状況。楽しむな、というほうが無理な話だ。
「……あの、織斑一夏くんっ」
「は、はいっ！？」
山田先生の声に、一夏は声を裏返しながら答えた。
どうせ、現実逃避でもしていたのだろう。
「あ、あの、お、大声だしちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな？」
とひたすらに頭を下げる山田先生。うむ、教師とはとても思えない。まるで一夏にいじめられて謝っているみたいだ。
「いや、あの、そんなに謝らなくても。自己紹介ですよね。します、しますから……」
なんとか山田先生をなだめる一夏。これじゃ、どっちが年上だかわからないな。
一夏は立ち上がると、こちらを振り向いた。
「え、えっと。織斑一夏です。よろしくお願いします」
そう、当たり障りのない無難なあいさつから始めるのだった。

振り返れば俺たちがここ、ＩＳ学園にいるのは一夏が原因だろう。本来、俺たちは私立藍越学園に入学するはずだった。
俺としては高校などどこでもよかったのだが、一夏がそこを受験するといったので、俺もそこにしただけだ。深い理由などない。
なので受験会場やその他諸々などは特別調べることもなく、すべてを一夏に任せて受験会場へと向かった。
そこで運がいいのか悪いのか、一夏と俺はＩＳを起動させてしまったのだ。
インフィニット・ストラトス。通称、ＩＳ。
簡単に言えば、この世で最強の兵器だろう。まあ、それに色々異

論はあるのだが、世間一般の評価といえばそんなもんだ。ついでに、女性しか起動できないといわれていた。
そう、過去形だ。俺と一夏がＩＳを起動させたことでその常識は壊された。
その事実は世間や国、つまるところ世界を大きく震撼させた。
俺たちはそのなんだかんだといったゴタゴタの中、本人たちもよく知らないさまざまな思惑があり、その結果としてこのＩＳ学園に入学させられたのだ。

すごい大雑把な回想を終える、一夏はまだ立っていた。先ほどからなにもいっていない。
教室中が一夏に注目をする。期待が高まる中一夏は、
「以上です」
何人かがずっこけた。俺としてはまあ、予想通り。あいつがこの空気の中、おもしろいことをいうことなどできない、という程度には幼馴染であるあいつのことを理解している。
バアンッ！
突然響いたその音。それは、いつの間にか教室にいた人物が、一夏を出席簿で叩いた音だった。
「げえっ、関羽！？」
バアンッ！と二撃目。すばらしい一撃だ。惚れ惚れする。
「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」
はたして、その人物は誰かというと、なんてことはない。織斑千冬、一夏の姉だ。このクラスの担任になることは聞いていたが、遅かったな。
「あ、織斑先生。もう会議は終わったんですか？」
「ああ、山田くん。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」
どうも、遅れたのはそういう理由らしい。
「い、いえっ。副担任ですから、これくらいしないと……」
先ほどより熱っぽく話す山田先生。

なるほど、この先生も千冬の信者かなにかか。
千冬は世界中のＩＳ乗りの憧れで理想だ。山田先生のような反応をする人は初めてではない。
「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てる二が仕事だ。私のいうことをよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を一六才まで鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私のいうことは聞け。いいな」
いきなりの暴力宣言。教師というより、前にやっていた軍の教官に近いな。
「キャー！千冬様、本物の千冬様よ！」
「私、千冬様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉さまのためなら死ねます！」
とこんな感じだ。
「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだな。感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」
本気でうっとうしがる千冬。そんなことなど気にも留めず、
「きゃあああああっ！　お姉さま！　もっと叱って！　罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾けて！」
このクラスはドＭの集まりらしい。
「で？　挨拶も満足にできんのか、お前は」
「いや、千冬姉、俺は……」
バアンッ！と三度出席簿が振り下ろされる。
「織斑先生と呼べ」
「……はい、織斑先生」
とこんなやりとりすをすれば、教室には二人が姉弟だとバレるのは当然。

「え……？　織斑くんって。あの千冬様の弟……？」
「それじゃあ、世界で一人目の男で『ＩＳ』を使えるっていうのも、それが関係して……」
ないよ。一夏も俺も、ＩＳが使える原因は不明とされてるが、俺は大体の予想はついている。おそらく、千冬もだ。一夏は、まあ気づいてないな。
あと、どいつもこいつも千冬に幻想持ちすぎ。一度、家でのぐうたら具合を見せてやりたい。
「おい、そこでニヤついている馬鹿者」
「……俺か？」
どうも、表情が表に出ていたようだ。別に隠す気もないけど。
「そうだ。ついでにお前も自己紹介をしろ。いっておくが、マジメにやれよ」
その千冬の目は、ふざけたらどうなるかということを物語っている。さすが、千冬。俺のことをよくわかっている。俺がこの状況で、どういう行動をとるかということはお見通しというわけだ。
なら、その期待に応えるとしよう。
「みなさん、はじめまして。師河美鶴です。一夏と同じく、男ですがよろしくお願いします」
教室中の目線が、俺に集中する。うん、悪くない。
「好きなものは女の子。趣味は女の子をナンパすること。将来の目標はハーレム建造です。叱って罵って優しくして躾けて欲しい人は、俺に一声かけてください」
一瞬の沈黙。そして、
「キャー！！　肉食系よ、肉食系男子だわ！！」
「すごい、かっこいい。躾けて欲しい！」
「あの、今晩暇ですか！？」
などと教室から歓喜の悲鳴が上がった。今更だが、この教室にはバカしかいないのではないだろうか？
そんな中、千冬は静かに俺の席まで歩いてくると、

「マジメにやれといっただろうが、馬鹿者！」
出席簿を振り下ろした。
俺としてはこうなるだろうことはもちろん予想していたので、身を捻りそれを避ける。
「……避けるな」
「だって、当たったら痛そうじゃん」
現に、風圧だけで前髪が少し切れた。一夏へのものより、明らかに殺傷力が高い。
「……ふん」
もう一撃。俺はそれを机の上にあった入学案内書を丸め、筒状にして受け止める。
「おいおい、危ないな。なに怒ってるんだよ？」
「教師として、生徒が不真面目な態度を取ったら指導するのは当然だ」
「体罰だろ、これ」
「訴えられなければ問題ない」
と会話する間も、出席簿と筒で打ち合う。
やばいな、強度的にこっちが負けそうだ。
「う、うそ。千冬様と互角に戦っている？」
「何者なの？」
そんな声も無視。そんなことよりも、今は千冬に集中する。千冬だけを、見つめる。
「ニヤニヤするな、馬鹿者が！」
それは無理だ。こんな楽しいのに、笑みを抑えるなんてできやしない。
互いに、速度を増していく。そして、
「……時間切れか」
「それは残念だ」
鳴り響くチャイムの音で終わりを迎えた。
ダメだ、不完全燃焼過ぎる。こんなんじゃ、ぜんぜん満足できな

いな。
「さて、これでＳＨＲは終わりだ、師河、座れ」
「おいおい、冗談じゃないぜ。お楽しみはこれからだろう。千冬だって、まだ満足してないんだろう？」
「織斑先生だ。もう一度だけだ。座れ」
有無を言わせぬ千冬の口調。それに、俺も幾分か冷静さを取り戻す。
俺は大きく息を吐き、頭を冷やす。ったく、俺としたことが。高校生活初日ということで、気が大きくなっていたようだ。これだから、両親からはまだ子供扱いをされるのだろう。
「っとまあ、このように腕にも少し自信があります。みなさん、これからよろしくお願いします」
そう締めくくり、俺は座るのだった。

挑むものと立ち向かうもの（前書き）

セシリアの性格がかなり改変されていると思います
そういうのが嫌いな方は気をつけてください

挑むものと立ち向かうもの

そんなこんなで休み時間。この学園は始業式だというのにいきなり授業がある。まったくもってめんどくさい。

そして廊下。俺と一夏を見物に、学校中から生徒が集めっているようだ。当たり前だが、全員女子。

「落ち着かない」

そう零すのは一夏。俺は一夏の机に座り、答える。

「なにが？」

「なにが、じゃねえよ。見ろよ、廊下」

俺は廊下に笑顔で手を振ってやる。そして響き渡る歓声。

「うん、みんなかわいいな」

「なんでお前はそんなに余裕なんだよ……」

疲れたように、うなだれる一夏。

「おいおい、だらしないな。一夏も男なら少しはこのハーレムを楽しめよ。あれだ、適当に女の子に声かけて飯でも誘うとかさ」

「出来るか、そんなこと！」

だらしないやつめ。そうやって女子に近づこうとしないからいつまでも女心が読めない鈍感野郎なんだ。

「……ちょっといいか」

「え？」

「ん？」

突然、声をかけられた。さてさて、この衆目の中思い切った行動をするな。

「……箒？」

「よっ、久しぶり」

その正体は、六年ぶりに会う幼馴染、篠ノ乃箒だった。不機嫌そうな顔の幼馴染にまずは一言。

「元気してたか？　相変わらず景気悪そうな顔だな」

「余計なお世話だ！　というか、なんでそんなに軽いんだ、お前は」
なんでもなにも、幼馴染に対して硬くなる必要もないだろう。それに、箒のお目当ては俺じゃないんだし。
「一夏、話がある。いいか？」
「俺だけ？　美鶴には？」
相変わらずの鈍感さ。ここは手助けしてやろう。
「その、美鶴は、だな……」
「俺は少し用事があるんだよ。お前だけでいって来い。箒、また後で話そうぜ」
「あ、ああ。そうだな」
俺は立ち上がり、二人を廊下に送り出す。まっ、どうせ当たり障りのない会話で終わりだろう。一夏の鈍感さもさることながら、箒も案外ヘタレだからな。
「それで、何か御用ですか。お嬢様？」
「ええ、もちろん。ちょっと、よろしいかしら？」
振り返ると、そこには金髪美少女が立っていた。気の強そうな瞳で、俺を見ている。
「もちろん。俺は女性のお誘いは断らない主義なんですよ」
「相変わらずの八方美人ですわね。いつか背中から刺されますわよ」
「それは怖い。せいぜい、気をつけるとしましょう」
そう、俺はにこやかに笑った。
「あと、いい加減その他人行儀な話し方はやめてくださるかしら。不快ですわ」
「はっ、最初に言葉使いに気をつけろっていったのはそっちだろ。お嬢様」
俺はがらりと口調を変える。別に、下手に出る理由もないし。
「そのお嬢様、というのはやめてくださるかしら。わたくしにはセシリア・オルコットという名前があるのです」
知っているよ。イギリスの代表候補生で専用機持ち。今年の一年生の中でも指折りのエリートだ。そして、俺の顔見知り。

「ははっ。元気そうでなによりだな、お嬢様。それに、予想通り美人になった。俺の女を見る目は確かだったか」
「お褒めにいただいて光栄です。あなたに認めてもらうため、研鑽を積みましたから」
「ああ、代表候補生になったんだろ。おめでとう、お嬢様」
「そう思うなら、いい加減に名前で呼んでくださいますか」
名前で呼ぶ、というのは昔交わした約束のことだ。お嬢様が、俺を惚れさせるくらいイイ女になったら名前で呼ぶというものだ。なぜそんな約束をしたかというと、過程は色々あるが、結論としてはお嬢様が俺に惚れたから。それを俺が拒否したから。
うん、なんて自分勝手なんだ俺。昔は若かったな。今も若いけど。
「さて、どうしようかな」
挑発的な笑みを浮かべる俺。もちろん、俺はそんなに惚れっぽくない。いや、女の子は好きだけどね。惚れるか惚れないかは別なんだよ。
うん、実に最低だ、俺。
そこで、授業開始のチャイムが響いた。
「さて、授業だ。席に戻ろうぜ。いつまでもここにいたら邪魔だ」
「そうですわね。でも、私は簡単にはあきらめませんわよ」
「もちろん。そうじゃないと張り合いがない」
お嬢様は席に戻っていった。
あの口調。どうやらお嬢様はよほど自分に自信があるんだろう。
どんなことをしてくるか、実に楽しみだ。

「織斑くん、何かわからないことがありますか？」
記念すべき初授業。といっても、まだ初日だ。入学前にもらっていた参考書の内容を理解していればそう難しいこともない。理解していれば、だ。

「ほとんど全部わかりません」
やけに自信満々に、醜態を晒すバカが一人いた。もちろん、一夏だ。
「ぜ、全部、ですか……？」
さすがの山田先生も、顔が引きつっている。
「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」
そんなやつは、もちろんいない。
「えっと、師河くん？」
「なんですか？」
「師河くんは、大丈夫ですか？」
「もちろんです。入学前にもらった参考書は理解できていますから。この程度は問題ありません」
「なっ、美鶴！？」
驚いたように、こちらを振り向く一夏。
「なんだ、一夏？」
「お前、勉強なんてしてたのか？　毎日俺と一緒だっただろう？」
その言葉に、教室がざわめく。おい、誤解を生むような言葉をいうな。俺に男の趣味はない。
「当たり前だ。ここは選ばれた人間しか入れないエリート校だぞ。ある程度の事前学習をしておくのは当然だ」
半分うそ。俺はＩＳの知識なら勉強しなくてもある程度は把握している。少なくとも、この学校で三年間で学ぶ知識程度は。
「なんで教えてくれなかったんだよ！？」
「教えるまでもなく、当然だと思ったからだ」
「本音は？」
「おもしろそうだったから」
「ふざけるな！」
「こっちのセリフだ」
これで何度目か。千冬が出席簿を振るった。

「まったく、恥を晒すな。大体、必読と書いてあっただろう」
「でも、千冬姉」
「織斑先生だ」
　同じく、一撃。ああ、痛そうだな。
「それで、肝心の参考書はどうしたんだ？」
「……破いた」
「なに？」
「握力がどれだけあるか試そうと思ったんだけどさ。古い電話帳使おうと思ったら、間違えて……」
「馬鹿者」
　そして、もう一度バアンッ。
「あとで再発行してやるから一週間以内で覚えろ。いいな」
「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」
「やれといっている」
「……はい。やります」
「がんばれよ」
「お前も、場を乱す発言をするんじゃない！」
　しょうがないじゃん。
　だって、好きな子ほどからかいたくなるんだよ。なあ、千冬。

　次の休み時間は、箒と一夏、俺の三人で会話した。一夏は怒っていたが、まあどうでもいいか。俺だって少しは反省してるんだぞ。だから休み時間をこうやって幼馴染三人で話すことで、回りの目が気にならないようにしてやってるんじゃないか。
　本音は、一夏と話す箒の反応を見るのが面白かったから。
　それで、授業開始。今度は、千冬が教壇に立つようだ。
「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」
　クラス代表者か。聞くからにめんどくさそうな名称だ。まあ、内容を聞けばまったくその通り。クラス長とかそんな感じの役職らし

い。
「はい、織斑くんがいいと思います！」
「私もそれがいいと思います！」
次々とあがるのは一夏の名前。どうせ千冬の弟だからって理由だろう。俺としては、俺じゃなければかまわない。そんなめんどくさい役職になれば、自分の時間がなくなるからな。
「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」
「お、俺！？」
「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？　いないなら無投票当選だぞ」
さて、無事に一夏に決まりそうだ。
「師河美鶴さんを推薦します」
俺の思いとは裏腹に、余計なことをいうやつがいた。だれだよ？
「お前は、オルコットか」
「はい、そうです」
席から立ち上がったお嬢様だった。さっきの休み時間はなにもしてこなかったから忘れてたが、なにかを企んでるな？
「そうね、確かに師河くんもいいわね」
「さっき千冬さまと互角だったんだもの。きっとＩＳの操縦も一流よ」
やばい、めんどくさくなりそうだぞ。
「まった。俺はパスだぞ。いいか、よく考えろ。俺がクラス代表になったら、女の子と遊ぶ時間がなくなるだろ」
「それがどうした？　それに、推薦された以上拒否権はない」
くそ、聞く耳もたない。まあ、俺の理由を聞けば当然か。さて、どうする。
「織斑先生。よろしいですか？」
「まだなにかあるのか、オルコット」
「はい。わたくし、セシリア・オルコットは自分をクラス代表とし

て推薦します」
「ほう、どういうつもりだ？　他薦をしながら自薦とは」
「わたくしはクラス代表には実力トップがなるべきだと考えています。そして、現在このクラスでのトップはイギリス代表候補生であるわたくしだと自負しています」
　これは純然たる事実だ。他の生徒など、お嬢様に手も足も出ないだろう。
「しかし、それと同時にわたくしはより強い人物を知っています。それが、美鶴さんです」
　千冬が俺を見た。なにかいいたいって顔だな。
「……それで、なにがいいたい？」
「つまり……」
「どっちが強いか、決めようぜってことだろう？」
　俺は立ち上がると、お嬢様を見返した。くそ、おもしろいな。
「なるほど、確かに簡単でわかりやすく確実だ。お嬢様が俺に勝てるってんなら、それこそ惚れちまうだろうな」
「ええ、そうです。こうなれば、あなたも断れませんでしょう？」
「ずいぶん大胆だな。こんなことしなくても、お嬢様のお誘いなら俺は断ったりしないのに」
「それは、わたくしの覚悟の表れだろ思ってください」
　お嬢様は笑い、俺も笑った。互いに誘うように、挑発するように。
「それで、一夏はどうするんだ？　別に逃げてもいいけど、俺とマジで戦える機会なんてそうそうないぜ」
　事の成り行きを静観していた一夏に、声をかける。
「あら、織斑さんもですか？」
「あいつは俺の弟弟子みたいなもんだ。甘く見ると、痛い目見るぜ」
「なるほど、それはおもしろそうですわね」
　で、肝心の一夏はどうするんだ。
「俺もやる。俺がどれくらい強くなったか、美鶴に見せてやる」
「ってことでどうだ。千冬」

「織斑先生だ。馬鹿者」
注意はするが、今度は出席簿はなしだ。さすがに俺たちの空気を読んだのかもしれない。
「わかった。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。初戦は織斑とオルコット。その勝者が師河と勝負だ。異論はないな」
「ない」
「ありませんわ」
「俺、一試合だけかよ。まあ、いいぜ」
さてさて、楽しくなりそうだ。

挑むものと立ち向かうもの（後書き）

更新の頻度は遅いと思いますが少しずつがんばりたいと思います

変わらない者たち（前書き）

サブタイトルを考えるのが大変です

変わらない者たち

「ああ、織斑くん、師河くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」
放課後の教室。俺と一夏が互いに本日のことを振り返っていると山田先生がやってきた。
本日の出来事？　女の子と一緒にお昼食べた、以上。一夏はぐったりとしているが、俺は楽しい一日だったと思うよ。
「山田先生、なにか御用ですか？」
「えっとですね、寮の部屋が決まったからお知らせにきました」
部屋番号が書かれた紙とキーを差し出す山田先生。
はて、寮とな？　確かにこの学園は全寮制だが、しばらくは自宅通学ではなかっただろうか。
「あの、俺たちって一週間は自宅から通学じゃないんですか？」
同じことを一夏も思ったらしい。
「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。……二人とも、そのあたりのことって政府から聞いてます？」
ああ、なるほどね。自宅にいたらマスコミやら学者やらがうるさいってことか。一夏も春休み中はそれで苦労して、俺の家に避難してきたっけ。ちなみに、我が家は俺のお母様がすべて撃退したし、その後は押しかけることもなくなった。
きっと、昔のコネでも使ったのだろう。
「そういう訳で、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。あいにく、個室が一つと相部屋が一つしか用意できなかったので、どちらかは相部屋になってもらいますが」
「一夏、相部屋な」
「なんでだよ！？」
「俺が相部屋になったら、女の子を部屋に呼べないだろう」

なに当たり前のことを。
「ふ、不純異性交遊はダメですよっ」
「大丈夫、俺は本気で女の子と遊ぶだけですから」
それに、もう経験はしてるし。
「なにが大丈夫なんだ、馬鹿者」
鋭い殺気。俺は身を屈めると、今まで首があった場所を鋭いなにかが通り過ぎた。
「おい、首と体が永遠にバイバイするところだったぞ」
「そうか。惜しかったな」
当たり前だが、千冬だった。
「どっちみち一ヶ月もすれば部屋が用意できる。どっちでもいいが早く決めろ」
「じゃあ俺が個室でいいな」
「俺も個室がいいんだよ！」
「なんだ、一夏も実は女の子を部屋に呼びたいんだな。このむっつりスケベ」
「俺は部屋でくらいゆっくりしたいだけだ！」
まあ、一夏は学校では落ち着く暇がなかなかなさそうだからな。しょうがない。
「じゃんけんだな。ルールは特になし。一本勝負で恨みっこなしだ」
「いいぜ」
そして、互いにこぶしを構えると、
「「じゃんけんっ」」
と一夏はパーを出した。それはそれを確認し悠然と、
「チョキっと。はい、俺の勝ち」
「後出しだろ！」
「ルールは特になしといっただろ。後出しが禁止されているわけではない」
「し、師河くん。卑怯ですよ」
なにをいってるんですか、山田先生。勝負の世界に卑怯もクソも

ない。負けたやつが悪いんだよ。
「ははははっ、悪いな一夏。せいぜい、同室の女の子と仲良くするがいい」
「くっ、どうせなにいっても無駄だから諦めるよ。……わかりましたけど、今日は荷物の準備に帰っていいですか？」
「心配するな、私が手配しておいた。着替えと、携帯電話の充電器があれば十分だろう」
うむ、見事に生活必需品しかないな。マンガやエロ本の一冊もないとは、かわいそうなやつめ。
「まあ、心配するなよ。俺が家からゲームでもマンガでもエロ本でも持ってきて貸してやるから」
「お前の分もあるぞ。玲子さんが準備してくれた」
なん……だと……。
「ちなみに、ゲームもマンガもない、お前が隠していたエロ本は私が直々に処分してやった。ありがたく思え」
「……千冬よ、俺がエロ本読むの気に入らないのはわかるが、健康な男子高校生だぞ。持っていたくらいでその処罰。さすがに泣くよ？」
「勝手に泣け。あと、織斑先生だ」
くそ、かわいくないやつめ。そんなのだから女の子からしか告白されないんだ。
「もういいな、いいなら早く寮へ帰れ。夕食は六時から七時だから遅れるなよ。あと、しばらく風呂は部屋のシャワーでがまんしろよ。いいな、師河」
なぜに俺に念を押す。まあ、わかるけどさ。
「なんでダメなんだ？」
「なんだ、一夏は女子と風呂に入りたいのか。やっぱ、男ならそうだよな」
「っ！？　ち、ちがうぞ。入りたくなんてないぞ」
「ええ、女の子に興味がないんですか！？　そ、それはそれで問題

のような……」
そうか、一夏はやはり男好きだったのか。これからの付き合い方を考えないといけないな。
「距離を取るなっ。俺は普通に女の子が好きだよ！」
「バカなことといってないで早く行け」
バアンッ！　と出席簿。うむ、そろそろ潮時だろう。
「わかったよ、一夏行こうぜ」
「ああ、なんかもう疲れたよ」
俺は山田先生から紙とキーを受け取り教室を出た。その時、一言。
「あとでな、千冬」
千冬にだけ聞こえるように、そうささやいた。

着いた部屋は、個室というだけあってあまり広くはなかった。それでも、家の部屋よりはよほど広いし、生活するには十分だろう。
「さてと、荷物は」
ベッドの脇に置かれていた、キャリーバックを開く。
中には、着替えと洗面道具。当面の生活資金の入った財布、その他雑貨があった。確かに、生きるためなら十分だが、少しは俺の潤いも考えて欲しいものだ。
「それでっと」
着替えなどを取り出し、空になったバック。その中を少し探ると、隠しポケットが開いた。そこは、着替えなどが入っていたスペースよりも大きく、そちらがメインとさえ思える。
そして肝心の中身だ。
「これだけか」
入っていたのは鋼鉄のワイヤー、大小さまざまな大きさ形のナイフ、拳銃と予備の弾倉と分解されたアサルトライフルだ。あとは暗色のコートにおまけのなんやかんや。
さて、なんでこんな物騒なものがあるかというと、お家柄だと思

ってくれればいい。詳しい説明は面倒だからパスだ。
まずは部屋の物色から。適当に部屋を漁ると案の定。
「大漁、いや大量か？」
出てきたのは、厳重に隠された盗聴器と隠しカメラ。どうせ、男子でＩＳ操縦者である俺を監視するために設置されたものだろう。まったく、俺のプライバシーを何だと思ってやがる。
「俺に話があるなら直接来い。かわいがってやるぞ、楯無」
この程度で俺を欺けるとは、甘く見られたものだ。あのバカのことだから、これもお見通しなのかもしれんが、まあいい。
次は、ウサギのイラストが描かれた自己主張が激しいものを手に取る。
「とりあえず死ね、バカウサギ」
あいつはこれでいいや。
それだけいうち、カメラと盗聴器をまとめて破壊する。あとで燃えないゴミの日を確認しなければ。
次は分解されたアサルトライフルの組み立てを始める。それを手際よくこなすと、次は拳銃だ。これも一度分解、その後に清掃をして組み立てた。
「うん、こんなもんだろ」
この作業を始めてもう十年近い。いい加減になれたものだ。
がちゃ。とドアノブが回る音がした。
「俺だ、一夏だ！」
「なんだ、おどろかすなよ」
反射的に扉へと拳銃を向けると、そこにいたのは顔を引きつらせた一夏だった。
「おどろいたのは俺だ！」
「ノックをしないのが悪い。それに、俺は武装の整備中だったんだ。そんなところにくるほうが悪い」
実は、俺も無用心だったりする。自分の家の感覚で、カギをしないで整備を始めてしまった。あまり見られていいものではないから

な。
物騒な人物だと思われたら、女の子が部屋に来なくなってしまう。
「それ、どうしたんだよ？　学校にも持ってきたのか？」
「まあな。許可は取っているから心配するな」
「そうか」
部屋にあった勉強机、その椅子に座ると一息つく一夏。
「それで、どうしたんだよ」
「……箒と部屋が一緒だったんだ。それで、ちょっとな」
「どうせお前のことだから風呂上りにでも出くわしたんだろ」
「なんでわかるんだよ！？」
当たり前だろ、このラッキースケベめ。
「それで、どうだったんだ？」
「なにが？」
「どれくらい成長してた？　胸の大きさとか」
「ばっ！？」
一夏が顔を赤くする。どうせ、見た光景を思い返しているのだろう。
「なにいってんだよ！」
「なにって？　男としては気になるだろう。昔は一緒に風呂なんかも入ったんだ。それがどれだけ成長したか知りたくはないのか？」
「何時の話をしてるんだ！」
確か、小学二年生くらいかな。あの時は男も女もなかったからな。
「服の上から見た感じでは、かなり大きかっただろ。どうだった？」
「あ、え、うっ……」
言葉に詰まる一夏。くそ、一人だけの秘密にして夜のネタにでもするつもりか。幼馴染に対して、実にけしからん。俺にもその幸せを分けて欲しい。
「ここか、一夏！」
そこで本人登場。蹴破るような勢いで、木刀を持った箒が入ってきた。

「おい、人の部屋に入る時はノックをしろ。集団生活なんだからマナーくらい守れよ」
「一夏、見つけたぞ！」
俺の言葉も許可も聞かず、勝手に部屋に入る幼馴染。
なんだろうな。六年振りに再会したかわいい女の幼馴染が部屋をたずねてきたというのに、まったく嬉しくない。
「ま、待て箒。俺が悪かった、謝る。だから許してくれ」
「問答無用」
「じゃねえだろ、バカ」
箒が振り下ろす木刀。それを片手で受け止めると、もう片方の手で箒の頭に手刀を入れる。
「落ち着け。照れ隠しだか怒ってるのか知らんが、仮にも剣士ならくだらない理由で剣振るうんじゃねえよ」
「し、しかし……」
「いい訳はいらない。少し反省しろ」
「……すまん、美鶴。感情的になりすぎたようだ」
しゅん、とうなだれる箒。ったく、落ち込むなら最初からやるなよ。
「で、理由はなんだ？　風呂上がりの半裸姿を見たところまでは聞いたぞ。俺にも見せろ。そしてそのけしからん胸を揉ませてくれ」
「だれが揉ませるか！　そのことはいい。あれは事故だ。だがな……」
ふむふむ、一夏が竹刀に引っかかった箒のブラを見たと。それの理由も偶然っぽいけどな。箒にも落ち度はあったっぽいし。それで思わず木刀を振ったら一夏に避けられた。それでまた振ったら一夏がまた避けたから意地になっってこうなったと。
まあ、そりゃ避けるだろ。当たったら痛いし。攻撃には反射的に避けるように仕込んだし。怒りで単純になった箒の太刀じゃかすりもしないだろう。
結論、

「くだらないことで喧嘩するな。とりあえず、お互い謝っとけ」
「そうだな。ごめん、箒」
「私も、すまなかった。一夏」
こういう時、いつも仲裁するのは俺の役目だった。それが、今になっても同じ役とはな。いい加減、昔のまんまで嬉しくなるぜ。
「なに笑ってるんだ？」
「いや、何時までたってもガキだなって思ったんだよ」
「失礼なヤツだな。お前こそ、そうやって大人ぶるのは昔からだ。それに、昼間のオルコットとのアレもそうだ。強い女を求めるのも、昔から少しも変わってない」
それはしょうがない。俺個人の好みの問題なのだ。強い女性と戦い、身を削り、互いを求め、その果てに愛し合う。いや、ずいぶん歪んだ恋愛感だな。
「まっ、それを含めて互いに積もる話もあるだろう。飯でも食べながら、昔話でもしようぜ」
「いいな、久しぶりの再会なんだ」
「ああ、そうだな」
それから俺たちは食堂で夕食を食べながら、思い出話や今までのこと、そしてこれからのことを思う存分話した。とても、充実した時間だったと思う。

そんなこんなで日も変わる頃。話は夕食後も続き、すっかり夜も深けてしまった。いい加減寝なくては明日に響く。のだが、
「いらっしゃい、待ってたぜ」
深夜の来訪者。普段なら迷惑だと追い出すのだが、こいつは別だ。
「狭い部屋だけど、座れよ。千冬」
俺は織斑先生とは呼ばず、名前で呼んだ。それに、今回は怒ることもなく、

「それは、この部屋を用意した学園の教師である私への嫌味か、美鶴」
それは、プライベートの織原千冬だった。さすがに黒のスーツ姿ではなく白のジャージを来ているが、それがまた嫌にかっこいい。美人は何を着ても似合うね。
「冗談だ。で、話はなんだ？」
「話があるのはそっちだろ。この数ヶ月はドタバタで会えなかったんだ。なにか、いいたい事があるんじゃないか？」
「そのドタバタの原因の一人がなにいってるんだ」
と呆れたように笑う。俺も同じく、笑った。
「酒はないが、コーラならあるぞ」
「もらおうか」
俺はグラスを二つ出すとコーラを注ぎ、一つを千冬に差し出す。二人で並び、ベッドに腰掛ける。
「そうだな、なにから話そうか。まずは、礼をいわせてくれ。一夏を預かってくれて、ありがとう」
それは、俺たちがＩＳに乗れることがわかってからの数ヶ月、一夏が俺の家に住んでいたことをいっているのだろう。
「別に、いいさ。今までもよく泊まってたんだ。改めて礼をいわれるほどの事でもないだろ」
「それでも、さ。もし一夏が一人で家にいたら、なにがあるかわからなかった。それを守ってくれたのは美鶴と玲子さんだ。本当にありがとう」
確かに、一人で家にいたら記者や国の役員や研究者などのせいで落ち着く暇もないだろう。
「しかし、本当にブラコンだよな。一夏の心配ばっかで、俺はどうでもよかったのか」
「そ、そういうわけじゃない！　もちろん心配はした。だが、美鶴の強さはよくわかってるからで、一夏はまだ弱いからだな……」
俺の意地悪な言葉に、慌てて弁解する千冬。その姿は、昼間のき

りっとした雰囲気など少しもない。
その姿がかわいいので、俺は千冬の口を、自分の口で塞いだ。
「……」
「……」
互いに、しばしの沈黙。そして、口を離すと拗ねたように、
「不意打ちとは卑怯だぞ」
「千冬がかわいいからいけないんだろ。まっ、気にするな。千冬の弱さはわかってるからさ」
世間では最強などと呼ばれている千冬も、常に強いわけじゃない。弱さも、もちろんある。その一つが、一夏だ。一夏のこととなると過保護になるのは、それだけ大事に思ってるからだ。俺のことを想ってくれてるのもわかるが、やはり妬けてしまうのはしょうがない。少しの意地悪くらい許してもらおう。
「コホン」
顔を赤くした千冬が一息、気を取り直して話を再開する。
「それで、だ。美鶴、なぜ自分と一夏だけが男でありながらＩＳに乗れるか、検討はつくか？」
「まあな。確証はないが、多分バカウサギのせいだろう」
「やはり、束か」
篠ノ乃束。ＩＳの製作者で天才中の大天災。世界を自分と、大切な人物数人と、それ以外でしか考えられない異常者でもある。あと、俺の天敵。
その大切な数人の中になんということだろう、俺と一夏も含まれているらしい。それが、理由だろう。大体、ＩＳのコアを書き換えられるなんて束しかいないだろう。
「なに考えてるんだ、束は」
「ただの暇つぶしの可能性もあるな。なんせ、部屋にカメラと盗聴器まで仕込んであったんだから」
「なに？」
「安心しろ。全部壊してある」

千冬のかわいい姿を束になんて見せてやるか。俺が独り占めするのだ。
ちなみに、一夏にはさっき妨害電波を出す装置を渡しておいた。箒はなんだかわかってないみたいだが、一夏はとりあえずわかっただろう。まあ、盗聴と監視される理由はわかってないだろうけど。体だけじゃなくて、頭も鍛えるべきだったかもしれない。
「そうか。あとは、少し文句がある」
「文句？」
「オルコットのことだ。ずいぶん、仲がよさそうだったが」
ああ、お嬢様のことか。ふふん、妬きもちか。
「気になる？」
「別に、お前の浮気癖はわかってるし、私への気持ちも理解している。オルコットが、美鶴の好みかもしれないということもわかった。だが、それでも、あまり気分のいいものでは、ないな」
少し悲しそうに笑う千冬。弱い千冬だ。
ああ、ダメだ。そんな顔するなよ、千冬。そんな顔見せられたら、
「我慢できないじゃないか」
「え？」
俺は千冬を抱き寄せると、そのままベッドに押し倒した。
「な、なにするんだっ？」
「なにって、男と女がすることなんて一つしかないだろう。それに、ここしばらく千冬と会えなかったから溜まってるんだよ。千冬だってそうだろ」
「しかし、今の私と美鶴は教師と生徒で……」
といい訳をする千冬の口を、また自分の口で塞ぐ。先ほどよりも長く、深く、攻めるように口付けを交わす。
「さて、嫌とはいわせないぞ。いうんだったら、そのたびに口を塞ぐことになる」
「……やっぱり、卑怯だ」
「何とでも。それで、どうする？」

千冬は恥ずかしそうに顔を赤くし、悔しそうに顔を背けると、首を小さく縦に振った。

そうして、高校生活一日目は過ぎていった。

変わらない者たち（後書き）

これってＲ－１５にしたほうがいいのでしょうか？
誤字脱字あれば報告お願いします

それぞれの戦い（前書き）

なんだか、このままいくと鈴だけあんまり変らないことになりそうです
さてどうしよう

それぞれの戦い

「寮っていいな。準備しなくても食事が出てくるんだから」
「そうだな」
高校生活二日目。
俺と一夏。箒は朝食を食べに食堂へと来ていた。世界中から生徒が通っているだけあり、メニューも国際色豊かなこの学校。
俺はとりあえず、洋食セットを頼むことにした。
「いいよな、このスクランブルエッグ。ふわふわのとろとろだ」
「こっちの米も食ってみろよ。かまどで炊いたみたいだぜ」
二人して、楽して食事にありつける幸せをかみ締める。
「そんなに嬉しいのか？」
「まあな。朝の時間は数分でもすごい貴重だ。仕事が少ないほどありがたい」
一夏はは半分一人暮らしみたいなものだし、家事は必然的に自分で行うことになる。俺は、味覚音痴の母親の影響で食事だけは家族のものを用意している。
「織斑くん、隣いいかな？」
数名の女性とが、盆を持って声をかけてきた。
「もちろん、隣にどうぞ」
一夏ではなく俺が答える。
「やった、ありがとう」
「いえいえ、俺のは女性からのお願いは断らないんで」
「……出たよ、美鶴の八方美人」
呆れたように俺を見る一夏と箒。
失礼なヤツだ。第一、一夏にだけはいわれたくないな。
「あれ、師河くんと織斑くんって知り合いなの」
「まあな。箒もそうだけど、幼馴染なんだ」
女性の楽しく談笑を始める俺と一夏。それに比例して、箒が不機

嫌になっていく。
　わかりやすい。そしてヘタレだな、箒。もっと積極的にいかないと一夏はわからないぞ。
「へえ、師河くんって昔からこんな感じなんだ」
「そうなんだ、しょっちゅうナンパに付き合わされてさ。こっちはたまったもんじゃないよ」
「ナンパとは失礼な。ただ町に出かけて、美しい女性がいたら声をかけてるだけだろ」
　と、俺たちは話す。だが、
「でもさ、師河くんって本当はあんまり本気じゃないよね？」
「なにが？」
「女の子へのアプローチ」
　……へえ、なかなか鋭いこというな。少し話しただけでそのことがわかるとは、おもしろい子だ。
「なにいってるのよ、今時珍しいくらいの肉食系じゃない」
「そうかな～」
「そうだよ、ねえ？」
　さて、どう返事をしようか。
「そうだね。それは、自分で確かめてみたらどうかな」
　俺は席を立つと、先ほどの言葉を発した女性とに近寄り顔を寄せる。
　きぐるみのようなパジャマを着た女子だ。
「名前、聞いてもいいかな」
「布仏本音だよ」
　ああ、なるほど。布仏の人間か。盗聴器壊した腹いせか何か知らないが、やってくれるな、楯無。
「いつまで食べている！　食事は迅速に効率よく取れ！　遅刻したらグラウンド十週させるぞ！」
　食堂に千冬の声が響く。時間切れのようだ。
「残念、今回はここまで。また、次の機会にしよう」

俺は顔を離すと、顔を赤くしている一夏たちを無視して席に戻ると食事を再開する。
グラウンド十週は嫌だからな。

授業は相変わらず退屈だった。なにせ、兵器や武器についての知識を学ぶことは俺のライフワークのようなもので、特に最強の兵器であるＩＳについてなど、俺に教えられるものは千冬と同程度あると自負している。なので、授業中はもっぱら山田先生の胸を見ることに従事している。うん、大きいな。
それに比べて一夏はグロッキー状態。あの分では、新しくもらった参考書もほとんど読んでないのだろう。
そんなこんなで休み時間。地獄のような苦痛から開放される貴重な時間だ。
一夏の席に向かうと、昨日のように机に座る。
「お疲れ」
「……ああ」
返事が小さい。死にかけのようだ。
「美鶴、さっきの授業、山田先生は何語を話してたんだ？」
「主に日本語。専門用語は英語も混じってるな」
「そうか……」
そして、机に突っ伏す一夏。
そんな一夏を気にすることもなく、今日も今日とて女子が俺たちの周りに集まってくる。
マシンガンのように出される質問に、困惑顔の一夏。俺は適当に、答えていく。
「ねえ、千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの！？」
「え。案外だらしな……」
バアン！
「休み時間は終わりだ。散れ」

一夏の言葉は、千冬によって止められた。
都合の悪いことは口封じか。やれやれ、大人って汚いな。
「何かいいた気だな」
「なにもありませんよ、織斑センセ」
別に、ベッドの上での千冬の姿をバラそうなんて考えてませんよ。十八禁な上に、人に教えるにはもったいない。
「まあいい。ところで織斑、お前のＩＳの準備だが時間がかかる」
「へ？」
「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」
「？？？」
意味がわかってない一夏。これくらいわかってくれよ。
しかし、専用機か。国も大きく出たな。世界で二人しかいない男性操縦者を手元に置いておきたいってことか。
千冬に教科書の音読を命じられた一夏は、やっと状況が飲み込めたようだ。
バカウサギの気まぐれのせいで、現在ＩＳコアは４６７しかない。一つの国が保有する数は、あたりまえだがそれよりもさらに少数だ。その貴重な一つを、一夏のために使おうというのだ。
「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんですか」
話の中にバカウサギのことがあったせいか、聡い生徒が聞いてきた。まあ、珍しい苗字だしいずれはバレると思ってはいたが、早かったな。
「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ。
あっさりバラす千冬。それに、教室が沸き立つ。クラスに有名人の身内が二人もいたのだ。無理もない。しかし、
「あの人は関係ない！！」
箒は大声を上げた。バカウサギの話は、箒にとって地雷みたいなものだからな。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」
　さてさて、空気が悪くなったな。しょうがない、助け舟でも出すか。
「織斑センセ。俺には専用機ないの？」
「ない。ＩＳ一つ作るのにどれだけの資金と時間が必要だと思っている。コアも、そういくつも都合できるものじゃない。故に、今回は先着順で織斑のＩＳだけが作られることになった。試合の日には学園の訓練機を準備してやる。安心しろ」
　世間的には、一人目が一夏。二人目が俺ということになっているからだな。しかし、本音は別のところにある気がする。もっと政治的な、軍とか他国とかが絡むような……。有名人を身内に持つと大変だということだな。
「お互いがんばろうぜ、一夏」
「突然なんだよ？」
「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」
　俺は訳がわからないという顔の一夏を無視して席に戻る。
　しかし、一夏に専用機か。俺の対戦相手はお嬢様だと思っていたが、思ったより楽しめるかもな。

「安心しましたわ」
「何が？」
　昼休み。俺はお嬢様に誘われて屋上で昼食を取っていた。
　ちなみに二人だけ。一夏は箒と食堂に行った。二人だけにしてやったのだ。少しはがんばれよ、箒。
「織斑さんの専用機のことです。さすがに訓練機に乗った素人では勝負になりませんもの」
　一見、相手を見下したような発言だが、すべて事実だ。代表候補

生であるお嬢様は専用機持ちで、ＩＳの操縦時間も数百時間になっているだろう。
　それに対して、一夏は入学試験の時わずかにＩＳを操縦しただけだ。まぐれで山田先生に勝ったようだが、そんなもの考慮するには値しない。どんな兵器でも、十全に扱うにはそれ相応の時間が必要なのだ。
「ま、そうだな。俺もそのほうが少しは楽しめる」
「安心してください。私が織斑さんを下し、美鶴さんを心より満足させて見せますわ。それこそ、織斑先生以上に」
　あれ、千冬の話がここで出てくるのか？
「わたくしも女です。想い人の心が、どなたを向いているかくらいわかりますわ。もちろん、だからといって諦めたりしませんけど」
「まさかお嬢様からそのような言葉が聞けるとは、光栄です」
　かわいく笑うお嬢様に、俺は軽く答える。やれやれ、たくましくなったものだ。
「それで、美鶴さんはどうしますの？　訓練機を借りるおつもりですか？」
「いや、借りない。訓練機でも専用機でも、いきなり乗った俺がお嬢様に勝てるとは思えない」
　ＩＳに圧倒的な能力があるか、お嬢様に油断があるかしないと勝利は難しいだろう。打鉄に乗った俺がお嬢様に挑んでも、勝率はかなり低い。せめてもう少し訓練ができれば、ものにはなるのだろうが。これもまた、覆らない事実だ。
　実際、試験の日に対戦した千冬とは五分しか持たなかった。ＩＳに乗った千冬が化け物なのはわかっているが、五分しか戦えなかったのは無念だ。
　くそ、生身同士なら負けないのにな。
「じゃあ、どうしますの？」
　策はある。対抗手段も考えてはある。しかしそれは、詰まるところ、

「ただ、いつもの俺の戦いをするだけさ」
それだけの話だ。
「そうですか。それは、私も全力でいかなければなりませんわ」
そう笑うお嬢様は、楽しそうだった。とても楽しそうな、戦士の顔だった。
「さて、物騒な話は終わりだ。食事にしようぜ」
「そうですわね。わたくし、お弁当を作って参りましたの」
そういって、お嬢様は二人分のランチボックスを取り出した。
「準備がいいね」
「当然です。これも、美鶴さんをわたくしに惚れさせる戦いの一つですから」
自信満々にランチボックスの蓋を開けると、そこには色鮮やかなサンドイッチが詰まっていた。
「うまそうだな。いただくよ」
一つ取って口に入れる。さて、そのお味は。
「……」
「どうでしょう？」
期待に満ちた眼差しのセシリア。
「……これ、味見したか？」
「いえ、してませんけど」
それがなにか、とお嬢様はいった。
なにか、じゃねよ。お嬢様のサンドイッチの味。それはすさまじかった。
甘いようなすっぱいようなしょっぱいような。まるでお袋の作った料理のようだ。見た目がよかっただけに、なお悪い。
「試しに食べてみろ」
俺の食べかけも、お嬢様の口に入れる。最初こそ、間接キスだと気づいたのか顔を赤くしていたが、すぐに青ざめてくる。
「感想は」
「……これも、わたくしが乗り越えるべき戦いですわ」

「勝てるのを期待してるよ」
と、もう一つサンドイッチを口に入れる。やはり、すさまじい味だ。
「美鶴さん、無理はしなくていいですわ」
「これ食わないと、俺は午後の授業を空腹で過ごすことになるんだよ。この程度ならお袋の料理でなれてる」
それに、女が俺のために飯を作ってきたんだ。それを残すわけにはいかないだろう。
「……ありがとうございます。大好きですわ、美鶴さん」
お嬢様はそう、優しく微笑んだ。
不覚にも、かわいいと思ったのは黙っておこう。

それぞれの戦い（後書き）

とりあえず一巻完結を目指します

戦う意味（前書き）

鈴は一夏と美鶴のどちらのヒロインにしようか迷い中。どっちでもいいんだけど、バランス的に一夏かな？

戦う意味

「やっほー、お元気？　美鶴だけど、今大丈夫？」
『……今から寝るところだったんだけど』
電話の向こうから聞こえてきたのは、かわいらしい女の子の声。その声には、そこはかとなくダルさが感じられた。
「あれ？　時差を考えてもまだ昼間だろ？」
『徹夜で作業してたんだよ。こっちも社運がかかってきて、今は忙しいんだ。会社はどうでもいいけど、潰れるとＩＳの整備なんかが大変なんだよ』
「そうか、それは大変だな。で、お願いがあるんだけど」
『僕の話聞いてた？　今すごい忙しいんだけど』
「そうか、がんばれ。でだ、ちょっと準備してもらいたいものがあるんだけど」
『僕の話、まったく聞いてないんだね』
「聞いて欲しいのか？　ベッドの上でならいつでも聞くぞ」
『じゃあ、対価はそれでいいよ。僕も近々日本に行くことになるから、その時は優しくしてね』
「ああ、存分にな」
必要な物のリストはメールで送る、と伝え電話を切った。
「というわけで、女の子と寝ることになった。もちろん、エロい意味でな」
「なんでだよ！」
夕飯時の食堂。俺にとっては昼以来の食事だが、どれほど待ち望んだことか、まともな食事を。ああ、白米がうまい。味噌汁のダシがきいている。ビバ、日本食。
「お、お前は！　何か必要なものがあるからと電話したのではないのか！」
「そうだよ。楽しい食事の前に、やることはやっておきたかったか

らな」
「それがなぜ、セッ……っ！」
「セッ？　ああ、セックスか。おい、食事中だぞ。せっかく俺が表現を和らげてやったというのに。もう少しＴＰＯをわきまえろよ、箒」
　顔を真っ赤にする箒に、俺は呆れた。こういうマナーにはうるさいヤツだと思ったが。一夏と再会したせいでおかしくなってきたのか？
「う、うるさい！」
「それより俺としては恋人がいるのに、そう軽々と他の女生と関係持つのはどうかと思うんだが。弟としては怒るところだぞ、これ」
　千冬が彼女か、どうも違和感がある。千冬との関係はそう簡単にいい切れるものではないからな。運命以上宿命以下みたいな。
「あいわからずシスコンだな。心配するな、俺の千冬への愛は揺らぐことはない」
「まあ、そうだろうな」
　一夏は苦笑しながら、お茶をすする。なんだかんだで、一夏は俺と千冬のことを理解してくれてるからな。自分でも歪んでるとは思うからこそ、こういう理解者はありがたい。
「こ、コホン。それでだな、いったいどこに電話してたのだ？」
　気を取り直し、改めて箒がたずねてくる。まだ顔が赤いぞ。
「我が家御用達の武器会社。まあ、正確にはその支社みたいなものだけど。で、そこに彼女がいるからさ。月曜のために武器を都合してもらおうと思って」
「武器って、ＩＳ用の」
「まあな」
　へえ、と一夏と箒は返事をした。まあ多分、本当の意味をわかってないな。
「しかし、お前はどれだけ女と関係を持ってるんだ。男として、一人の女性を一途に思うべきではないか」

「世界の歴史遡れば、側室がいた偉人なんていくらでもいるだろう。それに、俺だって誰でもいいわけじゃない。ある程度の線引きはしてるさ」
　これは本当。今まで俺が望んで関係を持ったのは二人。ビジネス上の都合で一人。半ば襲われる形で一人だけだ。
「それより、そっちはどうなんだ。勝算はあるのか？」
「ああ、箒にＩＳについて色々教えてもらおうと思ったんだけどさ」
「一週間程度の付け焼刃では無理だ。なので、剣一本に絞る」
　つまり、だ。物覚えの悪い一夏ではＩＳの知識を少し覚えただけでは何の役にも立たない。なので剣を交え一夏もモチベーションを高め、できあがったところをお嬢様にぶつけるというわけだ。
　しかし、さすが姉弟。昔、千冬がしていた調整方法と同じだ。ＩＳの大きな試合の前は俺が相手になったものだ。昼は剣と銃弾を交わし、夜はベッドで互いをむさぼり合う。そして死んだように眠り、また戦う。いやはや、充実した日々だったな。
「まあ、悪くないな」
一夏は頭ではなく体で覚えるタイプだ。せめて、お嬢様の機体データや戦闘データがあれば何とかなるのだろうが、新学期始まって早々では満足にあるとも思えない。しかも、お嬢様だって日々成長しているだろう。なら、そんなデータなどに頼ってない知恵絞るよりは、自分を高めることに集中したほうがいい。
「で、どうだった？　手合わせした感想は」
　箒は全国大会で優勝する程度の実力だったな。それだと、一夏の方が幾分か上だと思うが。
「最初は俺が優勢だったんだけどさ」
「最後のほうは私も何本かとったぞ。相手をしている私が不甲斐ないと、一夏の訓練にならないからな」
　俺の予想が外れたな。昨日の一件、箒は一夏が絡むと周りが見えなくなるところからなにか問題を起こすと思ったが、そうでもなかったか。

「なんなら、明日から見学に来るか？」
「いや、お楽しみは取っておくよ」
それに、俺もやることがあるからな。

考えるのは、六年ぶりに再会した幼馴染二人のこと。
一人は、織斑一夏。私が、その、こ、恋をしている少年だ。出会いは小学一年生の時。それからずっと、恋をしてきた。その想いは離れていても色褪せることはなく、再会してからはさらに強くなったほどだ。
強く、かっこいい。そんな、大好きな少年だ。
もう一人は、師河美鶴。美鶴との出会いは、一夏よりもかなり後。その出会いは最悪で、最初は彼に対して嫌悪と恐怖しか持っていなかった。しかしそれも、最初だけ。同学年ではあるが、それは中学で一年留年したためらしく、本来は私と一夏よりも一つ年上の彼。美鶴は、難がある性格をしているが、厳しくも優しくもあり、それでも私たちにとっては兄のような存在になった。
それは、六年がたった今でも変わっていない。
高校生活初日に、私が感情に任せて振るった木刀を受け止めた彼がいった言葉。それは、私に対して確かな変化をもたらした。
それを感じたのが、今日の一夏との訓練だ。
恥ずかしながら、その時、私は浮かれていた。一夏と同じ時間を過ごせることに、一夏が私を頼ってくれていることに浮かれていた。
そんな私を、一夏はあっさりと負かした。仮にも、剣道で全国大会で優勝をした私が、あっさりと負けたのだ。
一夏は美鶴に手解きを受けていたといっていたが、それでも、私は簡単に負けすぎた。
最初は、その事実が受け入れられなかった、だが、数度も剣を合

わせる内にすぐわかった。
一夏は、私のことしか見ていない。ただまっすぐに、相手である私だけを見て、精神を研ぎ澄まし、剣を振るってきた。
まるで、愛しい相手だけを求めるように、剣を振るってきたのだ。
それはかつて見た、ただ互いを求めて戦う美鶴や千冬さんたちのようだった。まさしく、戦う者の姿だった。
その一夏の姿勢が嬉しく、また恥ずかしくもあった。一夏は純粋に私を求めてくれているのに、私はなんて汚れているのだろう。
怒りに任せ剣を振り、その場をごまかす為に剣を振り、浮かれた気持ちで剣を振るう。昨日、剣が一夏にかすりもしなかったのも、今日もまた勝てないのも当然だ。
私が同じ場所で立ち止まっている六年間で、想い人はずいぶんと先に行ってしまったようだ。
とても情けなかった。ひたすらに情けなかった。私を頼ってくれた一夏に、こんな醜態を晒すのが情けなかった。成長していない私が情けなかった。なによりも、弱い私が情けなかった。
汚れていて、情けなくて、醜悪で、弱い。だからこそ、私はこうも思った。
強くなりたい。
一夏のように、セシリアのように、千冬さんのように、美鶴のように、強くなりたい。
そう想った瞬間、今まであった心の靄がなくなった気がした。別に、一夏に対する思いや、複雑な嫉妬がなくなったわけではない。
それでも、剣を持ち一夏に対峙している間だけは、そんな不純な気持ちなどは一切ない。ただ目の前の一夏だけを、剣を振るう相手だけを見ていた。
その後は、やはり私が終始不利ではあったものの、何本か一夏から取れるようになった。
互いに剣を振り、技を競い、ひたすらに戦った時間は、この数年間味わったことがないほど充実していた。

だから、私は思う。今から、始めよう。篠ノ之箒の戦いを。一夏への想いも、剣の腕も、ＩＳの操縦も、姉さんとの関係も、すべて戦い乗り越えよう。
私の自慢の、二人の幼馴染に負けない。いや、勝てるように戦おう。

「頼もう」
授業も終わりそうそう、一夏と箒は訓練のため剣道場へと向かった。箒がやけにやる気だったのが印象的だ。それも空回っている感じではなく、とても充実しているような気だ。昨日もそうだったが、心境の変化でもあったのだろうか？
お嬢様もそうそう教室を後にした。昼休みに強烈な味のおにぎりを食べながら聞いた話では、アリーナを借りて鍛錬をしているらしい。
そして俺だが、対戦相手の二人が鍛錬をしているというのに、一人のんびり胡坐をかいているほど俺は慢心などしない。むしろ、今回の戦いは専用機を持たない俺が一番不利とさえ思っているほどだ。
なので俺も鍛錬をしようと思うのだが、相手がいない。一人でしようとも考えたが、ここ最近は戦闘をしていないので、どうせなら一夏たちのように対人でやり勘を戻したい。だが、俺と互角で戦えるものなど早々いるものではない。一番の理想は千冬なのだが、さすがに教師の仕事があるとのことで断られた。そうなると、次善の手はこの学園最強の生徒となるわけだ。
「やあ、美鶴くん。生徒会になにか御用かな？　悩める生徒の相談なら、どんなことでも聞くよ」
そう扇子を広げいやらしい笑みを浮かべるのは、更識楯無。この学園の生徒会長で、ＩＳ学園最強の肩書きを持つ女。ついでに、俺

とは旧知の仲。
「そうかい。じゃあ文句でも一つ。部屋にプライベートを無視して盗聴器や監視カメラを仕掛けるバカがいるんだがどう思う？」
「そんな迷惑なヤツがいるのかい。それは忌々しき事態だ。そう思うだろ、虚？」
「そうですね、お嬢様」
楯無の言葉に、苦笑しながら答える眼鏡で三つ編みの女生徒。
「はっ、どこで会ってもかわらないな。同じクラスの本音、あれは虚の妹だな」
「そうだよ。私からの入学祝と挨拶は気に入ってくれたかな？」
「ああ、嬉しくて涙が出そうだ。だから、今日はそのお返しに来たぜ」
俺と楯無は、共に笑顔を浮かべる。少なくとも俺は、友好的に笑っているつもりはない。
「それはありがとう。ところで、小耳に挟んだんだが、来週の月曜にクラス代表を決める決闘を行うそうだね」
「さすが、学園内でのことは何でも知ってるな。更識の名は伊達じゃないってか」
「師河の御子息に褒められるとは、私も鼻が高いよ。それで、今日の用事はそれが関係してると思うんだが、違うかい？」
「俺はただの不良息子だよ。それより、いっちょバトろうぜ」
まったく。俺は両親ほど立派な人間じゃないよ。それどころか、いつも心配ばかりさせている不出来な子供さ。それよりも、本題と行こうじゃないか。
「やっぱりそれか。どうせ、そんなところだろうと思ったよ。私を調整相手に選ぶなんて、まったく、君くらいのものさ」
「断るってのか？　校内ではいつでも襲って来いとかふれ回ってるのに、俺はダメなのかよ。それとも、女尊男卑の今は男なんかに構ってやれないとかいうのか」
「まさか、私は生徒会長だ。学園の生徒を差別なんかしないさ。そ

れに、美鶴くんに襲われるなら、それもまた悪くない」
「そうか、よっ」
俺は袖に隠していたナイフを取り出すと、楯無に投擲した。それが、開戦の合図だった。
「まったく、美鶴くんはせっかちだな」
それをいつの間にか手に持っていた鉄扇でな難なく弾くと、俺の意識の隙間を縫うように接近する。
「だけど、嫌いじゃない」
振るわれる鉄扇。それを今度は腰から引き抜いたリボルバー型拳銃で払うと、もう片方の手で拳を繰り出す。それを半身で避けた楯無は俺から距離を取った。
「まったく、物騒なものを出したね。それは人に向けて撃つものじゃないな。当たれば人間は即死だよ？」
「訓練弾だから心配ない、当たっても骨が砕ける程度だ。それに、遠慮なく頚動脈狙ってくるヤツにいわれたくないな」
「それは美鶴くんを信じての行動だよ。あれくらいじゃ、君を倒せない。女性にこれほど信を置かれているんだ、喜びたまえ」
「ああ、まったくだ。その調子で、思う存分かわいがってやろうか」
「それは楽しみだね。……虚、下がってなさい」
「はい、お嬢様」
それを皮切りに、俺は引き金を引き、楯無は鉄扇を振るった。その日の戦いは、日が暮れるまで続けられた。
最後に、この戦いはお互いが本気ではなかったため決着がつかず、決闘の日まで毎日行われた。そのたびに生徒会室を始め学校中の備品を破壊することになるので、同じく毎日のように反省文を書かされたのは秘密だ。

そして月曜日。待ちに待った決闘の日がやってきた

戦う意味（後書き）

次の一話で一夏対セシリア
その次に勝者対美鶴ですね
箒と楯無はこんなキャラでよかったか？
感想、ご意見お待ちしています

銃対剣（前書き）

連続投稿行きます
一巻の前半部分が終わる予定です

銃対剣

「やる気は十分ってところか」
「ああ」
月曜の授業が終わり、これから放課後という時間帯。俺は一夏と箒に声をかける。
「調子は、どんな感じだ？」
「やれることはした。あとは全力でぶつかるだけだ」
「今の一夏なら、代表候補生だって、美鶴にだって勝てるさ」
「いや、それは大きく出すぎだよ」
と、箒にツッコミを入れる一夏。
「そんな弱気でどうする！　初めから負けるつもりで戦おうというのか、一夏は！」
「ああ、そうだな、そうだった。まずはセシリア。次は、美鶴だ。今日こそ、俺が勝たせてもらう！」
「ああ、楽しみだ」
一夏と箒。なかなかいいコンビだな。この一週間の間でずいぶん距離が縮まったようだが。なんだ？　キスくらいはしたのか？
くそ、失敗した。一夏たちの部屋の盗聴器やカメラ破壊するとき、俺用の盗聴器でも仕掛けておくんだった。
それはさておき、
「で、一夏のＩＳはどんな機体なんだ？」
俺が疑問を口にした瞬間、二人の空気が凍った。
「どうした？」
「それが、その……」
「まだ、来てないんだ？」
なにがだよ。
「ＩＳが、来てないんだ」
「はぁ！？」

俺は珍しく、マヌケな声を上げてしまった。
決闘前のこの時間帯で、まだＩＳがない？　俺は昨日の内にでも届いて最低限、フォーマットやフィッティング。簡単な動作や武装の確認くらいはしたものと思っていたが。
「……がんばれ」
「がんばれ、じゃねえよ。どうすればいいんだよ、美鶴！」
どうすればいいと聞かれてもな。
「おっと、もう時間だな。俺も準備があるから、先に控え室に行くわ。健闘を祈る」
「う、裏切り者！」
「は、薄情者！」
幼馴染二人が何かいっている気がするが、気のせいだと思おう。

「来ましたか」
「ああ、遅れて悪かったな」
俺の控え室のモニターには青いＩＳ、ブルーティアーズに搭乗したお嬢様と白いＩＳに搭乗した一夏が映っている。
どうやら、一夏のＩＳは時間内に間に合ったらしい。名前は、白式か。見た目まんまの名前だな。
「それがあなたのＩＳですか。なるほど、いい機体ですわね」
「セシリアのＩＳだって、まるで騎士のように気高さを感じるぞ」
「お褒めにあずかり光栄です。さて、こうして対峙しているというのに何時までも話しているだけ、なってのは味気ないですわね」
「そうだな」
一夏は右手に、刀状の近接ブレードを展開する。なるほど、一夏の専用機というだけあって、ぴったりな武装だ。射撃訓練をしていないこともあり、今の一夏には最適な武器だろう。
「それでは、始めましょう」

「それじゃあ、始めよう」
最初に動いたのはお嬢様だった。六十七口径特殊レーザーライフル、スターライトｍｋ？より、鋭い閃光が放たれる。
一夏はそれを回避しようとするが、間に合わず肩の装甲の一部が持っていかれた。今頃、一夏はブラックアウトこそしないにすれ、味わったことのない気持ち悪さの重力を体感していることだろう。
それにしても、今の銃撃。俺にいわせればまだ荒いところがあるが、それでも速く正確な銃撃だった。射撃の正確さなら、間違いなく一学年トップクラスだ。
それに反応した一夏もさすがといえばさすがだが、如何せん機体がまずい。まだ初期設定のあの機体では、一夏との反応がかみ合っていない。あれでは、避けられるものも避けられないだろう。ただでさえ、遠距離武器への対応は最低限しか教えてないからな。
「今のを避けますか。さすが、美鶴さんに手解きを受けたというだけはありますね。銃撃への反応速度は、賞賛に値します。しかし、それだけにどこか動きがぎこちないようですが……？」
「悪いな。こっちはまだＩＳに乗って日が浅いんだよ」
「本当に、それだけでしょうか？」
果敢にお嬢様に斬りかかる一夏だが、そのすべてをお嬢様の銃撃が阻む。なるほど、どうも一夏にとってお嬢様は相性最悪の相手のようだ。
この試合のポイントは、いかに一夏がお嬢様の懐に飛び込むかがポイントだな。
「……まさか、まだ一次移行していないのですか？」
なかなか鋭いな、お嬢様。一夏の動きを僅かに見ただけでそこまでわかるとは。さすが、入学試験主席。教官を実力で倒したのも、頷ける。
「だったらなんだってんだ！」
コツを掴んだのか、お嬢様の銃撃を回避しながらも、僅かに接近する一夏。それでも、まだ剣の間合いよりは遥かに遠い。

「なるほど、そういうことでしたか……。しかし、初期状態でそこまでの動きが出来るのですか。さすがは織斑先生の弟、美鶴さんの友。それとも、あなたの才能によるものでしょうか。どれにしても、残念です。もし一次移行していたら、心躍る戦いができたでしょう。それが、とても残念ですわ」
「もう勝った気でいるのかよ」
そりゃな、今のところ一方的だし。直撃こそないものの、一夏のシールドエネルギーは確実に削られてる。一夏だって距離を詰めてないわけではないが、これは一夏のエネルギー切れのほうが先だ。それに、お嬢様はまだ手札を残しているようだし。
「そうやって油断してると、足元掬われるぞ」
「ぜひ、掬ってみてください。そのほうが、わたくしも楽しめますわ」
「なら、期待にそえてやるよ！」
それから、二十七分が過ぎた。
一夏も徐々に動きはよくなってきているとはいえ、それでも白式は中破。シールドエネルギーも残り少ない。
それに対して、お嬢様はほぼダメージなし。それでも油断することなく、獅子が兎を狩るように確実に一夏を追い詰めていく。
現在、お嬢様と一夏の距離は、およそ二十七メートル。このままでは、一夏の負けで決まりだろう。そこで、一夏が勝負に出た。機体を無理やり加速させると、お嬢様に突撃を始める。
「っ！　捨て身の特攻ですか。そんなものが通用するほど、わたくしは甘くありませんわ」
ライフルを構え、一夏を打ち落とそうとするお嬢様。だが一夏は、無理やり白式の軌道を変えることで、直撃を避ける。
だが、それは直撃を避けているだけ。銃撃は白式の装甲を破壊しているし、絶対防御こそ発動させないが、シールドエネルギーは僅かしか残っていない。またそのダメージや、機体にかかる空気抵抗や圧力は一夏を苦しめているはずだ。

それでも、一夏は止まらない。お嬢様に向かい、ひたすら突撃する。
結果は、一夏に軍配が上がった。シールドエネルギーが切れる前に、一夏はお嬢様の懐に飛び込み、加速の勢いを乗せた突きを放つ。
それはお嬢様の胴を守るシールドエネルギーを貫き、絶対防御を発動させた。肉を切らせて骨を絶ったということだ。
「まだまだ」
一夏の攻撃は止まらない。剣を構え直すと、今度は切り上げるように斬撃を放つ。
その時、俺は思った。
「こりゃ、一夏の負けだな」
そう、剣を構え直す時に俺は見た。左手を閉じてはまた開いているところを。あれが出る時は、大抵簡単なミスをするのだ。
きっと、千冬も今頃同じことを考えているだろう。
「わたくしを、なめるな！」
お嬢様が吼えた。それは、およそ普段の姿からは考えられない大声だ。
一瞬で左手に近接武器、インターセプトを一瞬で展開すると一夏の剣を防ぐ。そこから、流れるような動作で蹴りに繋げ、一夏を弾き飛ばす。そこに追い討ちをかけるように、スカート状のアーマーから弾道ミサイルが放たれた。
爆風が、一夏を飲み込む。この試合を見ている観客のほとんどが、お嬢様の勝利を疑わなかっただろう。
「……ったく、あいつはマンガの主人公かよ」
そして、その結果がわかっていたのは俺と千冬だけだろう。
煙が晴れる。そして、その中からは新たな形を成した白式が現れた。フォーマットとフィッティングが終了したのだ。
しかし、この土壇場で一次移行とは。昔から無作為にフラグを立ててはは、それに気づかない鈍感振りと、アニメやマンガの主人公みたいなヤツだとは思っていたが。

「けど、どっちにしろ勝ち目は薄いな」
それよりも肝心は、
「あの刀。雪片か」
それはかつて、千冬の専用ＩＳの装備の名前だ。あの刀とワンオフ・アビリティが千冬を世界一に導いた。
それがどうだ。
「ワンオフ・アビイティまで同じか。さすがは姉弟。俺としたことが、妬けるじゃないか」
雪片の刀身が、光に包まれる。間違いない、零落白夜だ。本来なら二次移行しないと使えないはずだが、どういうわけだか一次移行の段階で使えている。
「さてさて、どういうことだろうな」
一夏は先ほどまでとは比べ物にならない反応速度で、お嬢様の銃撃の雨を掻い潜る。
そして、
「勝者、セシリア・オルコット」
勝敗が決した。

「まあ、がんばったんじゃねえの？」
一夏の試合の後。次の試合までの間に、千冬が俺の控え室に来た。
敗因は、一夏のエネルギー切れ。それがなくても、四つのビットが一夏を狙ってからそれで詰みだな。まっ、お嬢様の切り札を出させたんだ。ビギナーズラックとしては上々だろう。
「どうだ、千冬。姉のしては嬉しいんじゃないか」
「織斑先生だ」
「二人しかいないんだ。硬いこというなよ」
俺の言葉に、千冬はため息をもらすと、少し恥ずかしそうに、
「まあ、そうだな。少しくらいは、褒めてやるか」

「……千冬ってさ。本当にかわいいな」
「なんだ、急に」
いや、別に。改めてそう思っただけだよ。
「それで、一夏は？」
「ピットに帰ってきた途端、気絶した。どうも無理な軌道が祟ったらしい。もしかして、骨にひびくらいは入ってるかも知れん」
まあ、その程度で済めばラッキーだろ。下手すれば、骨が折れてたかも知れないからな。
「今は、篠ノ之がついている」
「それで、山田先生はお嬢様。千冬は俺の様子を見に来たのか」
「そうだ」
お嬢様の補給と休息が終わり次第、こちらに連絡が来るようになっている。そうしたら、俺の出番だ。
「それで、本当にいいのか？」
「なにが？」
「それで、試合に臨むのか？」
「違うね。俺は試合をするんじゃない。戦いをするのさ」
俺は、ニヤリと笑った。
すると、千冬は呆れたように、また息を吐いた。
「お前は昔から無茶をするヤツだと思っていたが……」
「まっ、現実問題。これが一番勝率が高いと思うぞ」
「私としては、どんな状況でも美鶴がそう簡単に負けるとは思えないが」
「心配してくれるの？」
「ああ。どっかの誰かさんは、恋人が弟の心配だけすると不機嫌になるからな」
そう、千冬は笑った。くそ、この前の意趣返しかよ。意地が悪いな。
『織斑先生、師河くん。オルコットさんの準備が出来ました。五分後、試合を開始します』

山田先生から通信が入った。いよいよ、というわけだ
「わかった。というわけだ、準備はいいな」
「もちろん」
俺は千冬に軽く答えると、軽く体を動かし解すと、アリーナへと向かう。だが、千冬が後ろから抱きしめてきて、動きを止められた。
「美鶴、最後に二つ。改めていうが、私は、お前のあんな姿を二度と見たくない」
「知ってるよ」
「本当は止めたいほどだ。戦うな、ＩＳに乗ってくれ試合をしてくれと。だが。私は止めない。止められない。それをしたら、私は美鶴が好きになった私でなくなってしまうからだ。だから、勝って来い。私以外に負けることは許さない」
千冬が、弱さを見せた。その弱さの原因は俺で、責任も俺にある。それと同じく、強さを見せた。俺を信じるという、強さも。そこまでいわれたら、男として答えないわけにはいかないな。俺は飾らない、いつもの調子で答えた。
「当たり前だ。で、もう一つは？」
「……別に、お前が誰と関係を持とうが構わない。だけど、こんな弱さを見せる私のことを一番に想っていてくれるか？」
俺はそれには答えない。その代わり、
「まっ、これが答えかな」
「っ！？」
千冬の唇に、俺の唇を重ねる。完璧な不意打ちだ。
「そんじゃ、行ってくる。続きは今夜ってことで」
「……ああ、楽しみにしていよう」
先ほどまでとは違う、いつもの千冬らしい声で送り出してくれる。そう返されるとは、千冬も逞しくなったものだ。
しかしその前に、三年間焦らしに焦らせ続けたお嬢様と、思う存分遊ぶ（戦う）としよう。

銃対剣（後書き）

一夏がこの時点でセシリアに勝てないのは当然ですね
原作でも負け越してるし
一巻で追い詰めたのは主人公補正という解釈です

三年目の約束（前書き）

セシリア対美鶴です
この話にはかなりご都合主義が入っています
そのような展開が嫌いな方は注意してください

三年目の約束

人間とは根源的に、強さに憧れを持つ生物だと思います。
長い歴史を見ても、人間は戦いと共にありました。戦いと共にその技術を発展させ、戦いに勝つため強さを求めました。
それは時には、各地にある伝承や創作の中でも見ることが出来ます。圧倒的な力を持つ英雄、ヒーローたち。未だに小説なので新たな英雄の物語が作られるのも、それの証明だと思います。
そして現実でいえば、ＩＳ。そして、織斑千冬。
ＩＳという兵器が作られて以来、多くのものがその強さに、よくも悪くも魅了されました。世界中の各国は、より強い力を手に入れようとＩＳの開発に着手し、その結果、世界の技術水準は上昇したでしょう。
そして、織斑千冬。世界最強のＩＳ操縦者。現役を引退した今でも彼女に憧れを持つ者は多く、この学園に来る人物の大半は彼女に会うために入学してきます。
それを不純だとは思わない。私もまた同じだ。強さに憧れ、今まで自分を高めてきました。
ただし、わたくしが憧れる強さは織斑千冬ではありません。
私が憧れるのは、師河美鶴です。
三年前のあの日、彼の戦う姿、強さを見せ付けられ、魅了されました。
その姿は、わたくしの父親を逆連想させました。
私の父親は、情けありませんでした。婿養子ということもあり、母に引け目を感じていたのでしょう。ＩＳが発表されて以来、それが謙虚となりました。それに対して、母は強い人でした。女でありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めた人です。厳しく、そして、またわたくしが憧れる人物です。
だが彼は父親とは違う、その強さ。それこそが、わたくしの理想

でした。
思い出すのは、彼との最後の会話。
「俺が好き？　なんだ、俺に惚れたのか。まあ、無理もないか。俺ってかっこいいし」
そう、自分に惚れたことを微塵も疑わない。それどころか、それこそが当然だと思っている。強い自惚れ、だが彼がそれをいうと自然と不快感はありません。
なぜなら、それは確かに当然なのだから。彼の強さに、魅せられない女性などいない。そう、いい切れました。
「まあ、お嬢様は見た目はいいし、なかなか見所があると思うけどな。でも、まだまだ。俺の女になるには、ぜんぜん弱いぜ。そんなんじゃ、名前で呼ぶ気も起きないな」
それは、その通り。その当時のわたくしは、弱かった。自分で現状を打破する力もないほど弱く、ただの子供だった。
だから、聞きました。どうすれば、わたくしを受け入れてもらえるのかと。
「強くなれ。俺が惚れるほど、強くなれよ」
「強い女性が、好きなのですか？」
「ああ、大好きだね。それで、思う存分戦いたい」
その目からは、わたくしではない、誰か、他の女性を見ている目でした。だけど、今の私には嫉妬する権利すらありません。なぜなら、わたくしは弱いのだから。
だから、わたくしは決めました
「……なら、強くなります。あなたを魅せつけるほどに、強くなります」
彼がわたくしに惚れるくらい、強くなると。
「楽しみにしてるぜ」
三年間、その約束を果たすために強さを求めてきました。金の亡者から、両親の莫大な遺産を守るため勉強をしました。その一環で、適正テストでＡ＋が出ました。遺産を守るために、政府に所属しＩ

Ｓの国家代表候補生となったのです。
そこで、ひたすらに強さを求めたのです。さまざまな知識を収め、ＩＳの操作技術を学び、女に磨きをかけました。
そして、数ヶ月前。世界初の男性ＩＳ操縦者として、彼の名前がニュースに流れたときは驚きました。そして、彼がＩＳ学園に入学すると聞いたときは運命だと思いました。
あの時の約束を果たす。彼に、私の強さを魅せつける。
そしてその時が、ついにやってきたのです。

俺がピットを出ると、すでに上空にはお嬢様が待っていた。
「よう、待たせたか」
「ええ、ほんの少し。ほんの三年ほど、待ちましたわ」
俺は恋人との待ち合わせに遅れた彼氏のように、お嬢様に声をかけた。それに、お嬢様は冗談交じりに答える。
「あまり、女性を待たせるものではありませんわよ」
「女性ってのはデートの準備に時間がかかるものだと思っていたんだよ」
それは、まるで恋人との会話のようだ。だが、それは決定的に違う。
お嬢様はＩＳに搭乗し、ライフルを油断なく構えている。
「ところで、どうでしょうか。わたくしのブルー・ティアーズは？」
「青がお嬢様によく似合ってると思うよ。あと、ＩＳスーツってボディラインが浮き出るからエロイよな」
「なんだか、褒められているのかセクハラされているのか微妙ですわね」
失礼な。心からの賛辞だよ。いいね、あの太もも。むしゃぶりつきたい。
「美鶴さんこそ、昔と変りませんわね。もう少し、着飾ったほうが

よろしいのでは？」
「悪いね。元がいいから、あまり服装には頓着しないんだ」
俺の格好は、動き易さと丈夫さを合わせ持つ黒の戦闘服に、防弾耐寒耐熱を追求し多くの収納スペースを持つコート。通信や暗視など多目的機能を持ったゴーグルで、顔の半分は隠れている。そして、１．５メートルほどのライフルを肩で担ぐように持っている。
その姿は、初めてお嬢様の前で戦ったときと同じだ。違うのは、あの時はお嬢様を守るために戦ったが、今度は倒すために戦うということだろう。
『し、師河くん！？　何してるんですか、早くＩＳを装着してください！』
ゴーグルから、山田先生の声が聞こえてくる。見れば、観客も騒ぎ立っているようだ。それも、当然か。
俺はＩＳに、ＩＳに乗らずに挑もうとしているのだから。我ながら、正気を疑うぜ。
「まっ、いつまでも話してるのもなんだな。そろそろ、始めるか」
「ええ、そうですわね」
そして、
「さあ、戦おう」
「さあ、戦いましょう」
互いのライフルから、同時に銃撃が放たれる。それと同時に、互いが横へ跳んだ。
瞬間、俺にはレーザーが、お嬢様には実弾が襲い掛かる。
俺はレーザーが地面に着弾した余波を利用し、さらにもう一歩地を蹴り跳んだ。ゴーグルの右レンズには、連動しているライフルのスコープから視覚情報が送られてくる。それを下に跳びながら、駆けながらお嬢様へ銃弾を放った。
「やっぱ、モニタで見るよりも速いな」
レーザーから逃げるように走り出す。もちろん、反撃するのも忘れない。ヒットアンドアウェイを心がけた戦法。性能差がありすぎ

るＩＳと生身では、回避に専念して少ない機会を掴むしかない。
隙を見つけては、飛翔するＩＳに銃撃を放つ。そのうちの一発が、お嬢様を捕らえた。それはＩＳのシールドを突破し、絶対防御こそ発動させないが、機体の一部を破壊した。通常の銃器ではありえないことだ。
「さすがに、正確な射撃ですわね。それに、ＩＳのシールドを貫くなんて。アンチマテリアルライフルかと思いましたが違いますわね」
正確には、アンチＩＳライフル。先週、電話で頼んでいたものはこれだ。既存のＩＳ用ライフルを人間が使える大きさにしたのはいいが、反動が大きすぎて常人には使えなくなったという一品だ。多分この学園で満足に使えるといったら、俺と千冬と山田先生くらいかな。
「なら、わたくしも全力で行きますわ」
お嬢様が、腰部から弾道ミサイルが放たれる。あれ、当たったら怪我じゃ済まないよな。
「うんじゃ、逃げますか」
俺はミサイルに背を向けて逃げ出した。といっても、ミサイルは俺をまっすぐに追いかけてくるし、そのスピードは俺より速い。徐々に、俺との距離は狭くなる。そして後少し、あと少しで俺を捕らえるというところで、俺は跳んだ。そして背後を向きながら、ミサイルへと銃弾を一発撃ち込んだ。結果、ミサイルはもう一つのミサイルも巻き込む形で爆発した。
俺は爆風に煽られながらも受身を取り、地面を転がる。熱はコートが防いでくれるが、衝撃はそうではない。確実に、俺の体を痛めつける。
「やばいな……」
だが、俺の顔に浮かぶのは苦痛ではない。笑みだ。獰猛な、獣のような笑み。
すごく楽しい。死ぬか生きるかの瀬戸際で、命をかけて戦う。こんな気分は久しぶりだ。自然と、口に笑みが浮かぶ。

「楽しそうですわね」
「ああ、お互いにな」
見ると、上空ではお嬢様が笑っていた。その顔つきは、貴族のお嬢様の顔などではない。間違いなく、戦う者の顔だ。
「では、お次はこれでどうでしょう」
瞬間、俺はその場から離れた。俺の中のなにかが、その場を離れろと叫んだ。急に動いたせいで体に負担がかかるが、そんなことは気にしていられない。
それとほぼ同時、俺の背後、先ほどまで俺がいた場所にレーザーが放たれる。死角からの、ありえない攻撃だ。
「さすがに避けますか」
「おいおい、なんだこれ」
見ると、俺を包囲するように四つのビットが浮かんでいる。それは、先ほどまでお嬢様のＩＳについていたはずの部位だ。
「さあ、踊りましょう。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」
「ああ、喜んで。お嬢様！」
四つのビットより、レーザーが放たれる。
単純に考えて、今までの四倍の手数だ。一夏には使わなかった武装。まちがいなく、これがお嬢様の切り札で、全力だ。
降り注ぐ銃撃は、まるで銃雨ともいうべきだろう。せめて死角からだけなど、わかり易い攻撃ならいいのだが、そんあ単純なものではなく、四方あらゆるところから俺を攻めるから、それを避けるのが精一杯だ。せめてレーザーライフルの射撃なら、まだなんとかなる。俺だって、親父ほどではないが、相手の意思を感じ取り攻撃を先読みできなくもない。だが相手がビットではそれも難しい。なにせ、攻撃を命じる者と攻撃が来る場所が別なのだから。かろうじて放つ銃弾も、体勢が安定しないせいか僅かにブルー・ティアーズをかするのみ。このままじゃ、いつかレーザーに貫かれるか、俺の体力が尽きる。

「……っ！」
額に痛みが走った。どうも、レーザーの衝撃で地面より小石が飛び、額を切ったらしい。額が切れ、血が流れ落ちる。
戦いで、血を流す怪我をしたのは久しぶりだ。それだけ、お嬢様が強敵だということだろう。
いいな、ますます楽しくなってきたぜ。それこそ、まるでいい女と熱い夜を過ごすように。今にも、イッてしまいそうだ！
「だけど、攻められっぱなしは俺の主義じゃないぜ」
俺はMじゃない。Sなんだよ。
チャンスはある。どうもこのビットを操っている間は、お嬢様はそれに集中するためにライフルで攻撃が出来ないらしい。それが装備上の欠点なのか、お譲様が未熟なのかはわからないが、確かな隙だろう。
そしてもう一つ。どうにも、一夏の時よりも威力がない気がする。最初はライフルではなくビットだからと考えたが、そうでもないらしい。おそらく、命中しても最低限死なない程度に調整しているのだろう。死にはしないなら手はある。
俺は、勝負に出るべく走り出した。襲い来るビットのレーザーは気にしない。一夏だって、これくらいの無茶はしたんだ。俺がしないでどうするんだよ！
「なにを考えているか知りませんが、関係ありませんわ。どんな策だって、わたくしのブルー・ティアーズが撃ち抜きます！」
四つのビットが同時に光る。ビットの向きを確認。それより、レーザーの軌道を予測する。俺はもっとも被害が少ない場所を予測し、レーザーの雨に飛び込んだ。体の数箇所に、熱のように痛みが走るが、それだけだ。ダメージこそあるが、まだ十分戦える。レーザーが地面に命中し爆風が起きると、俺はさらに加速した。そして向かうは、
「もらったぜ」
俺はお嬢様の真下にすべり込むように跳ぶと、無理やり体を捻り

真上を向く。お嬢様の形のいいヒップが見えた。
そこで、俺はライフルを放つ。
本来なら死角である場所から放たれたそれは、ハイパーセンサーがあるにしても、お嬢様の反応を遅らせる。
銃弾は機体を捕らえたが、それは足の装甲を僅かに破壊するだけでとどまった。だが、空中という隙だらけの場所にいる俺へ、次の攻撃はなかった。
ライフルは使えない。ビットでの攻撃も、今の銃撃で集中力を乱されたためか遅れている。
ならば、ここが使いどころだ。
俺は地面を転がりながらコートよりボールのような物体を取り出すと、お嬢様へと投げつけた。
お嬢様は反射的にだろう。自分へと向かうそれを、ビットの一つを使い撃ち落した。
素早い反応。そして、体に浸み込んだ対応だ。それを行えるようになるまで、どれほどの研鑽を積んだのだろうか。その努力は、尊いものだ。
だが、今はそれが裏目に出る。
レーザーがボールを貫いた瞬間、光が弾けた。その強烈な光は会場全体を照らし、観客の視界をもしばらくの間奪った。
そして、もっとも被害を受けたのはお嬢様だろう。
ＩＳにつまれているハイパーセンサーは、搭乗者の視界を強化する。それは、数百メートル先の、人間の口の動きを捉えるほどだ。だがそれは逆にいえば、見たくないものも見えてしまうということだ。
俺が放ったフラッシュバンは、完璧にお嬢様の不意をついた。そして、ハイパーセンサーの見えすぎる能力もあり、お嬢様の視力を完璧に奪った。だが、それでは不十分だ。これくらいなら、ＩＳはすぐにお嬢様の視覚を回復させるだろう。
なので、すぐに次の行動に移る。

俺は空になったライフルのマガジンを変えると、ビットへと銃弾を放つ。本体から離れたビットに、シールドはない。銃弾はやすやすとビットを貫き、破壊した。

ビットより、無作為にレーザーが放たれる。だが、そんな射撃では到底俺は捕らえられない。

俺は乱発されるレーザーを避けながら、確実にビットを落とす。一つ、また一つ。

そして、最後の一つ。その一つがレーザーを放つが、それは俺を狙うでもなく明後日の方向へ飛んだ。まだ、視力は回復していない。俺はそれを確認すると、最後のビットをライフルで狙う。

さて、ここでいい訳をしておこう。俺は、別にお嬢様を舐めていたわけではない。むしろ、強敵とさえ思っていたほどだ。ＩＳに乗っているとはいえ、お嬢様は確かに強かった。だから、俺が勝ったらオルコット、と苗字で呼ぶくらいはしようかなと考えていた。しかし、それこそが油断だったんだろう。まあ、俺もまだまだ子供。自分の力を過信しすぎたツケというわけだ。

さて、なにがいいたいかというとだな。

俺が避けたはずのレーザー、それが弧を描き、背後より俺を飲み込んだ。

強い。それは最初からわかっていたことですが、相手にしてみて改めて実感しました。

生身でありながら、わたくしの銃撃を避け。体勢を崩しながらもわたくしに反撃する。その射撃はわたくしのシールドエネルギーを確実に減らします。あんなアクロバティックな動きをしながら、この正確さ。尚且つ、あれほどの威力のライフル、どれほどの反動を持つのかもわからないものを扱ってである。重火器については美鶴

さんに分があるとは思っていましたが、これには舌を巻かざるを得ません。
さらに、的確な判断で、最善の手を打つ。わたくしにはない、多くの戦闘経験からくるものでしょう。
そしてなにより、戦いを楽しんでいます。
ＩＳ対人間。明らかに不利で、一歩間違えれば怪我では済まないこの状況で、彼は笑っているのです。
万が一のためにレーザーの出力を下げてこそいますが、それでも地面の形を変える程度の威力はあります。当たればその結果は、いうまでもありません。
にも関わらず、笑っています。それはまさしく、三年前に見た彼の姿。わたくしが憧れた、戦士の顔。
だからこそ、わたくしも笑いました。この心躍る戦いを、思う存分楽しみました。
彼の一手にわたくしが答え、わたくしの手に彼が答える。
この瞬間、この場所にはわたくしと美鶴さんしかいない。観客も誰も、織斑千冬でさえ、わたくしたちの邪魔は出来ない。美鶴さんはわたくしだけを求め、わたくしは美鶴さんだけを求めました。それがとても嬉しく、幸せだった。
わたくしたちは恋人のように、互いを求め合ったのです。
音楽はライフルとブルー・ティアーズの銃撃音。踊るのは、わたくしと美鶴さん。何時までも、この円舞曲を踊っていたい。そう思いました。
ですが、終わりの時が来たのです。
わたくしの視界が白に染まったかと思うと、瞬間、暗闇に閉ざされました。
すぐに美鶴さんの策に嵌ったと理解したわたくしは、ビットで銃撃を始めました。命中など考えない、視力が回復するまでの時間稼ぎです。
ＩＳの生体機能補助の役割が視力を回復させると、ちょうど美鶴

さんが三つ目のビットを破壊したところでした。
すぐに反撃に出ようと思いましたが、その案を却下します。ここでビットに美鶴さんを攻撃させても、避けられるでしょう。
現状では、わたくしが不利。ですが、まだ最後の札はあります。そして、美鶴さんはまだわたくしの視力が戻ったことに気づいていない。美鶴さんがフラッシュバンを使ったように、わたくしもここで切ることを決めました。
不安はあります。これはまだ制御が完全ではなく、大事になる可能性さえあります。
ですが、ここで負けるのはお断りです。
織斑さんも美鶴さんも、死地に活路を見出しました。ならば、わたくしもできない道理はない。
四つ目のビットの出力を最大に。これが直撃すれば美鶴さんといえどただでは済まないので、狙うは美鶴さんの足元。衝撃で意識を奪うことを狙います。
大切なのは、イメージ。策が成功するのを想像し、何より、勝利を想像する。
そして、レーザーが放たれました。その攻撃に当然美鶴さんは反応しますが、それは美鶴さんを狙うのではなくまったく別の方向へ飛んで行きました。
そこで美鶴さんは、ビットへライフルを向けます。
だけど、それこそがこの攻撃の意図。レーザーは、いや、銃弾は直進するものという常識の裏をつく不意の一撃。
レーザーは弧を描くように旋回しました。
ＢＴ偏向制御射撃、フレキシブル。これが、わたくしの本当の切り札です。
わたくしの狙い道理、それは美鶴さんの背後より迫り、美鶴さんを飲み込みました。
今までにない、破壊音。美鶴さんは爆風で起きた埃と煙で姿が隠れてしまいます。

ビットを最大稼動しての射撃です。もちろん威力も、今までで最大。
『し、師河くん！？　医療班、すぐに師河くんの救助に向かってください！』
山田先生の声が聞こえる。わたくしたちが通信を無視するから、スピーカーに切り替えたのでしょう。
だが、わたくしはまだ油断はしません。確かに、わたくしの策は成功しました。
しかし、あっけなさ過ぎる。美鶴さんがここで終わるはずがないと、わたくしには確信がありました。
そこで、
「っ！？」
全身に、悪寒が走ります。今までにない感覚。……いえ、これは覚えがあります。三年前も感じた、感覚。
その名前は、畏れです。強者が放つ、絶対的な気配です。
それは地上、美鶴さんが立っていた場所から感じられました。
そしてそこから、
血のように紅い眼が、わたくしを見つめていたのです。

三年目の約束（後書き）

この二次創作で書きたかった話の一つ。人間対ＩＳがテーマです
もちろん、ご都合主義のとんでも展開のチート主人公です
くり返しますが、ここまで読んで不快な方は引き返してください
受け入れてくれる方は、続きをどうぞ

決着。そして……

「し、師河くん！？　医療班、すぐに師河くんの救助に向かってください！」

山田先生が、血相を変えてマイクに叫ぶ。

それも当然。教え子が生身でＩＳと戦闘をしているのだ。これで心配しないというのなら、教師失格だろう。

そしてそれは、私も同じ。もともと、美鶴の戦闘には賛成できない。これが生身対生身やＩＳ対ＩＳならば問題ないが、これは話が別だ。

思い出すのは、第二回モンド・グロッソ決勝戦の日。思い出したくない、忌々しい記憶だ。トラウマといってもいいかもしれない。

だが、私は美鶴を止められなかった。美鶴は戦いを邪魔されることを嫌っているし、それは私も同じだ。私も同じ、良くも悪くも戦士なのだから。

試合中もそうだ。美鶴が危険な動きをするたび、試合を止めようと思った。しかし、美鶴とオルコットの戦いを見るうちに、止められなくなった。

互いに、楽しそうに戦う姿。常識からかけ離れた、その圧倒的な戦い。人間は強さを恐れる生き物だ。だが、それは生半可な強さの場合。人が安易に想像できるよな弱い強さだ。だが、それを超える強さ、戦いは人間を魅了する。例えるならば、テレビで放映されるような格闘技の試合。本来、暴力と蔑まれても可笑しくない格闘技も、強者と強者のぶつかり合いえは人を虜にし、惹きつける。

そして、今繰り広げられている戦いだ。最初は騒いでいた観客も次第にその光景に魅了されていった。

それは、私も同じ。その光景は、弟と同じ年の少女に嫉妬するほどにだ。この戦いは、美鶴だけでは成り立たない。それと相対する強者が存在するから成立し、惹きつける。私ではない、別の戦士。

私以外に、美鶴を惹きつける女だ。
ふと、自虐的に笑みを浮かべる。
何がブリュンヒルデだ。私も、ただの女ではないか。
「織斑先生！　なに笑ってるんですか！？」
「山田先生、救援の必要はない。レーザーは師河に直撃していなかったし、直前で回避運動をしていた。そこまで心配する必要はないだろう」
嘘だ。今すぐ美鶴の下に向かいたい。だが、向かわない。
思い出すのは、あいつの言葉。
「恐怖を感じる？　ならば、戦え。戦士ならば、戦うことで解決できるはずだ」
ならば、私も戦士として戦おう。この恐怖に、負けないために。
美鶴が好きでいてくれる私であるために。

身体情報確認。体の全身に強い痛み。爆風の衝撃と飛礫によるものと判断。コート上からだったため貫通はなし。ただし骨折、もしくはヒビが入っていると思われる部位数箇所。ゴーグル右レンズ破損。ライフルスコープとの接続遮断。頭部に痛み。傷が広まったと考えられる。ライフルに破損あり。残り数発が限度と思われる。以上、戦闘中止を推奨。
自己分析としてはこんなもんだろう。
結果としては、お嬢様にしてやられたわけだ。まさかレーザーが曲がるとはな。ＩＳに常識は通じないってことか。
俺は立ち上がりながら、上空のお嬢様を見つめる。
ああ、すばらしいな。まさか、ここまでとは思わなかった。
千冬にも、楯無にも劣らない。……いや、ここで他の女の名前を出すのは無粋だろう。
ああ、認めるさ。俺は、お嬢様に惚れちまったようだ。いや、も

うお嬢様とは呼べないか。
「やはり、まだ立ち上がるのですね。そうでなくては、わたくしが追い求めていた美鶴さんではありません」
ゴーグルより、お嬢様の声が聞こえる。いや、違うな。頭の奥から聞こえてくるような感じだ。
「それに、その眼。やっと、本気になってくれたということでしょうか？」
「……ああ、そういうことか」
道理で、こんな怪我だらけで立ち上がれる訳だ。
俺は生命の危機に陥ったり、気分が高鳴ると目が紅くなり、身体能力が上昇する。理由はわからないが、原因は予想がつく。まあ、ドーピングみたいなものだと思えばいいさ。
他の観客たちには見えないが、対峙しているお嬢様にはレンズが破損したことで見えるのだろう。
そういえば、この眼を初めて見せたのもお嬢様だったか。
「なあ、再開しようと思うんだけど、その前に聞きたいことがあるんだ」
「なんででしょうか？」
「名前、聞いてもいいか」
「っ！」
お嬢様が、弾かれたように俺を見る。言葉の意味は、理解できたようだ。
ああ、そうだよ。そういうことさ。わかってるんだろ、お前には。だから、いえよ。それだけでいいんだ。
さあ！
「……セシリア。セシリア・オルコット。それが、わたくしの名前ですわ！」
そうセシリアは名乗った。嬉しさを抑えきれないのだろう。顔はこれでもというほど笑顔で、とても魅力的だった。
「セシリア、大好きだぜ！」

「わたくしもですわ、美鶴さん！」
それと同時に、俺たちは動いた。
ビットが、俺の背後より狙いを定める。だがそれは、俺には見えていた。
振り返ることもせず、ライフルだけを背に向け、ビットを撃ち落す。
「背後を見ないで！？」
ああ、そうだよ。見ていないさ。でも、見えている。今の俺には、三百六十度すべてが見えているんだ。
ビットはすべて破壊した。だが、ライフルの破損も大きい。これ以上使うのは危険だろう。
俺はライフルを捨てると、リボルバーを取り出しセシリアに向ける。それと同時に、発砲した。
リアスカートよりミサイルが発射されるが瞬間、それは弾丸に貫かれ爆発した。それによりミサイル発射口を破壊し、セシリアのシールドエネルギーが削られる。
「今までよりも速い！」
それは当然だ。このリボルバーは長年愛用しているものだ。ＩＳには威力が不十分だったために使わなかったが、速さと正確さだったらライフルなどと比べ物にならないさ。
セシリアはライフルを構えなおすと、俺へと撃つ。だが、無駄だ。俺は先ほどまでよりも何倍も速く、地を駆ける。その速度はＩＳにも劣らないかもしれない。
だが、これはドーピングだ。時間制限も、その後の反動もある。何時までも避けているだけでは、ダメだ。
俺はセシリアに向かい合うように立ち止まると、リボルバーを構える。
「勝負だ、セシリア！」
「望むところです！」
セシリアと俺が、同時に動く。

世界が静止したと思うほど、時間がゆっくりになる。狙う、一つだけ。
互いに銃口を向け合う。そして、引き金を引いた。
勝負の差は、コンマ数秒。だが、音速に達する銃弾の速さの前には、それが決定的な差だった。
俺の放った銃弾は、セシリアのライフルの銃口を貫いた。
ライフルが破裂し、その爆発がセシリアのシールドを大幅に削る。銃弾では、たいしたダメージは与えられない。だが、ライフルを破壊するくらいは十分可能だ。
「まだまだ！」
セシリアの叫びが響いた。爆発の中より、インターセプトを構えたセシリアが急降下してくる。
「勝つのは、わたくしです！」
速い。そう思った瞬間には、セシリアは俺に肉薄していた。
振るわれるインターセプト。反射的に、それに銃弾を撃ち込む。
両者の武器が弾かれ、宙を舞う。
右手に痺れるような感触。しばらくは使い物にならないだろう。
「来いよ！」
「あああああああ！」
セシリアは拳を振り上げる。だが、構えが大きい。
もともと、ＩＳによって大柄になっているのだ。懐に入るには十分だ。
セシリアの腹部を、左手で殴りつける。手には、何かに阻まれるような感触。これがシールドなのだろう。
だが、そんなことは気にしない。足を踏み込み、腰を入れ、全力で振りぬく。
「うらあああああああ！！」
それはシールドを貫き、腹部に当たる瞬間に絶対防御を発動させた。俺よりも巨体なはずのＩＳが、宙を力なく飛んだ。そして背中から落ちると、地面を滑るり、止まった。

『……勝者、師河美鶴！』
ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが空になり、スピーカーから山田先生の声が響いた。
会場が、沸きあがる。途端に、アリーナに救急班が入ってきた。
セシリアのＩＳが消えて、待機状態に戻る。
これで、試合は終わりだ。生身でＩＳに勝つという、常識外れなことをやってのけた俺は、少しは喜ぶべきなのかもしれない。
だが、まだだ。まだ、終わっていない。
「そうだろ、セシリア」
「当然、ですわ」
セシリアは、笑って立ち上がった。ＩＳに乗っていても、疲労は溜まる。それにセシリアは、俺の前に一夏とも試合をしたのだ。すでに、満身創痍といった様子だ。
それは、俺も同じ。すでにドーピングの効果は切れ、一気に痛みが押し寄せてきた。今にも、倒れそうなほどだ。
だが、まだ終わっていない。試合は終わったかもしれないが、戦いはまだ終わっていない。
「あと、一発ってところか」
「そう、ですわね。女性を、ここまで傷つけるなんて。紳士として失格でしてよ」
「そうか？　以後気をつけるとしよう」
お互いに、冗談をかます。そんな余裕はないのに、そんな状況でもないのに。
まるで恋人が互いを茶化すように、笑った。
瞬間、互いに駆け出す。相手だけを見つめて、走り出した。
全身が悲鳴を上げる。体が軋む。骨が悲鳴を上げ、止まれと叫ぶ。
だが、止まらない。止められはしない。
「セシリア！！」
「美鶴！！」
ここまできたら、性別による体格差や腕力など関係ない。どちら

も、一撃で終わりだ。勝敗を決めるのは、意地と執念だ。
拳と拳がぶつかり合う。痛みが腕を伝わり、全身に響いた。
それに耐えると、俺はセシリアを見る。すると、眼が合った。透き通ったブルーのきれいな瞳だ。
その眼が、すべてを語っていた。
「なにか、いうことは？」
俺が聞くと、セシリアは柔らかく笑う。
「……次は、負けませんわ」
そして、セシリアが崩れるように倒れた。俺はそれを抱くように支える。
意識のないセシリアを優しく、包み込むように抱いた。柔らかく、暖かい。撫でるように髪の毛に触ると、いいにおいがした。俺とは違う、セシリアの匂いだ。
それあ、妙に恥ずかしくて、気持ちよくて……。

そこで、俺の意識は途絶えた。

「……ん。っ！？」
眼が覚めたらと思ったら、全身に痛みが走った。もうどこが痛いのかもわからないほど、隈なく全身が痛い。
眠気など一気に吹き飛び、強制的に覚醒させられる。
「起きたか」
その声は、千冬のものだ。見ると、ベッドの横の椅子に座っている。
「ここは？」
「医務室だ。何があったか覚えているか？」
「……大体な」
そういいながら、記憶を整理する。セシリアが気絶して、それを

支えて、俺も限界が来た。まあ、そんなところだな。
「情けない。まさか意識を失うとはな」
「それはしょうがないだろう。眼が、紅くなった影響もある」
「わかるのか？」
モニターから見られでもしたか？
「体の傷が回復している。少なくとも、重症レベルの怪我はない。それがなければ、今頃暢気に寝てられないだろう」
体の異常な回復力。これも、眼が紅くなったときに起こる現象だ。本来なら重態でもおかしくない戦いのあとなのに怪我は少ない。そこから、千冬は予測したのだろう。
「千冬、ありがとな」
「なにがだ？」
「途中で戦いを止めなかっただろ？」
正直、教師としては何時止めてもおかしくない内容だ。
「何だ、止めて欲しかったのか？」
「まさか」
もし止められてたら、俺は千冬を嫌いにこそならないが、それでも、失望してしまうところだろう。まったく、自分勝手な性格だな。
「なら、気にするな。私は戦士として自分の弱さと戦い、美鶴の恋人として当然のことをしただけだ」
「千冬」
「なんだ？」
「愛してるぜ」
そういうと、千冬は表情こそ変えないが、恥ずかしそうに顔を赤くする。それが、とてもかわいかった。
「……何か聞きたいことはあるか？」
「セシリアは？」
「オルコットなら、もう回復して部屋に戻った。肉体的損傷は打撲程度だ。気絶したのは、精神的疲労からだな」
それを聞いて、安心した。さすがに、俺以上の怪我などといわれ

ては寝覚めが悪い。
「それで、戦いを見た感想は？」
山田先生なんかは、終始顔を青くしていただろうけど。
「俺に惚れ直したりした？」
「ああ、した。オルコットに嫉妬するほどだ。悪いか？」
顔を赤くしながら、俺を睨んでくる千冬。
「ああ、そうさ。年下の小娘に、年甲斐もなく嫉妬したさ。まったく、私というものがありながら、どうしてそう気が多いんだ」
「しょうがないじゃん。そういう性格なんだ」
「ああ、しょうがないさ。だからだ、私がこれから憂さ晴らしに何をしようと美鶴には関係ないな」
あ、嫌な予感。どうにも、千冬の顔が笑っている気がする。
「っ！？」
千冬が、俺の体に触れる。途端、全身が痺れるように痛んだ。
「どうだ、痛いだろう。痛くて、体は満足に動かせないな」
「ちょ、ちょっと待て。何する気だ！？」
「なんだ、忘れたのか？　続きは後で、と誘ったのは美鶴だろう。存分に楽しもうじゃないか」
「俺は楽しくないぞ！」
「私は楽しいので問題ない。全身に痛いほど、私のすばらしさをわからせてやろう」
「ふざけるな！」
俺は無理やりするのは好きだけど、逆は嫌なんだよ。どうにも、嫌な思い出が蘇る。
「誰かいないのかよ！」
「美鶴の看病は、私がすると伝えてある。誰にも邪魔はさせないさ。お前も男なら、過去の悪夢くらい乗り越えて見せろ」
これは、もう何をいっても無駄だ。諦めるしかない。
「千冬」
「なんだ？」

「優しくしてね」
「ああ、善処しよう。愛してるぞ、美鶴」

翌日、朝のショートホームルーム前。
未だに全身は痛むが、それでも昨日ほどではなく、日常生活にも問題はない。
あと、千冬になら無理やりされるのも悪くなかった。
「あの、師河くん。握手してください」
「どうすればあんなに強くなれるんですか？」
「オルコットさん。お姉さまと呼ばせてください」
「ぜひＩＳの操縦の秘訣を！！」
俺とセシリアは、朝からこんな感じだった。
どうも、昨日の戦いを見てくれた生徒たちが押し寄せてきているようだ。
「まいったな。俺のかっこよさは隠せるものではないか。モテる男は辛いぜ」
「お前、すごいバカなことといってるな」
うるさいな、一夏くん。女の子の人気を独り占めしてるからと嫉妬するもんじゃないぞ。それに、お前には箒がいるだろ。
「何で箒が出て来るんだよ？」
「さあ、何でだろうな」
そこに、千冬と山田先生が入ってくる。
「他のクラスの者は散れ」
その一言で、教室は何時もの様子に戻る。さすが、といったところだろう。その教師ぶりは、普段のだらしない姿からかけ離れている。なかなかに、上手く猫を被っているものだ。
「何かいいたいことでもあるのか？」
「何もありません、織斑センセ」
まだ何かいいたそうな顔だが、それでも山田先生へと向き直ると、

「山田先生。ホームルームを始めてくれ」
「はい。それでは、クラス代表のことからです。一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」
嬉々として話す山田先生。そこまで面白いことでもないと思うが。
「先生、質問です」
「はい、織斑くん」
「なんで俺がクラス代表なんですか？」
「それは、師河くんとオルコットさんが辞退したからです」
「なんでだよ！？」
なんで、っていわれてもな。
「なんか、めんどくさそうだし」
もともと、セシリアと戦いたいから決闘を受けたみたいなものだし。
「なら、俺に勝ったセシリアは？」
「残念ながら、わたくしはさらに自分に磨きをかけ倒さなければならない相手がいるのです。申し訳ありませんが、クラス代表という責務を全うする時間がありませんの」
そこでセシリアは意味ありげに千冬を見ると、
「よろしいでしょうか、織斑先生」
「ああ、いいだろう」
きっと、マンガなら互いの視線がぶつかって火花が散っているところだろう。
教室の温度が下がった気がした。
「そ、そういうことで。織斑くん、お願いしますね」
場を取り成すように山田先生が笑った。
「……マジかよ」
「まあ、がんばれよ」
「他人事だな」
「他人事だよ」
まあ、サポートくらいはしてやるよ。

「まあ、いいじゃん、世界で二人しかいない男子なんだから。それを持ち上げないと」
「私たちは貴重な経験が積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑君は」
うん、クラスのみんなも乗り気なようでよかった。
「案ずるな、一夏」
「箒、お前は俺の味方だよな」
「これからも、クラス代表に恥じないよう厳しく鍛えてやる」
これで、一夏の味方はいなくなったわけだ。いや、箒もたくましくなったな。
「それでは、クラス代表は織斑一夏。依存はないな」
クラスが一丸となって返事をする。
すばらしい。一夏以外、今日もいい日になりそうだ。

決着。そして……（後書き）

これで一巻の前半部分は終わりです
次回より、鈴登場ですね
この話にはよく戦士という言葉が出てきますが、好きな小説のパロだったりします。それ関連のキャラもそのうち微クロスとして出てきます
その他にも微妙にパロディやクロスを入れる予定です
それでは、感想お待ちしています

女の戦い（前書き）

鈴のキャラが掴みにくい

女の戦い

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット。試しに飛んで見せろ」

あれから日が経ち、桜もすべて散った頃。今日も今日とて、俺は授業を受けていた。

どうやら、一夏もセシリアも大した怪我はなかったようで、今では何の問題もなく授業を受けている。

俺も、ほぼ全快だ。強いていれば、まだ腕に違和感を感じる程度だろう。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

しかし、あれだね。ＩＳスーツというのはすばらしいね。

女性の体のラインがくっきり浮き出る。貧乳、巨乳、美乳と眺め放題。ヒップや腰周り、腿や腕も重要だ。改めて、この学園に入ってよかったと実感するよ。

どうせなら、千冬もジャージではなくてＩＳスーツを着てくれればいいのに。最近見ていないので、久しぶりに見たいもんだ。

「師河、何を考えている」

「いえ別に何も」

俺の邪念を読み取ったのか、千冬に睨まれた。ああ、恐ろしい恐ろしい。

そんなバカなことを考えている間に、セシリアと一夏はＩＳの展開を終えた。

一夏は時間がかかったが、セシリアはさすがというべきか。一瞬の間にＩＳを展開し終わった。まるで戦隊物のヒーローみたいだな。

俺も変身とか叫んでみるか。

「よし、飛べ」

セシリアは素早く行動した。急上昇し、すぐに地上からは満足に見えなくなる。ゴーグルの望遠機能を使わなくては見れないほどだ。

大体、二百メートルというところか。決闘であれだけの高度を取られなくてよかった。負けはしないが、勝つことも難しくなっていただろう。
ちなみに、俺の今の姿は一夏と同じデザインのＩＳスーツ。それに、戦闘用のブーツとグローブ。腰にはリボルバーと予備の銃弾で最低限の武装。さすがに止められたが、普段から身に着けている俺としては、これがないと落ち着かない。無理をいって許可をもらったのだ。
あとは、修理に出したゴーグルだ。普段は頭にかけるだけだが、今はセシリアたちの姿を捉えるために顔まで降ろしている。
閑話休題。
一夏もセシリアを追うように飛ぶが、どうにもぎこちない。やはり、まだ飛ぶというイメージが掴めていないのだろう。
上空では、セシリアと一夏が会話している。口の動きから、どうも飛行のコツを教わっているようだ。
反重力力翼や流動波干渉なんて一夏には理解出来ないと思うぞ。
「上で二人は何をしているんだ？」
隣で上空を見上げていた箒が聞いてくる。そんなに眼を凝らしても、豆粒程度にしか見えないだろう。
「大した話じゃない。気になるのか？」
「まあな。私は嫉妬深いんだ」
そう、憮然と答える箒。それが、少し意外だった。
「へえ、ずいぶんはっきりいうじゃないか。昔のお前なら、一夏が他の女といるだけで不機嫌そうに怒ってるぞ」
「セシリアは美鶴の彼女だろ。なら心配はいらない、ということもある」
「他にもあるのか？」
「いい加減、私も立ち止まっているのは疲れたんだ。そろそろ歩き出そうと思ってな」
そう、箒は笑った。

入学した頃の箒からは考えられない言葉だ。暗く、濁っていて、他人を嫌い、自分を嫌っていた、棘のある箒からは。
「何があったか知らないが、いいんじゃないか。今の箒なら、うっかり告白するかも知れないぜ」
「抜かせ。私は浮気者は嫌いなんだ」
「それは残念」
「そこ、授業中に私語をするな！」
千冬に怒られたことで、会話は中断する。互いに苦笑し、肩を竦めた。
「織斑、オルコット。急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」
その言葉に、セシリアはどんどん地上に降りてきた。そして、完全停止も難なくクリア、と。さすがは代表候補生。いや、セシリア・オルコットといったところか。
次に一夏が降りてくる。が、今度はセシリアのように上手くはいかず、地上にクレーターを作る結果となった。
「大丈夫か、一夏！」
「ああ、なんとかな」
箒が穴に駆け寄ると、一夏が這い出てきた。
「そうか。だが、情けないぞ。昨日私が教えただろう」
安心したような、呆れたような複雑そうな表情の箒は、手を伸ばし一夏を引きずり上げた。
「サンキュ、箒」
「うむ！」
箒は照れを隠すように、憮然と頷いた。
「あら、なかなかいい雰囲気ですわね」
セシリアが、微笑ましい物を見たような顔で近づいてくる。
「さすがだな。当たり前だが、一夏と大違いだ」
「ありがとうございます。ですが、織斑さんならすぐに強くなりますわよ」

「わかるか？」
「ええ、一度戦いましたから」
ま、あいつは色々と素質があるからな。主人公補正とか。
「でも、俺には負けるけどな」
「わたくしには劣りますけど」
お互いに、笑った。それは、一夏を見下しているのではない。ただ、負けず嫌いなだけだ。
そう簡単には負けてやらないという、意志の表れだ。
「篠ノ之、そろそろ戻れ。織斑、次は武装展開をしろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」
「は、はあ」
「返事は『はい』だ」
「は、はいっ」
「よし。でははじめろ」
一夏は右手を伸ばすと、意識を集中する。そして光が放出され、手には雪片弐型が握られていた。
「師河」
「え、俺？　なんですか？」
一応敬語ではあるが、誠意のこもっていない声で返事をする。
「織斑が武装を展開する間、お前ならその銃で何発銃弾を放てる？」
「条件にもよりますが、互いに静止している状況なら全弾撃って、弾の再装填までできますね」
戦闘中でも、今の一夏になら少しの間があれば全段当てることくらいはできるか。本音をいえば、武装以前にＩＳを展開する隙に一発で終了だけど。
「そういうことだ。最低、０．五秒で出せるようになれ」
さすが千冬、厳しいね。まあ、俺も同じこというだろうけど。
「オルコット、武装を展開しろ」
「はい」
といった瞬間には爆発的な光が放たれ、セシリアの手にはライフ

ルが握られていた。
「さすがだな、代表候補生。それで、一体誰を狙う気だ」
セシリアは、ライフルをいつでも銃撃ができる姿勢で構えている。それ自体はすばらしいだろう。即座の戦闘にも十分対応できる。
問題は、その銃口の先。それは、千冬へとまっすぐに伸びていた。
「ああ、すみません。敵に対して構える癖がついておりますの」
「それは立派だな。だが、誰を狙っているのか正しく判断できないようでは痛い目を見るぞ」
「ご心配なさらず。わたくしが狙うのは、常に打倒すべき相手だけですわ」
セシリアと千冬は、冷たく笑った。
ヤバイ、空気が重いぞ。まあ、俺が原因なんだろうけどさ。
「次は近接武器だ。やれ」
「わかりましたわ」
ライフルを握る手とは逆の、空いている手。それも光が包んだと思ったら、小型ナイフが現れた。
その瞬間だ。千冬は一歩踏み出すと、出席簿をセシリアの喉下に突きつけた。
「っ！」
ライフルの間合いに入られての一振りを、セシリアには防ぐことができない。ナイフで防ぐこともかなわず、セシリアは苦悶の声を漏らす。
「先の決闘もそうだったが、懐に入られてからの対応が遅い。そんなことだから、力の差がある筈の織斑に一撃を貰ったんだ」
おいおい。ライフルよりは遅いとはいえ、一夏の展開速度よりは十分速いぞ。千冬の近接攻撃に反応できるヤツなんて、国家代表レベルでもないと無理だ。
いっていることは間違っていないが、要求レベルが高すぎる。これは、私が混ざってきているな。もう少し公を心がけろよ。
「ありがとうございます。今の攻撃程度、すぐに防げるように精進

いたしますわ」
そういって、やはり静かに笑った。ああ、殺伐としてるな。
「おい、美鶴。どうにかしろ」
「なんで？」
「お前のせいだろうが！」
あ、やっぱりわかるか。といっても、俺にもどうしたものか。誰か、正しい対処法を教えてくれよ。
「「ふふふ」」
こうして、気が休まることなくこの授業は進むのだった。

放課後。体の調子を確かめるためのトレーニングも終わり、軽く休息を取った後。やることもなくなったので、暇つぶしに一夏と箒のトレーニングを覗きに行くことにする。
だがその途中で、目的の人物とは違う、見知った影を見かけた。
「あれは？」
その影を追いかけると、やはりそうだ。
「よう、鈴」
「……美鶴？」
俯いていたその人物が、顔を上げる。どうも心ここにあらずのようで、俺を認識するまでに時間がかかった。
その人物は、凰鈴音。俺の幼馴染だ。
「ずいぶん暗い顔してるな。どうしたんだよ」
「あんた、変わらないわね。久しぶりに会ったんだから、もう少しいうことあるでしょう」
呆れたように声を漏らす鈴。似たようなことを、違う幼馴染にいわれた気がする。
「そういう鈴こそ変わらないな。昔のまんまだ」
「どこが？」

「胸と身長」
「死ね」
殺気！？
突然、鈴が殴りかかってきた。憎しみと殺意がこもった、重い拳だ。それを受け止めると、手が痺れた。
「突然なんだ！？　それが久しぶりに再会した愛すべき幼馴染に対する態度か！　それとも、ツインテールだからツンデレに徹しようとしているのか。それとも、現代の若者らしく切れ易いのか。カルシウムを取れ、カルシウムを。そうすれば少しは身長と胸がだな……」
「どれも違うわ。純粋なる殺意よ！」
「落ち着け。世の中には需要と供給というものがあってだな。供給者が入ればそれを必要とする者もいる。つまりだ、貧乳で小さい女の子を愛する大きなお友達もたくさんいる。諦めるな！」
「むしろ諦めたいわ！」
おお、神様。俺の幼馴染は何時、どんな理由からこんなに凶暴になったのでしょう。
「さっきからよ！」
「ああ。殺気とさっきをかけたのか。なかなか上手いことをいうな」
「そんなツマラナイ冗談いったつもりはまったくないわよ！」
「上手いといえば、腹減ったな。何か上手いものでも食いに行こうぜ」
「っ！……もういいわ。美鶴と話してもこっちが疲れるだけよ」
「俺は鈴と話すの楽しいけどな」
鈴をからかうのはとても楽しい。
もう一夏のことはどうでもいいや。鈴をかまって遊ぶ……、再会を祝して親交を深めるとしよう。
「食堂行こうぜ。ラーメン食べよう、ラーメン。鈴といえばラーメンだからな」
「はいはい、わかったわよ。あ、それと」

鈴が、何かを思い出したように聞いてきた。
「何だ？」
「一夏と最近親しい女子、いたりしない」
こうして、俺は懐かしい幼馴染と再会した。
一夏よ。お前はその恋愛体質を何とかしろ。

二人の関係（前書き）

今回は少し短くなっております

二人の関係

「というわけでっ！　織斑くんクラス代表決定おめでとう！」
クラッカーが乱射され、一夏の頭に紙テープが降り注ぐ。
夕食後の自由時間。場所は寮の食堂だ。
このようなイベントが企画されていたとは露知れず、鈴と夕飯を食べ終え部屋で休んでいたところを連行されたのだ。
「あと、師河くんとセシリアも、すごい試合を見せてくれてありがとう！」
と、俺たちにもクラッカーが鳴らされる。
何とも、微妙な気分だ。女の子に注目されるのは楽しいけどさ。別に祝福されたくて戦ったわけじゃないし、自分たちで戦いたいように戦っただけなのだが。
まあ、女の子にチヤホヤされるのはいいことだよな。
「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね」
「それに、こんなに強い生徒が二人もいるんだよ。これは全校の注目を集められるよ」
「このクラスになれてよかったよ」
「ほんとほんと」
おかしいな。明らかにクラス以上の人数が集まっている気がする。
「ふふ、お互い大変ですわね」
セシリアが二人分のグラスを持って隣に座る。そのうち一つを受け取り、軽くグラスをぶつけ合った。
「いやいや、これは役得さ。俺は一夏のように、この状況を楽しめないバカじゃない」
見ると、一夏も多くの女子に囲まれ疲れた顔をしている。箒はそれに不機嫌そうな顔こそしているが、辛く当たるような真似はしていないで、一夏に冷たいものを渡していた。
「あら、わたくしだけでは不満ですの？」

「それは、セシリアが俺を満足させてくれるかによるな」
その言葉に、セシリアは顔を赤くする。なるほど、こういう攻めには弱いわけか。
「残念だな。俺はセシリアとなら何時でもいいのに」
「わ、わかりましたわ！　美鶴が望むなら、今夜にでも」
「いや、さすがに今日は無理だろ。アリーナの貸し出し許可も下りないだろうし」
「……アリーナ？」
「だから、また戦おうって話だろ」
「……！！」
途端、言葉の意味がわかったのか真っ赤に顔を染めるセシリア。
ヤバイ、かわいいな。もっといじめたくなる。
「どうした、顔が赤いぞ。まさか、違うことでも考えていたのか？」
「そ、それは、ですね」
「セシリアってさ。思ったよりエロイのな」
そこで、セシリアは撃沈した。机に寝そべるように顔を隠す。
「はいはーい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏くん、師河美鶴くんに特別インタビューをしに来ました～！」
盛り上がる参加者一同。ノリがいいな。
「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部の副部長やってまーす。はいこれ名刺」
あ、この名刺名前しかないぞ。これでは電話にメールができないじゃないか。
「ではではずばり織斑くん！　クラス代表になった感想を、どうぞ！」
「えーと……。まあ、なんというか、がんばります」
適当だな。もう少しやる気だせよ。まるで、望んでクラス代表になったのではないとでもいいたそうじゃないか。
「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

「自分、不器用ですから」
どっちも前時代的な言葉だな。
「まあ、いいや。適当に捏造しておくからいいとして」
この新聞記者に、報道の正義とはないらしい。まったく、なんということだろう。おもしろそうだから是非やってください。
「じゃあ、次は師河くんコメントちょうだい」
「はい、好きなタイプはゴスロリ銀髪赤目の美少女です」
「いや、そんなこと聞いてないんだけど」
「嫌いなタイプはウサ耳です。バニーガールは一族郎党皆殺しにされ全滅してネコ耳メイドが流行ればいいと思います」
「ウサ耳に何の恨みが！？」
色々あるぞ。どこかのバカウサギとかバカウサギとかバカウサギとか。
「あ、嫌いなのは白ウサギなので。黒ウサギは保護します」
「いや、だからそうじゃなくて」
「他に何か聞きたいことでも？　あ、初体験の年齢ですか。それはプライベートなことなのでちょっと。ちなみに、一夏はまだチェリーですよ」
「俺を巻き込むな！」
会場が大きく沸いた。箒も小さくだが、拳を握り締め喜んでいるのが見える。
「ああ、もう。私が聞きたいのは二つ。たっちゃんとのこととクラス代表決定戦のことよ！」
はて、たっちゃんとな？　誰だろう、それは？
「南ちゃんと幸せになれるといいと思いますよ」
「そのたっちゃんじゃない！　更識楯無のこと！　少し前、学校中でドンパチやってたでしょう？」
ああ、楯無ね。そういえばやってたっけ。
「更識楯無？」
「誰ですか、それ？」

「ああ、そうか。まだ一年生には馴染みがないのね。この学園の生徒会長で、学園最強を名乗る生徒よ」
「その生徒会長が、美鶴と何か関係があるのか？」
「決闘の一週間くらい前からかな？　放課後、毎日のように二人が戦っていたのよ」
　どうにも、反応が鈍い。どうも、楯無のことがよくわかっていないらしい。
「その生徒会長とは、どのような人なのですか？」
「だから、この学園の最強よ。生徒会長ってのは、この学園でもっとも強くないと名乗れないんだけど、たっちゃんはまだ二年生なのにその座にいるの。しかも、ＩＳ学園の生徒でありながら自由国籍を持つロシアの国家代表なの」
　説明ご苦労様。そこまで聞いて、やっと楯無のすごさがわかったらしい。
「そ、それ本当なんですか！」
「代表候補生じゃなくて、代表！？」
「それって、昔の千冬様と同じじゃない！」
「美鶴、あなたって人は、わたくしの知らない間にどれだけの女生と関係を持っているのですか！」
「だあ、うるさい。少し落ち着け！」
　さすがにこの剣幕で詰め寄られるとうるさいので、何とか押しとどめる。
「たっちゃんのことをわかってもらえたところで。聞かせてもらえる？」
　聞かせて、といわれてもな。
「実践は久しぶりだったから、ちょっと鍛錬に付き合ってもらっただけだ」
「あれを鍛錬で片付けていいのかしら…・・・」
「そんなにすごかったんですか？」
「すごかった」

薫子先輩は、一言そういった。
「アリーナやグラウンドじゃなくてさ。上級生の校舎全部が戦場って感じ？　師河くんはアサルトライフルを容赦なく発砲するし、たっちゃんは鉄扇や格闘技で肉薄する。二人が通り過ぎた後に残るのは、校舎が破壊された跡だけ。一歩間違えば大怪我しそうなのに、二人とも楽しそうに笑ってるんだ。特にたっちゃん。今まで見たことないような、本当に楽しそうな顔で笑うんだ。これはもう、何かあるとしか思えないでしょう」
「……美鶴。俺と箒が剣道場いる間、そんなことしていたのかよ」
「そういえば、山田先生が疲れた顔で、恨みがましく美鶴の顔を見ていたような」
いやあ、反省文なんかで迷惑かけたからな。
「で、どうなんですか、美鶴！　その楯無さんとはどのような関係ですの！」
肉体関係か？　いや、何度か寝たことはあるけどさ。でもな、別に恋人ってわけじゃないよな。まあ、嫌いじゃないよ。むしろ好きだけどさ。多分、楯無も俺のこと好きだし。互いの家の関係で、付き合うわけには行かないけど。寝たのだって、そういう場面でなら色々な監視を誤魔化せるという意味もある。どっちかというと、ビジネスライクな関係だ。
「家同士が古い知り合いなんだよ。まあ、幼馴染みたいなもんだ」
「本当に？」
「さあ？　どう受け取るかはお任せするよ。食材は提供したんだ。料理するのはそっちの役目だろ」
「そういわれたら、こっちも引き下がるしかないか」
そうだろうな。すべてを教えはしないが、嘘も教えない。どういう解釈もでき、だからといって核心を教えてないからこちらに特別被害がない。
楯無との関係がウワサされようが、俺はどうでもいいさ。逆にそっちの方が、裏の繋がりを邪推されなくていいくらいだ。

「では、次の質問です。ＩＳと生身で戦ったらしいけど、本当？」
「本当だけど、それが？」
「それが、で済む問題じゃないでしょ！　ただでさえ正気の沙汰とは思えないのに、勝ったんでしょ？　信じられないわ」
「別に、軍用じゃなくて試合用だろ？　リミッターがかけられてるんだ、別に不可能じゃないさ」
　軍用でも関係ないヤツもいるけど。俺の身内とか。
「さすが、たっちゃんと互角に戦うだけあるわね。今年の一年生は、侮れないわね」
　と、そこで一通りメモに書き留める黛先輩。
「セシリアちゃんは、何かコメントある？　代表候補生がＩＳを装備していない人間に負けたんだけどさ」
「わたくしは死力を尽くして戦い、美鶴はそれに答えただけですわ」
「なるほどね。いいコメントをありがとう」
　そこで、黛先輩はカメラを取り出す。
「それじゃ、写真取りましょうか。織斑くん、師河くん、セシリアちゃんの三人で並んで」
　俺はセシリアに並ぶように立ち上がると、
「セシリア」
「はい？」
　セシリアが無防備にこちらを向く。
「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」
「え？　えっと・・・・…２？」
「ぶー、３７．５でしたー」
　そんなよくわからん合図と共に、フラッシュが光る。
　だが、俺はそんなことを気にしない。
「え？」
「はい？」
　周りから、間の抜けた参加者の声。いつの間にか、一組の全メンバーが集まっている。その皆が、いっせいに俺とセシリアを見る。

さて、何故そんなことになったかというとだ。
俺がセシリアを抱き寄せ、キスをしているからだろう。
俺はたっぷりとその唇を味わうと、顔を真っ赤にしているセシリアより離れる。
「な、な、なにを……？」
「いや、キスだけど。あ、写真撮った？」
「あ、うん、撮ったけど」
「じゃあ、焼き回しちょうだいね」
何時もの調子で、俺はそういった。
「「えええええええええ！！」」
絶叫が起きる。
「なになに！　師河くんとセシリアってそういう関係なの！？」
「私、師河くんのこと狙ってたのに！」
「こんなところでキスするなんて大胆！！」
そんな騒ぎの中、当事者であるはずのセシリアは未だに状況がつかめていないようだ。
「あ、あの、今、キスされましたの？」
「そうだよ。もう一回しようか？」
「な、何で……？」
何でっていわれてもね。
「さっきの言葉、なんかかっこよかったからさ」
そうだよ、俺たちは互いを求めて戦っただけだ。憎しみも怨みも殺意もない。ただ、セシリアが欲しかっただけだ。そして、今もそうだ。
「セシリアとキスしたくなった。だから、しただけだ」
「おお、こっちの方がよっぽど記事になるわ」
黛先輩や、他の生徒たちは大喜びしている。やはり、この年頃の女子は色恋沙汰が好きなのだろう。
「あ、あの。美鶴・・・・・」
「ん？」

「もう一度、いいでしょうか。その、急なことだったので、実感が持てなくて」
「もちろん、喜んで。だけど」
と、セシリアの手を取る。
「悪いが、ここからは二人の時間ってことで」
セシリアの手を引き、食堂より逃走する。
「え？　あ、あの！」
「あとは頼むぜ、一夏」
「どこ行くんだよ！？」
「決まってるだろ」
二人だけになれる場所だよ。

二人の関係（後書き）

早くシャルとラウラを出したい、色々ネタ満載の短編を書きたいです

ザ・サード（前書き）

どうも、たまに日間ランキングに入ることがあるようです
皆さん、いつも読んでくれてありがとうございます

ザ・サード

「ねえねえ、昨日あの後どうなったの？」
「二人でどこいったの？　教えてよ」
次の日、俺とセシリアは朝から質問攻めにあっていた。
まあ、昨日のことを考えればしかたないのか。
「それは、その……」
顔を赤くして俯くセシリア。恥ずかしそうに、下半身をむずむずさせている。
「ま、内緒ってことで。こういうのは、二人だけの秘密にしておくからいいんだよ」
「えー。どうしてもダメ？」
「ダメ」
というと、ようやく俺たちは解放された。
まあ、強いていうならば、だ。恥ずかしそうにシーツに包まるセシリアはとてもかわいかった。
「しょうがないな。じゃあさ、この話は知ってる？」
終わったと思ったら、すぐに次の話題だ。女子というものは、よく話題が尽きないものだ。
「中国の代表候補生が、転校してくるんだって」
「転校、ですか？　この時期に」
「今は四月だろ？　なんでこんな中途半端な時期なんだ？」
一夏が会話に混ざってきた。隣には、箒も一緒にいる。
「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？　騒ぐことの程でもあるまい。それよりも、今は来月のクラス対抗戦のほうが重要ではないか？」
クラス対抗戦とは、クラス代表同士のリーグマッチだ。一組からの出場者は、もちろん一夏だ。
「そうだぞ。一夏の双肩には、学食デザートの半年フリーパス券が

かかってるんだ。死んでも勝てよ」
「そうだな。どうせやるなら、優勝狙うか。セシリア、悪いけど放課後、練習に付き合ってもらえるか？」
「わたくし、ですか？」
「む。一夏、私では不満なのか？」
不思議そうな顔のセシリアと、不機嫌そうな箒。
「いや、ＩＳの模擬戦を頼めるのはセシリアしかいないだろう？箒も美鶴も、訓練機を借りるんじゃ時間がかかるし」
「まあ、それはそうだな。セシリアだったら射撃主体の相手との練習になるし、強くなるんだったら格上にボコられるのが一番だろ」
「そうか。そういうことなら、しかたないな。だが、私との剣の練習をサボることは許さんぞ」
「わ、わかってるって」
ついでだ。
「俺も少し揉んでやるよ」
「な、美鶴もか！？」
「俺もＩＳの操縦をセシリアに教わろうと思っていたからな。そのついでだ。箒、セシリア、俺。この三人相手にみっちりやれば、まあ優勝できるだろ」
上手い具合に、生かさず殺さず躾けるか。
「織斑くん、がんばってね」
「フリーパスのためにもね！」
無邪気な、クラスメイトの声援がした。これから一夏が見る地獄も知らないで、気楽なもんだ。その地獄を見せるのは俺なんだけど。
「今のところ、専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから余裕だよ」
「その情報、古いよ」
会話に割り込むように、聞き覚えのある声がした。
「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、方膝を立ててドアにもたれているのは、鈴だった。
そういえば、一夏に教えるの忘れてたな。
「鈴……？　お前、鈴か？」
「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」
どこかかっこつけた話し方。すごい似合わない。久しぶりの再会だから、気持ちはわからんでもないけど。
「おい」
「なによ……っ！？」
鈴が振り返った瞬間、後方へ飛んだ。頭へ振り下ろされた出席簿を避けると、腰を落とし地面を力強く踏み込むと寸勁を撃った。
なるほど。鈴の中国拳法は久しぶりに見るけど、キレが上がってるな。ただ、相手が悪い。
「まさか久しぶりの再会で、いきなりケンカを売られるとは思わなかったぞ」
「え？」
掌打は、出席簿で受け止められる。鈴は恐る恐る顔を挙げ、声の主を確認した。
「ち、千冬さん？」
「織斑先生だ、バカ者」
バシンッ！　と、今度は無事、鈴の頭を捕らえた。
「まったく、お前は私に恨みでもあるのか」
「だ、だって。いきなり後ろから攻撃されるから、つい……。師匠だって『後ろから声をかけてくるような相手は恥ずかしがりなんだ。なら、こっちから積極的に攻めてやるのが紳士の役目さ』っていってましたよ」
「あいつは、碌なことを教えないな」
「まったくですね。見た目からして信じられませんし」
そう、鈴は場を誤魔化すように笑った。
「笑うな」

バシンッ！　ともう一撃。
「すいません」
「そろそろＳＨＲが始まる。さっさと教室へ戻れ」
「は、はい！　一夏、また後で来るから逃げないでよ！」
鈴は、逃げるように自分の教室へと戻っていった。
「あいつ、何しに来たんだ？」
「それより、鈴がＩＳ操縦者ってことに驚きだ。美鶴は知ってたか？」
「昨日会ったからな」
「なら、昨日教えろよ！」
忘れてたんだよ。
「なあ、一夏、美鶴。今のは誰だ？　知り合いか？」
「まさか、美鶴さんの恋人ではないですわよね？」
「まさか」
あれは、どちらかというと手のかかる妹みたいなもんだ。箒と同類だ。
「とっとと席に着け。お前たちも、痛い目見たいのか
そこで、強制的に俺たちの会話は終了した。
まだ納得していないようだが、箒は大人しく席に戻る。
直感的に、自分のライバルだと感じ取ったのかもしれない。
こんな感じで、今日も一日が始まった。

「鈴は幼馴染なんだよ」
昼時の食堂。俺たちが昼飯を食べに来ると、そこには鈴が待ち伏せていた。
「幼馴染は私だろ！」
「箒はファーストだろ。美鶴がセカンド。鈴はサードなんだよ」
鈴は、箒が転校した後に入れ替わる形で転校してきた。箒と面識

がないのはあたりまえだ。
「で、こっちが箒。ほら、前に話しただろ？　小学校からの幼馴染で、俺の通っていた剣術道場の娘」
「ふうん、そうなんだ」
鈴は値踏みするように、箒を見た。
「はじめまして。あなたとは、色々と気が合いそうだわ」
「ああ、お互いにな」
二人の間に、火花が見えた。お互いが、お互いの事情を正しく認識したのだろう。
「で、そっちの人は？」
「わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ。代表候補生同士、互いに国の名に恥じない行為をいたしましょう」
「ちなみに、俺の彼女」
「ぶはっ！？」
水を飲んでいた鈴が、勢いよく噴出した。
「汚いぞ、鈴」
「か、彼女！　美鶴の！？」
俺の文句を無視して、鈴が詰め寄ってくる。
「千冬さん以外に、あんたの恋人になるような変わり者がいたの！？」
「おい、さり気に千冬姉を変人呼ばわりするなよ」
「なんだか、侮辱された気がしますわ」
セシリアと一夏は、眉をひそめて鈴を見る。
「あ、ごめん。悪気があるわけじゃないの。でもさ、美鶴の恋人だよ。徹底的な肉食主義で高級嗜好。女好きの癖に、好みにうるさい美鶴だよ」
うん、正しい評価だな。さすが幼馴染。
俺は女の子にちょっかいをかけるが、本気で好きになるのはそれほど多くないからな。
「そんな美鶴が、自分から恋人だなんて。つまり、そのレベルなの

ね」
はぁ、と深いため息を吐く鈴。
「一夏、なんでクラス代表なんてやってるのよ。今すぐ交代したほうがいいんじゃない？　今の一夏じゃ、セシリアに手も足もでないでしょ」
「俺だって、そうしたいんだよ……。でも、もう決まったんだよ」
疲れたようにいう一夏。はは、何が不満なのだろうな。
「一夏、なにを弱気になっているんだ。男が最初からそんな態度でどうする。鳳、だったな。お前も、一夏を舐めないでもらおうか」
「舐める？　バカにしないでくれる」
一夏をかばう箒に、心外だというような鈴。
「私は、どんな相手でも舐めはしないわ。それが、誰だってね」
その眼は今までとはちがい、刃物のように鋭い。しん、と場が静まり返る。
「ま、そういうことだ。今度のクラス対抗戦、楽しくなりそうだな」
「そうだな。鳳、非礼を詫びる。すまなかった」
「いいわよ。あと、鈴でいいわ。私も箒って呼ぶから」
このような、さばさばした性格は鈴の美点だ。見ている分には、なかなか気持ちがいい。
「そうだ、私が一夏にＩＳのこと教えようか？　舐めはしないけど、手応えがないのもつまらないし」
「いいのか？　あ、でも美鶴や箒に教えてもらうことになってるんだ」
申し訳なさそうに、一夏はいう。
「そうなの？　で、でもさ！　ＩＳに乗り始めて間もない美鶴や箒より、代表候補生の私が教えたほうがいいんじゃない」
鈴は、一夏に詰め寄るようとそういった。
「ねっ？　美鶴もそう思うでしょ！」
いってることは正論だな。それに異論はない。あるとすれば、
「私は、いいと思うぞ」

「箒？」
「うん、私よりも鈴のほうが適任かもしれないな」
そう、箒は笑った。
おいおい、何いってんだよ。
「いいのか？」
「ああ。それに、そのほうが美鶴もセシリアとの訓練に集中できるんじゃないか？」
なんだろう。今の箒は、何か気に入らない。
入学式の日の夜もそうだったが、あの時とはまた違う感じだ。
「わかった。だけど、鈴一人だと負担があるだろ。俺たちに鈴も入れて合同訓練にする。そのほうが、互いのためにもなるだろう」
一人でやるよりも、複数で訓練をするほうが効率的だ。自分の得手不得手によって教えることや教えられることがある。模擬戦や多人数戦闘の訓練もできる。
というのが、表向きの理由だ。
「……それでいいわ。けど、私は主に一夏につくわよ」
「それは時と場合による」
鈴は不満そうに顔を歪めた。
「そういえば、鈴。今、実家の中華屋はどうなってるんだ」
一夏が、雰囲気を変えるように話題を変えた。
「実家がお店なのですか？」
「そうだ。昔はよく二人で食べにいったな」
「ああ。今、親父さんは元気にしてるのか？　まあ、あの人こそ病気と無縁だよな」
「あ、うん。元気だったよ。だけど、少し老けたかな」
なんだ、妙な違和感を感じる。
「それより、放課後って時間ある？　久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」
「あそこって、去年潰れなかったか」
「じゃあ、学食はでもいいから。積もる話もあるでしょ」

ないだろ。一夏はこの一年は受験勉強だし、鈴もＩＳの訓練ばかりだったはずだ。つまりは、一夏と一緒にいたいための方便だろう。
「いいけど、さ」
一夏は、こちらを伺うように見た。
「……一夏の、好きにすればいい。一日くらいは、特訓を休みにしてもいいだろう」
箒が、そう答えた。それは、どこかぎこちなく無理をしているように見える。
「いいのか？」
「私はかまわない」
「まあ、箒がいいなら、俺もいいけど」
「わたくしも、いいですわ」
「そういうわけだ。だが、明日からはみっちりと扱いてやるからな」
「ああ、わかってるよ。なら、せっかくだし学外に行くか」
「うん。じゃあ、放課後迎えに行くね」
鈴は嬉しそうに笑うと、ラーメンのスープを飲み干し片付けに行った。
「そうだ。せっかうだしみんなで行かないか？」
一夏が提案した。案の定、一夏は鈴の意図に気づいていないようだ。
「悪いけど、パスだ。訓練機の予約してあるし、俺は訓練する」
「私も同じだ。私たちのことは気にしないで、存分に楽しんでくるといい」
「そうか？　悪いな」
そして放課後、一夏は鈴を連れ立って教室を後にした。
その二人を辛そう笑いに見送る箒が、やけに気になった。

ザ・サード（後書き）

箒の脆さを上手く書きたいと思います

ファースト対セカンド（前書き）

なかなか話が進まないです

ファースト対セカンド

イメージするのは、ＩＳを動かすことじゃない。ＩＳが、自分の体の一部だと思うこと。

この全身を覆う装甲は、装甲ではない。自分の体の延長だ。

腕も、足も、指の先までもがすべて自分の体。

ならば、後は何時もと同じだ。銃を抜き、目標を定め、引き金を引く。

「……ダメだな」

一連の動作の後、結果を確認する。

ダメだ、狙いよりも三十センチ程ずれている。

「武装の展開速度も一秒ってところか。まだ遅いな」

「そうでもありませんわ。訓練を初めて一時間でここまでできれば十分ですわ」

「本当に、お前は規格外だな」

「でも、なんか上手くいかないんだよな。どうも、俺のＩＳの間になにか挟まっているような、そんな感覚がする」

俺、セシリア、箒の三人は、アリーナで訓練を行っていた。使う機体は、ラファール・リバイヴだ。射撃武器をメインとする俺には、箒の使う打鉄よりも好みだ。

「適正が低いからか？」

「美鶴は、どれくらいなんだ？」

「Ｃだよ」

ちなみに、これはＩＳの適正がＳ、Ａ、Ｂ、Ｃの四段階しかないためにＣとなっているだけ。実際は、今年の一年の中でもトップクラスに悪いらしい。そのせいか、どうもＩＳが思うように動いてくれない。

「ま、初日はこんなもんか。じっくり行くさ」

「そうですわね。どんな武器でもそうですけど、訓練時間と実力は

比例しますわ。最初から完璧にできると思うほうが間違いです」
「だからこそ、毎日の研鑽が重要なわけだ」
と、三人が各々納得をした。
「じゃあ、最後の締めに模擬戦でもやるか。箒、相手してくれよ」
「わ、私が！？」
なんだ、その驚きようは。
「相手なら、セシリアに頼めばいいだろう」
「ヤダよ。今の俺じゃ手も足も出ないだろう。箒は俺と戦いたくないのか？」
「……戦いたい。私の強さを、美鶴に見せ付けたい。私は強くならなければならないから」
その言葉が、引っかかった。やはり、今日の箒はおかしい。
「では、わたくしが審判を勤めます」
「ああ、頼む」
ならば、戦いの中で確かめるしかないな。
「箒、全力でこい」
「もちろんだ」
俺は五五口径アサルトライフル・ヴェントを、箒は近接用ブレードを構えた。
「それでは、始め！」
俺はアサルトライフルを構えると、箒にフルオートで放つ。それを、箒は上空に逃げることで回避した。
ダメだ、狙いが甘い。ハーイパーセンサーから送られてくる情報と、自分の意識がかみ合わない感じだ。ゴーグルとスコープを接続した感じと似ているが、あれはライフルを構える手間を無くすための処理だ。相手の位置情報やターゲットサイトなど、余計なものが多すぎる。銃撃の後の反動がないのも落ち着かない。
「はぁ！」
気合と共に、箒が間合いに飛び込んできた。アサルトライフルで近接ブレードを受け流すと、ストック部分で殴りつける。

「っち！」
動作が遅い。箒は軽く後ろに避けるだけで、俺の攻撃は空を斬る。
どうにも、ＩＳの操縦では箒に分がありそうだ。
離れた箒に、再び銃撃。だが、結果は同じだ。訓練の時と実際に戦うのでは、やはりこれほどまで違う。
「なら、ちょっと弄るか」
ＩＳの設定を変更。ハイパー・リンクを切断。これで余計なものはなくなった。
箒の動きに合わせ、目測で銃を撃つ。
「さっきよりも狙いが鋭い！？」
うん、まあまあだな。だいぶ何時もの感覚に近くなった。それでもまだハイパーセンサーは有効だから、気分としてはドーピングモードに近い。
箒が加速し、銃撃を掻い潜る。俺はそれに合わせアサルトライフルから、近接ナイフを展開する。イメージは、腰のホルスターから逆手で抜く感じだ。
「なるほど、いい剣戟だ。成長したな、箒」
「お前に褒められるとは、私も捨てたものではないな」
ナイフとブレードを打ち合う。接近戦では箒に敵わず、俺は防御に徹する。
「なあ、箒」
「今は試合中だぞ。話は後にしてくれ」
今だから、こそだ。戦いの中だからこそ、聞けることもある。
「最近、なんか様子が変わったな」
「そうか？」
「前よりもずっと落ち着いてる。癇癪起こして一夏に当たることもなくなったし、入学式の夜が嘘のようだ」
「私も、お前たちに負けてられないからな。過去から逃げずに、戦うことにしたんだ」
そこに、箒のどんな思いが込められているかはわからない。俺は

箒のすべてを知っている訳ではないし、これからも知ることはないだろう。
俺は、箒ではないのだから。
それでも、わかることはある。
「なんか、無理してない？」
「なに？」
箒の攻撃が、一瞬緩まった。俺は間髪入れず、攻めに転じる。
「な、卑怯だぞ！」
「いいから聞けよ。今日、鈴と一夏が遊びに行くこと許可しただろ」
「それがどうした。別に久しぶりに再会した幼馴染と話すことも許さないほど、私の了見は狭くない」
「けど、辛そうな顔してたぞ。鈴も一夏のことを好きってわかったんだろ？」
「それがなんだ！　私が一夏と鈴が会話するのを邪魔し、それでどうなる。それが、戦いなのか。それが強さなのか！」
箒の剣がぶれる。力任せの大降り。やり場のない思いを、剣に乗せているような攻撃だ。
これが、箒の本質。
方向性は変わっても、強さを求めるという弱さは変わっていない。
別に、それは悪いことじゃない。自分が弱いからこそ、強くなろうとすることは悪くない。
実際、最近の箒は戦士としての道を歩き出していた。
だが、速すぎたのだ。
自分の体力も考えず、ペース配分も気にしないで、足元も見ずにただ駆け抜けた。今まではよかった。一夏に声をかける女子は多くいたが、それは本気の好意ではない。言い方は悪いが、興味本位。その程度なら、箒は苦ともしない。
だが、そこに鈴が現れた。自分にも負けないほど、一夏を好きでいる。突然現れた、明確な傷害だ。その現れた障害に、足を取られた。

倒れて傷を負ったのにも気づかずに、無理にまた走ろうとした。その結果が、これだ。フォームもガタガタ。走るのも精一杯なのに、止まることをしない。止まることを考えてもいない。余計、自分を追い込んでいるとも知らずに。

「お前は、昔から自分を追い込みすぎなんだよ。意固地になって、すべて自分で押さえ込む。だから」

箒の懐に入り込み、ナイフを振るう。シールドエネルギーを削り、そのまま回し蹴りを放つ。

「もっと我侭になれよ」

「私に、私にまた醜態を晒せというのか！　感情のまま、一夏に当たれというのか！」

「違う！　感情のままに戦えばいいんだよ。もともと、戦いってのは自分の我侭でやるもんだ。俺は千冬を愛してるから戦うし、セシリアも大好きだから戦う。二股上等！　どっちも欲しいんだからしょうがないだろ！　お前も鈴に譲るな！　自分を蔑むな！　それは戦いじゃない、逃げだ！　一夏が欲しいなら戦え！　自分の我侭で、自分の好きなように、自分の思うがままに戦え！」

箒のブレードを避けると、握っている手をナイフで弾いた。ブレードが宙を舞う。

「それが、戦士だ！」

そして、箒を殴った。思いっきり、全力で、一切の手加減なく殴った。

「……ずいぶん、好き勝手いってくれるな」

箒が、ライフルを出した。俺は反射的に一歩下がると、そこに銃撃が降り注ぐ。

「幼馴染かもしれない。年上かもしれない。だが、たったそれだけでずいぶんないいようだ。お前は神かなにかのつもりか！　私はな、お前のそういうところが昔から気に食わないんだよ！」

箒が、叫んだ。

「ああ、そうさ。私は怖かったんだよ。鈴と一夏が楽しそうにして

いるのを見て、それが気に食わなくて。だけどそれを認めたらまた昔の私に戻りそうで。だが、それが悪いのか！」
命中も満足に定まらず、闇雲に撃つだけの銃弾。箒は刀が本来得意とする武器なので、それも当たり前だ。だが、それは先ほどまでの剣筋よりも、俺を魅せた。
「私は、私が嫌いなんだよ！　剣道だって、ただの憂さ晴らしでやっていた。すぐに暴力に走る。そんなこと、私が一番知っている！
だがな、そんなことをお前にいわれたくない！」
箒が走る。地に刺さっていたブレードを抜くと、そのまま俺に斬りかかった。
「ああ、いいさ。そこまでいうのなら戦ってやる。まずは、あの横槍中国娘を倒す。そして、鈍感バカな一夏を私のものにする！　邪魔するやつは切伏せる！　そして」
箒の太刀を、ナイフで受け止める。その攻撃は重く、俺は弾き飛ばされてしまう。
「まずは、何でも知ったような口を利く戦闘バカを地面に這い蹲らせる。文句があるか！」
箒の目は、真っ直ぐと俺を見ていた。熱い熱を持ち、それでも怒りに囚われず打倒するべき相手だけを見ている。
ああ、いい眼だ。くそ、一夏には勿体無く思えてきたぜ。
「ああ、文句なんてないさ。むしろ上等だ。いいぜ、箒。さあ、存分に戦おう。苦痛も、悩みも、迷いも、戦うことで乗り越えろ！」
箒がブレードを振りかぶり突撃する。俺はアサルトライフルを展開し、それを迎え撃つ。
「来いよ、箒！」
「墜ちろ、美鶴！」
そして、
「はっ、やるじゃねえか！」
「私を、舐めるなよ」
コンマ数秒の差で、箒のブレードが銃弾より先に俺を捕らえた。

「勝者、篠ノ之箒」
セシリアの声が響く。俺はＩＳを解除すると、その場に座り込んだ。
「ああ、クソ！　負けたのは久しぶりだ。かっこ悪い！」
敗北は何時以来だろうか。確か、一年ぶりくらいか？
セシリアが、俺たち二人に近づいてきた。
「でも、美鶴はまだＩＳに乗り始めたばかりですし。適正のことも……」
「関係ねえよ。負けは負けだ。いいか、次は負けないからな、箒！」
「ああ、そうだな。私も、もっと美鶴とは戦いたい」
そう笑う箒の顔は、今まで以上にすがすがしく輝いていたと思う。
その顔を見たら、たまには負けるのも悪くないと思ってしまった。

ちなみにその後、生身で木刀とナイフで戦いボコボコにしてやった。俺は負けっぱなしは嫌いなんだよ。

ファースト対セカンド（後書き）

三巻まで書けば一区切り付く予定です。その前に一巻と番外編を数話書くことを目標とします

弱さと強さ（前書き）

鈴を美鶴のヒロインにすればと少し後悔
でも多すぎると書ききれなくなるからいいか

弱さと強さ

「やはり、労働後の一杯は格別だな」

中年親父のような一言をいうのは、千冬だ。俺の部屋に勝手に訪れ、机とソファーを占領して自前の酒で晩酌をしている。

「生徒の部屋で酒を飲むなよ。それに、寮長が酔っ払ってもしなにか起きたらどうするんだ」

「今はプライベートだ。それに私はこれくらいで酔うほど弱くはない。もしもという事態も、そう簡単には起こらないからもしもというんだ」

と、ビールを飲み干す。実に美味そうだ。あんな苦いもののどこが美味いのか、まったく謎だけどな。

「はいはい。ったく、急に来るから大したツマミはないぞ」

冷蔵庫にあったもので、簡単な炒め物を作り千冬へと出す。

「なに、これだけあれば十分だ。お前も飲むか？」

「生徒に酒を勧めるなよ。あと、ビールは苦いから嫌いだ」

「お子様め。まあ、飲み物でも用意して座れ」

まるで自分の部屋のように振舞う千冬。まあ、いいけどさ。

俺は自分のコーラを準備すると、千冬の隣へと腰掛けた。

千冬は、俺や一夏の前ではこのようにだらしない。なので、俺もセシリアと接する時より、千冬への態度は適当だ。別に、これに文句があるわけじゃない。セシリアとは違う、千冬との距離感。これ

が、俺と千冬のいつもなのだ。

「美鶴、聞いたぞ」

「何が？」

「篠ノ之に負けたらしいな。私以外に負けるとは何事だ」

どこから聞きつけてきたのか。耳が速いヤツだ。

「うるさい。その後、ちゃんと礼はしたさ」

「何だ、言い訳はしないのか？　オルコットの時のように生身でライフルを使ってれば勝てた、とか。つまらないな、せっかく慰めてやろうと思ったのに。膝を貸してやろうか」

「俺は小さなガキか！」

「なんだ、昔はよく慰めてやってただろ。負けるたびに、私のところにグチをいいに来ていたのを忘れたか？」

そんな小学生の頃の話を持ち出しやがって。そういう恥ずかしい話は忘れてくれよ。

「それに、私から見ればまだまだガキさ」

酒を飲んでいるためか、饒舌になる千冬。

「大体、お前は普段から格好をつけすぎだ。なんだ、あのオルコットに対する態度は」

「好きな女にはいいところを見せたいもんだ」

「ほう。私はお前のいいところなんて見たことないがな」

と、千冬は面白そうに笑った。

「俺も、千冬のかっこいいところなんて見たことなかったぞ。なんだ、昼間の猫かぶりは。年下の女性とにチヤホヤされていい気になってるんじゃないのか」
「あれは、教師として当然の態度を取っているだけだ」
癪に障ったのか、頬を思いっきり抓られる。
「バカ、やめろ千冬！」
「断る。浮気を黙認してやってるんだ。これくらいの憂さ晴らしはさせろ」
ああ、くそ。なんていい顔をしやがる。かわいいじゃないか！
「ん？　どうした」
「いや、惚れた弱みというか。俺って本当に千冬を愛してるんだなと思ってさ」
「そうだろそうだろ。私も美鶴を愛してるぞ。だから、私に感謝してその頬を差し出せ」
こんな風に、俺と千冬は楽しい一時を過ごしていた。だが、
ドゴン！
突如、廊下より何かが破壊されるような大きな音が聞こえた。
「おい、千冬」
「なんだ？」
「もしも、が起こったらしいぞ」
「そのようだな」
千冬は大きくため息を吐くと、目付きを変えた。プライベートか

ら、教師のものになったのだ。
「師河、見に行くぞ。お前もついて来い」
「了解ですよ、織斑先生」
俺と千冬は連れ立って、廊下へと出た。幸い、物音がしたほうに生徒は集まっているようで、二人で同じ部屋から出たのは見られなかった。
「何ごとだ」
「織斑先生、篠ノ之さんと鳳さんが」
箒と鈴がどうかしたか？
群集の中を、騒動の中心へと進むと、台風の目のように空けた空間へ出た。そこは、一夏と箒の部屋の前。見ると、部屋の扉が破壊されている。さっきの音はそれが原因だろう。そして、
「はあ！！」
「セイヤ！」
木刀を持った箒と、二本の青龍刀を持った鈴が激しい死闘を演じていた。
「おい、二人ともやめろ！」
一夏が、懸命に戦いを止めようとしていたが、それも無駄。二人は、戦うことをやめない。剣と剣が激しくぶつかり合う。
「そこだ！」
「甘いわ！」

箒が右肩から斜め方向に斬り付けると、鈴は小柄な体系を生かしそれを避ける。と思った瞬間、一瞬で最高速度まで達し、地を這うように箒の懐に潜ると、全身をバネのようにして顎を蹴り上げる。

「なっ！？　速い！」

「師匠から学んだのよ」

その動きは、鈴の師匠に比べるとまだまだ甘いが、それでも箒には十分なようで、転ぶように避けた箒の肩を蹴り抜いた。

「あれって、一応暗殺術か何かのはずなんだけどだ」

「どいつもこいつも、私の知人にはマトモなヤツはいないのか」

あのバカウサギの親友が何をいっている。大体、千冬だってお世辞にもマトモとはいえないだろう。

「くっ！」

箒も負けてはいない。倒れながらも、空中で自由に動けない鈴に木刀を振るう。出鱈目な体勢から振るわれた力任せな一撃だが体格で劣る鈴には十分なようで、木刀を防いだ左腕を損傷させた。折れてはいないだろうが、しばらくは痺れて動かせないだろう。

「やるわね」

「お前もな。……お互い、腕一本か」

「ええ。そろそろ、決着をつけましょうか」

そう、二人が必殺の構えを取る。次の一撃で、勝負を決めるつもりだろう。観客が、固唾を呑んでことの顛末を見守る。

刹那の時が流れた。そだが、それは永遠とさえ思える。

「はっ！」
「セイッ！」

二人が、同時に踏み込んだ。リーチと力は箒。だが速さと手数では鈴が勝っている。単純な戦闘力も鈴が上。箒は、何とか気迫で喰らい付いている様子だ。
そして、

「いい加減にしろ！」
「「ぐはっ！？」」

千冬の拳骨が、二人に同時に落とされた。結果、両者同時ノックダウン。千冬の一人勝ちってところだ。

「何するんですか、織斑先生！」
「今大事な勝負の最中だったんですよ！」
「黙れ」

ともう一発。

「話は寮長室で聞く。ついて来い。他のものは部屋に戻って宿題でもしてろ」
群集を一声で散らすと、鈴と箒の首下をネコのように掴み引きずってゆく。
「織斑、お前も来い」
「俺も！？」
「重要参考人だ」

有無をいわせない千冬。
俺も、その後に続く。
寮長室につくと、千冬は箒と鈴を正座させた。一夏はその後ろで気まずそうに立っている。俺は、壁に背を預けことの成り行きを見守ることにした。

「思ったより、きれいだな。千冬姉のことだから、もっと汚いかと思った」
「織斑先生だ。お前も正座するか」
「す、すいません！」

ちなみに、きれいなのは俺が掃除と洗濯をたまにしているからだ。いい年なんだから、せめて自分の下着くらい自分で洗えよ。

「で、あの騒ぎの理由は何だ」
「えっと……」
「それは……」

二人がいいにくそうにうつむいた。

「織斑、説明しろ」
「わかりました」

と一夏が少しずつ、状況を説明しだした。
なんでも、食後に部屋でゆっくりしていたら鈴が訪ねてきたらしい。曰く、箒も男と同じ部屋だとゆっくりできないだろうから私が一夏と同じ部屋になる。今すぐ出て行け。
それに、箒は一言。嫌だ、と答えた。
後はなし崩し的に口論となり、気づけば一夏との同室を賭けて決闘が始まったらしい。

「……アホか、お前たち。一度決まった部屋がそう簡単に変えられるか」

その話を聞いた千冬は、そう切り捨てた。

「まったく。織斑、この話を聞いてどう思う？」
「どう、ですか？」
「なぜ、二人はお前と一緒の部屋になりたがったんだと思う？　それも、決闘までしてだ」
「だから、鈴は箒に気を使ったんだろ？　箒は人見知りだから、俺と同じ部屋がいいってことじゃないのか？」
「お前は、そんなことであんな事態になると本気で思っているのか」
「それ以外になにか理由があるのか？」

それは、本気でいっている眼だった。こいつは真性のバカだ。

「もういい。鳳、篠ノ之。お前たちはなにか言い分はあるか」
「あの、本当に部屋変えは無理なんですか？」
「無理だ。それに意味がない。月末にも新たな部屋が準備できる。そうしたら、織斑は師河と同じ部屋だ」
「嫌です！」
「……なぜお前が反応する」

力強く言い放つ俺に、千冬がジト目を向けてきた。

「だって、部屋に女の子を呼べないじゃないですか！」
「俺は別にいいぞ。友達呼ぶくらい、俺もするからな」
「いや、だって。一夏も、自分の姉と友達がセックスするの見たくないだろ？」

「黙れ！」

千冬の怒声と出席簿が飛んできた。俺はそれを首を傾げるだけでそれを避ける。

「危ないな」

「なにをいってるんだ！」

「まあ、そういうことだ。あ、セシリアの時もあるぞ」

「いい、いうな。わかったから」

顔を真っ赤にする一夏。箒も鈴も似たような感じだ。

「わかった。お前は必ず一夏と同じ部屋にする。いいな！」

おい、苗字から名前になってるぞ。これだけ慌てる千冬を見るのはめずらしい。おそらく、酔いの影響もあるのだろう。それとも、さすがに弟の前でそういう話をされると恥ずかしいのだろうか。

「というわけだ。篠ノ之、鳳。ここで反省文を書いていけ」

「えー」

「いいな」

「「わかりました！」」

いそいそと筆記用具片手に、反省文を書き始める二人。俺と一夏はもう用もないだろうと、自分の部屋へと戻る。

「あ、そうだ。一夏、約束覚えてる？」

「約束？」

鈴に背後より引き止められた。

「約束っていうと、あれか」

「覚えてる！」

「鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を」

「そ、そうっ。それ！」

こいつ。俺が知らん間にそんな約束をしていたのか。鈴もなかなかやるな。

「おごってくれるってやつか？」

「……はい？」

「だから、鈴が料理できるようになったら、俺にメシをごちそうしてくれるって約束だろ？」

場が静まり返る。

うそだろ？　鈍い鈍いと思っていたが、これは救いようがない。

場の空気も読まず、一夏は一人自慢気に語る。

「いやしかし、俺は自分の記憶力に感心……」

バアンッ！

鈴が、一夏の頬を引っ叩いた。怒りに満ちた眼差しには涙が浮かび、それがこぼれないように唇を硬く結び堪えている。

今の鈴の気持ちは、どれほどのものだろうか。鈴は、あの言葉をいうためにどれほどの勇気を振り絞っただろうか。あの、プロポーズの言葉を。いや、そこまでいかなくてもだ。自分の好きという想いを込めた言葉だ。そして、一夏が了承した時、どれほど嬉しかっただろうか。

だが、その想いはすべて幻想となったのだ。幻のように、すべて消えた。

「あ、あの、だな、鈴……」

「最っっっ低！　女の子との約束もちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！　犬に噛まれて死ね！」

鈴は逃げるように、寮長室を出て行く。

「……まずい。完全に怒らせた」

「一夏」

「なんだ、箒？」

「馬に蹴られて死ね！」

と一言。その後、箒も寮長室を出て行った。

「えっと、反省文はいいのかな？」

「構わん。その代わり、織斑。今夜は廊下で一晩中正座をしていろ」

「なんで！？」

「やれ」

有無をいわせぬ千冬。見るからに怒り心頭だ。

「美鶴！」

助けを求めるようにこちらを見る一夏。

「じゃあ、俺は寝るわ。せいぜい背中からさされないようにしろよ、大馬鹿野郎」

もちろん、俺も助けるつもりなどない。
俺も寮長室を後にすると、自分の部屋に戻る。
鈴を追うことはしない。俺が追っても、どうしようもないからだ。俺が追って、なんて言葉をかければいい。優しい慰めもでもいうのか。バカらしい。
鈴はそこまで弱くない。
それに、箒もいる。鈴と同じ、一夏を好きな箒がいる。なにがどうなるかはわからない。でも、箒なら大丈夫だろう。
俺はそう、確信していた。

「鈴」
「……何よ、笑いに来たの」
箒が鈴を見つけた場所は、寮の外。芝生が生い茂る中にはだった。そこに置かれたベンチ。闇夜で顔はよく見えないが、それでも泣いていることは確かだろう。
「ああ、そうかもな」
と箒はいう。
「なんですって？」
鈴は顔を挙げ、赤く充血しているであろう目で箒をにらんだ。
箒はそれを無理すると、鈴に向かい手に持っていたものを投げる。

「な、なに？　これ、あたしの訓練用の剣」

それは、廊下で鈴が使っていた二本の青龍刀だ。ここに来る前に、廊下に自分の木刀と共に置き去りにされていたものを持ってきたのだ。

「構えろ。勝負はまだついていない」

「もう、意味ないわ。聞いたでしょ。部屋割りはもう決まってるし。それに、一夏は私のことを何とも思っていない。あの日からの私の想いは、一夏と結婚するっていう未来は消えたのよ！」

そう、鈴は言い捨てた。自分の想いを、すべて消し去るように。

そんな鈴に、箒は木刀を構え振り下ろす。その太刀筋には、一切の躊躇いはない。

「なにするのよ！」

鈴はかろうじて青龍刀で受けると、威力を殺すようにベンチより跳んだ。

「部屋を奪おうとしたあたしへの腹いせ！　それとも、単に私が邪魔だっていうの！」

「鈴」

声に悲しみを混ぜながら、鈴は叫ぶ。それに、箒は静かに名前を呼んだ。

「鈴、お前は強い」

「え？」

「お前は強い。私よりも、ずっとだ。今日、久しぶりに一夏と会っ

たというのに、その行動には一切の躊躇いもなく、自分の想いを一夏にぶつけていった。私など、その勇気がなくて一夏に声をかけるのが精一杯。満足に話すこともできなかった」

箒は木刀を腰打めに構えると、鈴へと一足で迫る。その勢いのまま、鈴へと木刀を振り上げた。

「わかるか、私の気持ちが。私の苦悩が。お前という敵を前にして、私は戦おうとした。だが、満足に戦うこともできずに、気がついたら逃げていたんだ」

なおも、箒の攻撃は続く。鈴は、防戦一方だ。

「そして、やっと戦おうと思った矢先になんだ。約束だと、プロポーズだと！　想いを満足に告げることもできない私に対して、なんだそれは。お前は、一体どれだけ私の先を進んでいるんだ！」

鈴の足を払いバランスを崩すと、そのまま懐に飛び込み片手で鈴を掴む。

「私は、お前という敵の強大さを改めてしった。それでこそ、挑む価値があるというものだ。なのに！」

そして、鈴を地面へと圧し付けるように叩きつけた。剣術ではない、古武術の技だ。

「お前はそうやって逃げて、勝手に負けて。ふざけるな！　私はまだお前と戦ってすらいないんだ！　それを負け逃げだと。そんなこと、許すわけがないだろう！」

箒は叫んだ。地面へと鈴を組み伏せ、襟を掴み頭を持ち上げる。そして、真っ直ぐに見つめて叫んだ。

「いいか。私は一夏が好きだ。大好きだ！　だから、一夏を私のものにする。邪魔するものは正面より斬り捨てる。お前はどうなんだ、鈴！」

「……わよ」

鈴が、小さく何かをいった。

「なんだ？」

「調子に乗ってるんじゃないわよ！」

鈴は掌をもう一方の掌に重ねると、箒の胴を打ち抜いた。単把という技だ。

体勢を崩す箒より、軽業師のように抜け出しと青龍刀を構えなおす鈴。箒も同じく立ち上がると、鈴と対峙した。

「私が、一夏をどう思ってるかって？　好きよ、好きに決まってるでしょ！　あの無自覚で女を惚れさせて、そのくせ自分は超が百個つくほどの鈍感で。お人よしでヘタレで、でも時々すごく熱くてかっこよくて。とにかく、私は一夏が大好きなのよ！」

鈴の想いが響き渡る。それは心からの叫びだ。

「大体、私はあんたが気に食わないのよ。今日、校外に出た時だって出る話題はあんたと美鶴のことばかり。美鶴はまだいいわ。でも、あんたは許さない。一夏の隣にいる幼馴染は私なのよ。何がファーストよ。ちょっと会うのが早かっただけでしょ。過ごした期間なら私の方が長いのよ！　本当に、気に入らない！」

「なら、どうする」
「決まってるでしょ。私の想いを踏みにじった一夏を潰す。その後、改めて私の想いをぶつける。今度は勘違いの仕様がないくらい、余すことなく伝える。そしてなによりまずは」

青龍刀の刃を、箒へと向けた。

「箒、あんたを潰す。私は千冬さんみたいに、好きな男が他の女になびくのを我慢できるほど人間で来ていないの。一夫多妻制？　英雄色を好む？　知ったことじゃないわ。一夏の隣にいるのは私一人で十分。千冬さんでも美鶴でも、ましてや箒でもない。私だけよ！」
「なら、することは一つだ」
「ええ、もう決まってるわ」

一瞬の沈黙。そして、

「戦おう！」
「戦うわよ！」

二人の女が、互いの想いを懸けて火花を散らした。

弱さと強さ（後書き）

一巻が終わったら短編を少しやります
多分おそらくメイビー

それぞれの戦場（前書き）

箒の人気の無さに絶望した

それぞれの戦場

あれから数週間、すでに五月だ。
あの日から、一夏と鈴はケンカをしたまま。そして、箒は鈴についたようだ。
俺はというと、一夏に怒りを覚えたものの、それでもどうにか約束の内容を思い出そうという姿勢に、まあそれなりに許してはいた。
訂正だ。許す、許さないの権限は俺にはない。それは鈴が決めることだ。

「一夏、ちょっといい」

そんなある日。鈴のほうから、一夏に声をかけてきた。箒も一緒だ。二人の態度は、どうみても穏やかではない。
俺は席を外そうと立ち上がり、

「いいわ。美鶴も聞きなさい」
「いいのか？」
「ええ」

その言葉に、再び席に着く。
一体、どういうつもりだ？

「一夏。クラス対抗戦の日程表は見た？」
「ああ。一回戦で当たるな」
「そうね。そこで、私はアンタを完膚なきまでに潰す。私は、アンタに怒ってるの。だから、そのケリを付けさせてもらうわ。その後、もう一度だけ、私の言葉を伝える。つまり」

鈴は獲物を見つけた猫のように笑う。

「宣戦布告よ」

なるほど、ね。それが鈴の答えか。

「なあ、鈴」

「何よ？」

「俺、そんなに怒られるようなことしたのか？　あれからずっと考えてるんだけど、さっぱりわからないんだ。俺に原因があるなら謝りたい。だから、教えてくれないか」

「嫌よ」

一夏の懇願を、鈴は即答で断る。

「考えてもわからないのは当たり前よ。一夏はそういう人間だから。もうこれは変えようのない性格。どうしようもなく優しくて、残酷な性質なの。でも、教えない。教えたら、私は負けることになるから。だから、アンタを一度潰して、それから思い知らせるのよ」

「それで、箒はどうするんだ」

静観していた俺は、同じく静観していた箒に聞く。

「私は、鈴に付く。そして勝っても負けても、鈴と同時に始めるつもりだ」

「なるほど」

「始めるってなにをだよ？」

決まってるだろ。鈴と箒の、果てしない戦いだよ。一夏に勝った

ら、負けないように戦い続ける。負けたら、勝てるように戦い続ける。
恋愛という、終わりのない戦いだ。
「そういうこと。でも、一夏。私だけが一方的に条件を出すだけじゃフェアじゃないわ。もし私が負けるようなことがあったら、アンタのいうことを一つ聞いてあげる。つまり、これは賭けよ」
「なんでも、か？」
「ええ、なんでもよ」
そこで一夏は、何かを考えるような素振りを見せて、
「なら、謝らせてくれ。怒っている理由は教えなくていい。俺に原因があるというなら、俺が答えを出さないといけない。だけど、それまで鈴や箒と険悪な関係が続くのは嫌なんだ。だから、謝らせてくれ。そして、また隣で一緒に笑える関係になってくれ」
……うん、一夏。いっていることは立派だと思うぞ。でもな、それはどうにも告白に受け取られるぞ。
案の定、鈴と箒は顔を赤くしている。多分、一夏は怒らせたとか思っているんだろうな。
「一夏、お前というヤツは……」
「やっぱ、すごい残酷ね」
二人は、そう零した。
「まあ、いいわ。美鶴はどっちに付くの？」
「ただでさえ、一夏の勝ち目は少ないんだ。それを零にすることもないだろう。俺は一夏に付く」

「ええ、是非そうして。あんまりあっさり勝つのも味気ないわ。私は濃い口が好みなの」
「鈴。いっておくけど、俺にも意地がある。負けるつもりなんか、ないからな」
「それでも、私が勝つわ。私は強いから」

一夏と鈴は火花を散らす。そこで、時間切れ。休み時間の終わりだ。

「じゃあ、せいぜいがんばりなさい。箒、放課後にね」
「ああ、わかった」

鈴は教室を後にする。

「美鶴、俺が鈴に勝てる可能性は？」
「今の段階だと、十回に一回勝てれば運がいい」
「なら、その運を対抗戦の時に持ってくるだけだ。美鶴、俺を死ぬ気で鍛えてくれ」

その、強い決意が宿る瞳に俺は応えた。

「上等だよ」

そして、決戦の日がやってきた。

第二アリーナでは、観客で埋め尽くされていた。これも、ウワサの新入生同士の対決という宣伝効果のためか。
一夏と鈴は、すでにＩＳを展開し、試合開始を静かに待っている。

「どちらが勝つと思いますか？」

そう、セシリアが尋ねてきた。ちなみに、セシリアにも事情を話し訓練に付き合ってもらっている。

ここはピットルーム。俺、セシリア、箒はそこから試合を観戦していた。同じく、千冬と山田先生もいる。

「実力差で考えれば、鈴だ。数週間訓練した程度で代表候補生に勝てるとは思えん。機体差でも鈴。普通に考えれば射撃武器がないってことはないから、近接武器しかない一夏には不利だ。唯一の勝機は一撃の大きさ。あいつのバリアー無効化攻撃を上手く当てられるかどうかだな」

「妥当ですわね。訓練でも、一夏さんのわたくしに対する勝率はほとんどありませんでしたわ」

一夏はセシリアの銃撃の雨を潜り抜け、セシリアに刃を届かせたことがほとんどない。たまにあったとしても、次の瞬間にはエネルギー切れでよくて引き分け。それは機体の愛称が悪いということもあるが、それでも、それが一夏の今の実力だ。一夏の実力は格段に上がってはいるが、それでもまだ遠い。

「だが、あいつは土壇場で何をするかわからん。一夏の突拍子もない行動。それが勝負のカギだな」

と、箒はいった。

「一夏に肩入れするのか？」

「ただの正当な評価だ。セシリアの時もそうだったが、あいつは時機を絶対に見逃さない。一種の才能だな」

それは、主人公補正という。

「それを除いても、勝つのは鈴だがな」

「なるほど。……賭けるか」

「教師の前で、堂々と賭け事をするな」

千冬が、こちらを睨んでくる。

「織斑先生はどっちに勝って欲しいんですか？」

「教師がどちらかに肩入れするわけにはいかん。ただ、篠ノ之」

「なんでしょうか？」

「それは、私としてもだ。お前や鳳がどのように戦い、それがどんな結果になろうと私に文句はない」

最後に選ぶのは一夏だがな。と千冬はいった。

「……ええ、わかりました。ですが、あなたもいずれは乗り越えるべき壁だということは、変わりません」

「楽しみにしている。さて、始まるぞ」

山田先生のアナウンスとブザー。それを合図に、一夏と鈴は空中でぶつかり合う。

雪片弐型と巨大な青龍刀の剣戟。

鈴のＩＳ、甲龍は近接パワー型のＩＳだ。その点で見れば、一夏と同じ。ただ気になるのは、スパイク状の非固定浮遊部位だ。あれが、鈴の切り札だろう。

勝負は予想通り、鈴優勢で進む。二本の青龍刀を連結しバトンの

ように回転させながら力で攻めると見れば、次には分割し二刀流の手数の多さで攻める。
それだけならば、まだいい。
それに徒手空拳の打撃も混ぜてくるのだ。近接攻撃の多彩さなら、俺以上だな。
一夏は大分マシになったとはいえ、まだ不慣れな空中戦で攻めに回ることができない。それに比べ鈴はさすが、空中だろうとお構いなく、箒に使って見せた独特の移動方法で一夏を逃がさない。
「あれって空中でもできるのか。足場があること前提じゃなかったっけ」
かつて見た動きを思い出す。それは鈴よりもさらに静かで速く、縦横無尽で動き回っていた。それは、今の俺でも満足に捕らえられるかわからない。
「ＩＳはイメージで動く。鈴が強く心に思えば、決して不可能ではない」
「なるほど、ね。まいったな、勝ち目が薄くなってきたぞ」
それは、一夏も同じ気分だろう。数回とはいえ、一夏もあの動きは見たことがあるはずだ。なら、その厄介さは十分わかっているだろう。
一夏が大きく後方に飛んだ。一度距離を取り、仕切りなおすつもりだろう。
その瞬間、一夏が飛んだ。
「なんだ？」

自分で飛んだのではない。何かに殴り飛ばされたかのようだ。
見れば、鈴の肩アーマーがスライドして開いている。どうも、鈴が勝負に出たようだ。

「あれが鈴の切り札か」
「そうだ。衝撃砲。甲龍の第三世代専用武装だ」
「空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾にして撃ち出してるのですわね」
「見えない銃弾か」

おそらく、ハイパーセンサーなら空間の歪みを感知し、砲弾を見つけることができるだろう。だが、その瞬間には一夏に命中しているというわけだ。それでは、先手は取れない。
射撃武器に対する対応を教えなかったわけではないが、それは砲弾が見える場合だ。見えないのでは、さすがに対応の仕様がない。

「空気の流れを肌で感じられればいいんだろうけど、まだ一夏には無理だな」

それは、鍛え上げられた感覚。第六感ともいう感覚だ。それを持つには、一夏はまだ鍛えたりない。俺でも、まだ完全ではないのだ。

「けど、一夏さんの眼はまだ死んでいませんわ」

その眼は、今だ勝利を諦めてはいない。どこまでも真っ直ぐに、鈴を見ている。

「一夏のヤツ、勝負に出るみたいだぞ」

一夏が加速体勢で、雪片弐型を構える。瞬時加速を使うつもりだ

ろう。その速度は、おそらく鈴の速度すらも上回り、使い方を間違わなければ鈴でも妥当できるだろう。
問題は、それが直進的な動きしかできなく、途中で軌道を変えることもできないことだ。一度見切られれば銃撃の餌食。セシリアに負け越しているのも、それが原因だ。
なので、使うとしたら最初の一回。ここで外したら、本当に一夏に勝ち目はなくなる。

「うおおおお！！」

一夏が叫び、加速した。だが、遅い。ただ闇雲に突っ込んでいくだけだ。その一夏を迎撃しようと甲龍の肩アーマーが点滅し、

一夏が消えた。

一夏が瞬時加速を使ったのだ。加速体勢も、真っ直ぐ突っ込んだのも、すべてブラフだ。最初からこれを狙っていたのだろう。 鈴に勝負に出ると見せかけて、その実は考えなしの直進。そこで、鈴の思考に期待外れという一瞬の空白を作る。そして衝撃砲が放たれるタイミングで、その懐に潜り込んだのだ。
鈴に刃が届く。そう思った瞬間、

スドオオオオオンッ！！

アリーナ全体に、大きな衝撃が走った。アリーナの中央にもくもくと煙が上がる。
その中心には、全身装甲のＩＳが立っていた。

「なんだ、あれ？」

どうも、アリーナの天井を破ってきたみたいだな。ってことは、その火力は推して知るべし。

「一夏、あたしが時間を稼ぐから逃げなさい」

「逃げるって……女を置いて逃げられるか」

「馬鹿！　アンタより私の方が強いでしょう！　それに、今のでエネルギーを大分消費しちゃったでしょ！」

あの衝撃が走る瞬間、意識がそちらに向いていたようで、ほとんどが鈴の取った行動を見ていない。

「鈴だって、左手が動かないんだろう！」

鈴は一夏の攻撃が当たる瞬間、自分に衝撃砲を撃ち込んだのだ。至近距離からの衝撃砲で強引に攻撃を避けると共に、その勢いで一夏を中心に円を描くように動き背後から青龍刀を叩き込んだのだ。もっとも、乱入のせいで完璧な一撃ではなく、浅いものになっていた。そうでなければ、一夏はエネルギー切れで動くこともできないだろう。

それでも、だ。瞬時加速、バリアー無効化攻撃とあわせて、エネルギーが大きく減少している。一夏はすで、満足に戦える状態ではない。

それは、鈴も同じ。その結果として鈴が払ったものは安くはなかった。衝撃砲のダメージで左手が満足に動かないようだ。

「っ！？　一夏！」

鈴が一夏を蹴り飛ばす。その反動で、鈴も背後へと飛んだ。

次の瞬間、その場が熱線で砲撃された。

「ぼけっとしないで！　死にたいの！」
「悪い、鈴」
「いいから、来るわよ！」

鈴と一夏は、謎のＩＳから距離を取るように飛んだ。それを追うようにビーム兵器が襲い掛かるから、接近戦主体の二人では攻めあぐねてしまう。

衝撃砲も、満足に狙う暇がない。

「織斑くん！　鳳さん！　今すぐアリーナから脱出してください！　今すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！」
「いいえ、俺たちで食い止めます」

それは、おそらく観客が避難するまでの時間を稼ぐつもりなのだろう。それは必要な行為だし、それができるのは一夏たちしかいない。

「いいな、鈴」
「ああ、もういいわ。どうせ逃げろっていっても聞かないんでしょう。あたしが衝撃砲で援護するから、アンタが突っ込みなさい！」
「了解！」

そういうと、一夏と鈴は戦いを始めた。鈴が衝撃砲で敵の注意を引き付け、その隙に一夏が斬りかかる。実に単純で、おそらく現状、もっとも効果的な作戦だ。

「もしもし、織斑くん！　鳳さん！　聞いてますか！？」

山田先生が懸命に通信で呼びかけるがまったく反応がない。

「本人たちがやるといっているんだ。やらせてみてもいだろう」
「お、織斑先生！　何をのんきなことをいってるんですか！？」
「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」
「……あの、先生。それ塩ですけど……」

どうも、千冬もかなり動揺しているようだ。さすがの千冬も、弟のこととなると正気でいられない。

「はぁ」

と一息吐く。

「千冬、落ち着け」

千冬の頭を抱くように胸に押し付ける。

「美鶴……」
「大丈夫、とはいわないがしばらくは墜ちない。いいから、今できることをするぞ」
「ああ、わかった」

一度、強く俺の服を掴むと千冬は身を離す。すると、そこには何時もの千冬がいた。

「山田先生、現状の報告を頼む」
「あ、あの？」
「山田先生」
「は、はい！　突入部隊の編成は完了しています」
「なら、なぜ突入させないのですか！」

箒が千冬にすごい剣幕で詰め寄った。
「無駄ですわ。遮断シールドがレベル４で設定されています。扉もすべてロック済み。これでは手の出しようがありません」
端末をそうさしていたセシリアが、第二アリーナのステータスチェックを表示させる。
「システムクラックはっと。ああ、ダメだな。すぐに解除できるレベルじゃない」
しかし、これはあのＩＳからシステムを乗っ取られたからだとして、どうも見たことがあるやり方だ。これは、あのミサイル事件の時のバカウサギの手法に近い気がする。
つまり、そういうことだ。
「なら、せめて私を突入隊に入れてください」
「ダメだ。半人前の生徒に任せられるか」
「箒さん、落ち着いてください」
「ああ、わかってる。わかってるさ！　しかし、ただ見ていることなどできない！」
ダン！　と壁に拳を叩きつける箒。
「セシリア。お前は代表候補生で専用機持ちなのだろう。戦おうとは思わないのか！」
「わたくしのブルー・ティアーズは多対一の戦闘向きなのです。それに、満足に連帯訓練もしていない状況で、突然部隊に入っても邪魔になるだけです」

「なら、他に打開策は！　何か私にできることはないのか！」
「箒、お前の戦場はここにないぞ」
焦る箒に、俺はいった。静かに、いった。
「ここに、お前の戦場はない」
「美鶴、何を……」
「俺たちは、俺たちのできることをしている。箒、お前のできることはなんだ。お前の戦う場所はここなのか？」
「私の、戦う場所？」
「そうだ。お前は、この状況でどうやって戦うんだ？」
「私の戦う場所、私の戦い……」
そう自分に問うように呟く箒。
そして、何かを思いついたようにピットの出口へと走り出した。
と思ったら立ち止まり、こちらに振り返る。
「美鶴、私は戦うぞ」
「そうか」
「そうだ。だが、私にはそれが精一杯だ。だから、何とかしてくれ」
「何とかってなんだよ」
「何とかだ。お前ならできるだろう」
「買いかぶり過ぎだな。俺にもできないことはある」
「だが、これはできることだろう」
と箒は笑った。そして
「任せたぞ」
そして、箒はピットから出て行った。

任せる、か。どうやら、俺は箒に任せられたようだ。
頼まれたんじゃない。任せたんだ。
これは、大きく意味が違う。
箒は、自分が無力な存在だと考えて俺を頼ったのではない。自分も戦うからこそ、お前も戦えと叱咤したのだ。

「まったく。本当に女ってのは成長が早いな」

俺は箒を見送りながら、そういった。

「セシリア、一夏に通信取れるな」
「それは、できますが」
「なら、一分だ。一分だけ稼ぐようにいってくれ」
「わかりました」

何も聞かず、セシリアは頷いた。

「千冬、三年のクラックチームに作業を中止するように伝えてくれ。第二アリーナ付近のコンピュータへのアクセスも全部中止だ。それと、救助チームを観客席の出入り口付近に配置」
「わかった」

千冬も、文句一ついわずに通信をしてくれる。

「美鶴。一夏さんに伝えましたわ」
「わかった。セシリア、行くぞ」
「わかりましたわ」

俺はセシリアを連れ立って、目的地へと向かう。
今の手持ちはナイフ二本、ワイヤー数メートル、リボルバーか。

これだけでは心持たない。だがやるしかない。
いや、やるのだ。

「まったく。おもしろくなってきたな」
「ええ、本当ですわね」

セシリアと、二人で笑った。

「二人とも、どこに行くんですか！？」

山田先生が、驚いたように叫んだ。一人、状況が飲み込めてないのだ。
だが、それは俺たちも同じだ。
すべての状況を理解しているわけでもない。ただ、やるべきことだけがわかっているだけだ。

「決まってるだろ」

戦いに行くのだ。

負けられない理由（前書き）

今回は少し長めです
あとご都合主義があると思うので、そういう展開が嫌いな方はお気をつけください

負けられない理由

「鈴、あの動き見て何か気づかないか」
「ええ、おかしいわね」

俺はあのＩＳと戦う中で、ある違和感を持っていた。
あのＩＳは強い。十全な状態ではないとはいえ、俺と鈴が二人で挑んでも勝ち目が見えないのだ。
いや、そこまで自分の強さに自信があるわけではないけれど。確実に鈴には劣るし、事実、あのＩＳの乱入がなければ俺は負けていた。
そう考えれば、あのＩＳは俺を救ってくれたとも考えられるが。
とにかく、あのＩＳはおかしい。

「あれ、本当に人間が操縦してるのかしら」

鈴が口にした言葉。それこそ、俺が感じていた違和感だ。
戦いにおいて、まず大事なのは相手の観察だ。
どういう動きをして、どういう手段を用いて、どういう考えで戦うか。
それは向上心かもしれないし、好奇心かもしれない。憎しみや怒りかもしれない。美鶴は戦ってもつまらないからと、そんな理由を嫌ってはいたが、理由は理由だ。
そしてそれは、直接対峙することで始めて感じられる。
だが、それは戦いにおいて命取りにもなる。自分を知られるということは、それだけ自分の付入る隙を教えるということだ。だから、自分の心を隠し考えを悟らせないのは戦いの常套手だ。
美鶴は戦いを楽しむという感情を隠さずに戦うが、それはつまり、その感情だけで他の考えを隠してしまうのだ。細かなことを、大き

なもので包んでいるのだ。
千冬姉は、その逆。静かに戦う。自分の心を氷のように、自分の闘志を氷のように。本当に冷たく、火傷してしまうようなほど冷たい氷にして戦う。だから、自分の考えを読ませない。氷で、自分の感情を凍らせているからだ。
だが、あのＩＳは違う。あれは無だ。最初から何もない。
戦うことが戦う理由だとでもいうように、理由と手段が同じ。喜びでも怒りでも哀しみでも楽しさでもない。感情が、欠落しているのだ。

「美鶴は気づいてるのか？」
「それはないわ。多分、モニターからじゃわからないわ。こうやって相手しているからこそわかるのよ」

俺たちが言葉を交わすと、ＩＳの攻撃が止んだ。先ほどからそうだ。まるで観察するように、こちらを見ている。
それはまるで、

「ロボットみたいだ」
「でも、それはありえないわ。ＩＳが操縦者なしで動くなんて、ありえない」
「そうだな。だけど」

だけど、だ。自分の中の自分が叫んでいる。

「あれは、無人機だ」
「ええ、そうね。常識と感情、どっちを信じればいいのかしら」
「答えが出てるのに質問なんてするなよ」
「ええ、そうね」

そうだ、答えなど決まっている。
俺は、戦士だ。セシリアにも鈴にも千冬姉にも美鶴にも勝てないけど、俺は戦士だ。なら、戦うのだ。
感情のままに、戦うのだ。

「あれが無人機なら、全力で攻撃ができる」

雪片弐型の威力は、対人相手には高すぎる。だが無人機なら、話は別だ。
手加減抜きで攻撃できる。

「それが最善か。でも、当てられるの？」
「当てる。鈴、協力してくれるか」
「いいけど。何するの？」

美鶴の通信を受けてから、もう三十秒が過ぎている。

「仕掛けるのは一分丁度。俺が突っ込むから、鈴は衝撃砲を最大で撃ってくれ」
「何考えてるかわからないけど、了解」

と鈴は頷いた。
正直、不安はある。エネルギーや機体ダメージ。それが、思ったより深刻なのだ。零落白夜を一回でも撃てば、それでエネルギー切れ。一撃に決めなければ、それで終わりだ。鈴には心配をかけないように黙ってはいるが、分が悪い。
こんな時、美鶴や千冬姉ならどうするのかと考え、やめた。
考えるまでもなく、あの二人ならこんな危機、危機でもないだろう。
なら、考えるだけ無駄だ。玉砕覚悟。せめて、鈴が逃げて観客を

助けるだけの時間を稼ぐ。
それが、俺にできることだろう。
俺は早速突撃姿勢に入る。その瞬間、
「一夏ぁっ！」
ハウリングが尾を引くほどの大音量で、箒の声が聞こえた。
「いいか、私が見ている前で恥じを晒すなよ！　男なら、戦士なら！　これくらいの戦い、笑って乗り切れ！　どうせお前のことだから、自分の身を犠牲にしてみんなを助けようとか考えているのだろう。ふざけるな！　そんなこと私が許さん！」
なんてことを叫ぶ。
箒は俺の感情などお見通しらしい。
「鈴、お前もだ！　自分の身を犠牲にして、一夏に攻撃をさせる隙を作ろうなんて考えるな！　私は、お前たちを失うなんて絶対やだぞ。　いいか、怪我でもしたら泣くからな！　年甲斐もなく大泣きしてやる！　そんな恥ずかしい思いはしたくないぞ！　だから勝て！　鈴！　一夏！」
なんて激励か我侭か文句か、判断に困るようなことを大声で、泣きそうなほどの大声で叫んだ。
「まったく、こっちの考えは丸わかりか」
鈴が、肩をすくめる。そして、苦笑いをした。
「鈴、お前……」

「はい、ストップ。いっておくけど、お相子よ。最初に一夏がバカなこと考えたんでしょ。顔に考えが出てるのよ。まったく、あんたはどこの主人公よ。かっこ悪いわね。今時、自分の身と引き換えに女の子救うなんて流行らないのよ」

なぜか怒ったように、鈴はいった。顔を赤くして、自分の恥ずかしさを誤魔化すようにだ。

きっと、鈴のいった言葉は自分自身に言い聞かせるためのものでもあったのだろう。

「箒、怒ってたわね」

あと、十秒で一分だ。

「ああ、そうだな」

九、八。

「どうする？　ここで負けたら、箒は泣くらしいわよ」

「それは困るな。男として、女を泣かせるのは嫌だ」

七、六。

「それじゃ、どうするの？」

「決まってるだろ」

五、四。

「ええ、そうね」

三、二。

「勝つわよ、一夏！」

一、零。

「もちろんだ！」

瞬間、観客席から爆発が起こった。

癇癪席はと通じる扉が破壊され、救助チームが突入したのだ。

迅速に、観客たちはアリーナより待避する。

敵ＩＳは、そちらに興味を持ったようにそちらを向いた。

このままでは、観客に攻撃されるかもしれない。

だがそれは、自分より意識が離れているということだ。

仕掛けるなら、今しかない。

俺は突撃姿勢になり、ＩＳに向かい加速した。それと同時に、鈴が衝撃砲を放つ。

「一夏、行きなさい！」

「おう！」

その衝撃砲を背に受け、そのエネルギーを取り込む。白式に瞬時加速をするだけのエネルギーはもう残ってはいない。残ってないなら、他からもってくればいいだけだ。

背中に重い衝撃を感じ、そして、一気に加速する。

雪片弐型に、エネルギー状の刃を形成する。

ＩＳまでの距離は、あと僅か。

勝てる。そう俺は確信した。

その瞬間だ。

背後のスラスターが爆発した。急激に、速度が落ちるのを感じる。

やはり、悪い予感が的中した。
鈴から背後に受けた一撃が原因だ。それが、衝撃砲を受け無理に瞬時加速を行ったせいで限界が来たらしい。
頼む。あと少し、あと少しなんだ。届け、届いてくれ！
だが、届かない。あと数歩が届かない。
敵ＩＳが俺を殴ろうと右手を構える。

その時だ。

観客席から、二つの飛行物体が飛来した。
おかしい。観客席とアリーナは遮断シールドではさまれていて、向こうからは手出しができないはずだ。なのに、飛行物体はアリーナから向かってくる。
それは、よく見ると見覚えがあるものだった。
ブルー・ティアーズのビットだ。
そして、すべてがわかった。
美鶴だ。美鶴がどのような手段を使ったかわからないが、遮断シールドを解除したのだ。
ビットは、真っ直ぐと敵ＩＳへと飛来する。だが、ダメだ。ビットのレーザー射撃では、このＩＳのシールドを貫いて破壊することは無理だ。シールドを貫くには、雪片弐型ではなければ無理なのだ。
俺の考えを裏切るように、ビットは真っ直ぐと飛んでくる。真っ直ぐと飛んできて、
背後より、敵ＩＳを通り過ぎた。何もせずに、通り過ぎたのだ。
だが、それで全てが終わった。
敵ＩＳは何故かバランスを崩すと一歩、一歩だけこちらに倒れるように踏み出した。

「うおおおおおおお！！」

だから、俺も踏み出す。最後の力を振り絞り、一歩だけ踏み出した。
そして、雪片の刃が、ＩＳの胸を貫いた。
「お見事ですわ」
そう、セシリアの声が聞こえた瞬間だ。敵ＩＳの頭部を、レーザーが貫いた。
敵は時が止まったように動かなくなり、地面へと倒れた。
それは、やはり観客席からの狙撃。
見ると、そこにはレセシリアがレーザーライフルを構えていた。
俺のシールドエネルギーはすでに空だ。絶対防御があるとはいえ、この距離で爆発されたら怪我は免れない。
だから、正確に頭部を撃ちぬいて爆発を最小限にして敵の動きを止めたのだ。
さすがは、セシリアだ。その狙撃の腕には、感嘆しかない。
「それにしても、終わった……」
敵ＩＳの再起動を確認！　警告！　ロックされています！
「！？」
左腕を最大出力形態に変形させたＩＳが、地面より俺を狙っている。
マズイ！
そう思うが、すでに白式は少しも動かない。
ビームが迫り来る。視界が白に染まる。
「まったく、世話が焼けるな」

その声がした瞬間、一発の銃声が響いた。
それだけ。それだけで、俺をロックしていたＩＳの腕が動いて、光は空へと消えた。
そして、今度こそＩＳが動かなくなったのを確認すると、
俺は意識を手放した。

狙うのはただ一点。
精神を研ぎ澄ませ、意識を集中する。
銃を抜き、構え、撃つ。
それだけの動作。ただそれだけの動作を、信じられないほどの速さで行う。
全部で六発撃った弾丸の発射音が、一発分しか聞こえないほどの速度。
それほどの速さだ。
撃たれた一発は狙い通り、一点。ＩＳの左腕の一点だけに命中する。
そして、一夏を狙っていたはずの左手が反れた。僅かにだが、それた。
そして、放たれたビーム兵器が空へと消え、左腕が力なく地面についたところでやっと息を吐く。
深く、深く息を吐く。
それから俺は
「気絶したのか。情けない」
と笑った。

「最後の最後で油断しやがって。少しでも調子に乗るとミスをする癖はどうにかしないとな」

一夏に近づき、意識がないのを確認するとため息をつく。

大丈夫だ。呼吸は安定している。気絶したのは、緊張の糸が切れたからだ。怪我も、打ち身が数箇所というところだろう。

「白式はっと。これはしばらく使い物にならないな」

やはりスラスターの損傷が激しい。事故修復にはどれくらい時間がかかるだろうか。

「最後の最後でいいとこ取り？　それはないんじゃないかしら」

「一夏が未熟なのが悪い」

ＩＳを解除した鈴が、呆れた顔で近づいてくる。

だが、よく見ると足取りが覚束ない。鈴も、かなり消耗しているようだ。

「まあいいわ。それにしても」

と観客席を見回す鈴。

「よく遮蔽シールドを解除できたわね」

「解除？　そんなことしてないぞ」

「は？　ならなんでこのアリーナに入れたのよ」

「壊した」

「はい？」

鈴が訳がわからないという顔で聞き返すからもう一度くり返す。
「このアリーナへのエネルギー供給ケーブルを壊した」
アリーナの遮蔽シールドも、タダで動いているわけじゃない。ケーブルを通じて、学園のエネルギー供給施設からエネルギーを持ってくる必要があるのだ。
その大本、ケーブルの密集地点を壊した。
入学前にこの学園の見取り図は頭に叩き込んでいたから、その場所を探すのなんて簡単だ。
収集地点をナイフで分解し、切断する。訓練で行った爆弾処理に比べればなんということはない。ただ壊せばいいのだから。
エネルギーさえなくなれば、どんな優れた装置もただのゴミだ。ハッキングチームに中止命令を出したのも、一応の予防策。エラーで面倒が起こらないようにするためだ。
「ああ、いいわ。あんたらに常識が通用しないのは今更ね」
どこか達観したような鈴。そして
「っと。大丈夫か？」
「ありがとう。さすがに、疲れたわ」
倒れそうになる鈴を、慌てて支える。華奢な体が、俺に圧し掛かる。
「なによ？」
「いや。もっと鈴のスタイルがよければ役得なのに、と考えただけだ」
「殺すわよ」

「ははっ。鈴はそのままでも十分かわいいから気にするなよ」
すると鈴は顔を赤くして、やはり怒ったように、
「やっぱり殺すわ。でもその前に少し休む」
「ああ、おやすみ」
そこで、鈴も意識を手放した。
俺は気持ちよさそうに眠る鈴の寝顔に苦笑すると、背中に抱きかかえる。
やばい。胸が当たってるよ。小さいのも案外悪くないな。
「まったく、かわいいな」
「あら、それは聞き捨てなりませんわね」
セシリアが飛んできた。俺の目の前に降りると不満そうに、
「美鶴はそういう子供っぽい体系のほうが好みなのですか。不健康ですわ」
「アホか。鈴は手のかかる妹だ。なんだ、なにか気に食わないことでもあるのか？」
「ええ、もちろん」
顔をかわいらしく歪めると、俺に詰め寄るセシリア。どうもご立腹のようだが、それがどうしようもなくかわいい。
「わたくしだって、一夏さんを助けるために神経を使う狙撃を成功させたましたわ。それ以前に、あのＩＳのバランスを崩したのはわたくしです」

もとは俺の策だけどな。
ビットではシールドがある状況では力不足だが、独立して動けるというだけで取れる手段は格段に増える。
そこで俺は、ワイヤーを使うことにした。
二機のビットにワイヤーを括り付け、それを引っ掛けることで相手のバランスを崩す。
あの程度の強度のワイヤーで、さすがに地に腰をつけさせることは不可能だ。実際、ＩＳに少し接触しただけでワイヤーは切れてしまった。
それでも。どんな小さな力でも、不意に押されれば多少なりとも体勢を崩す。
それに、力は弱いだろうが速さはある。
速さと不意打ちをあわせた結果が、あれだ。
結果は十分だろう。

「それなのに、わたくしには何の言葉もないんですの？　鈴さんにはかわいいだなんていって」
「拗ねてるのか？」
「はい」

やはり眉を寄せて、それでもかわいらしくセシリアはいった。
それにやれやれ、と俺は笑みを零す。

「何がおかしいんですの！」
「いや、かわいいと思ってさ」
「そんな取ってつけたような言葉は要りませんわ！」
「じゃあ何が欲しいんだよ」

それに、セシリアは顔を赤らめると小さな声で、

「……さい」
「ん？」
「わたくしと、今度の休みにデートしてください」
そんな言葉を、すごい恥ずかしそうにいうセシリア。
少し前に、それどころかつい先日もそれ以上に恥ずかしいことを。
ちょっと十八歳未満はお断りなようなことをした仲だというのに。
セシリアは恥ずかしそうに、眼を潤ませていった。
「ダメ、ですか？」
こちらの機嫌を伺うように、セシリアはいった。その言葉に、
「断れるわけ、ないか」
「それじゃあ……」
「いいぜ。今週の日曜だな。せっかくだ。セシリアの料理の腕がどれくらい上がったか見せてくれよ」
「はい！」
俺たちは鈴を医務室に運ぶ間、ずっと週末の予定について話し合った。
一夏は、アリーナに置き去りにしてきた。
だって、男なんて背負いたくないからな。

負けられない理由（後書き）

次の話で一巻は終了です
やっとここまできたか……

始まる戦い、蠢く闇

「う……？」

全身の痛みに、眼が覚める。
未だにぼんやりと霞がかかったような頭で、自分の状況を確認しようとする。

「っ！？」

と思ったら、先ほどよりも大きな痛みが走った。
意識が、強制的に覚醒させられる。
ああ、この感覚。セシリアと戦った後と同じだ。
ここは、保健室だ。

「気がついたか」

ベッドを仕切っていたカーテンが開き、千冬姉が顔を出す。

「うん、起きたか。体に致命傷はないから心配するな。数日は地獄のような痛みが続くだけだ」

顔を出した途端、恐ろしいことを言い出す千冬姉。
体を襲う痛みに嘘じゃないなと、嫌な現実を確信する。
聞きたくなかった。

「まあ、無事でよかった。家族にしなれては寝覚めが悪いからな」
「心配かけて、ごめん」
「心配なんぞしてないさ。私の弟で、美鶴に多少なりとも鍛えられ

たお前が簡単に死ぬわけがないからな」

と小さく笑った。それは、千冬姉の照れ隠しなのだろう。なのだろうが……。

嫌な信頼の置かれ方だ。弟としては、やはり大好きな姉には心配をされたかったのだが。

そこは、微妙にショックだ。

それはともかく、

「あの後、一体どうなったんだ？」

あのＩＳにロックされて、美鶴の声が聞こえた。そこまでは覚えている。そこまでしか、記憶にない。

何故俺は生きているのだろう。別に死にたかったわけじゃないが。

「別に、どうもしないさ。あの後、お前の不始末を美鶴が片付けた。それだけだ」

「ああ、なるほど。つまり」

俺は、負けてしまったのだろう。最後の最後に油断し、情けなく負けてしまったのだ。

「ごめんな。千冬姉」

「何がだ？」

「俺さ。守れなかったんだよ。千冬姉を、鈴を、美鶴を、箒を、みんなを……、守りたかったんだ。でも、結局美鶴に助けられてさ。かっこ悪いよな」

「ああ、かっこ悪いな」

千冬姉は、何のためらいもなく言った。

いや、確かに。自分でかっこ悪いと言ったけどさ。
もうちょっと、優しくしてくれてもいいのではないだろうか。
ただでさえ傷心してるのだ。ただ一人の弟に、もう少し優しさをかけてくれてもバチは当たらないと思うのだが。

「お前はまだまだ半人前の癖して、私を守る？　冗談は休み休み言え。少なくとも、私はお前に守られるほど弱くない」

そう、怒ったように千冬姉は言った。

「いいか。大体だ、お前は勘違いしている。負けた？　当たり前だ。お前一人で勝てるほど、あのＩＳは弱くはなかった。少なくとも、お前だけじゃない。現状では、この学園であれに勝てる者などよくて数人だ。鳳もオルコットも、美鶴でさえ勝てないだろう」

あの美鶴が、とは思わない。美鶴の実力は、生身でＩＳを展開したセシリアと互角に戦える程度。生身で、世界最強の兵器とも言われるＩＳと互角に戦える。
それは、破格の実力。本来ならば考えられないほどの実力なのだけれども。
それでも、あのＩＳに勝てるとは思えない。入念に策を練り、罠を張り、相手を陥れれば可能だろうが、あの緊急事態で俺と鈴二人を相手に上回っていた、あのＩＳに勝てたとは思えない。
それは、ＩＳに搭乗しても無理だ。美鶴は、むしろＩＳに乗ったほうが弱いくらいなのだ。

「なのに、何故美鶴はお前を救えた。それ以前に、何故オルコットは攻撃を通すことができた」
「それは……」

俺が、雪片弐型で敵のシールドを無効化したからだ。

「そうだ。そして、それができたのは鳳がお前を信じて衝撃砲を撃つことができたからだ。そして、鳳がその決心をできたのは篠ノ之の激励があったからだ。違うのか」

それは、その通りだ。

あれは、誰一人かけても倒せた相手ではない。

みんなが、自分の戦いをしたからこその結果だ。

「いいか。あの戦いはな、お前の敗北じゃない。お前たち全員の勝利だ」

まあもっとも、と千冬姉。

「最後でお前がドジ踏んだのは否定がな」

と上げて、落とされた。

俺は自分の浅はかさを思い知り、そして勝利を知り、喜びを覚えようとしていたのだが。

それで、一気に気持ちが沈んだ。

「美鶴などは大笑いしていたぞ。『あそこは一夏の一撃で終わるところなのにかっこ悪いな』とな」

「やっぱり、かっこ悪いのか」

「当然だな」

と改めて納得したように頷く千冬姉。

「それでは、私は後始末がある。しばらく休んだら部屋に戻れ」

俺の頭を軽く撫でる、というより乱暴に弄ると千冬姉は保健室から出て行った。

「本当に」

かっこ悪いよな。

自分で勝手に守るとか言っておいて、それができなかったら後悔して。

半人前のクセに、一人前の態度を取って。

まだまだ弱いのに、自分を弱いなんて考えなくて。

いや、確かに俺は弱いけど。弱いくせに、一人で戦おうとして。

戦っているつもりで。

助けられているのを知らなくて、助けているのも知らなくて。

何も知らなくて、勝手に負けた気になって、落ち込んで。

「本当に、かっこ悪いよな」

だから、

「強くなりたいな」

「本当ね」

「うわあああ！？」

突然、カーテンを挟んで反対側。そこから、聞き覚えのある声がした。

「り、鈴！？」

「何そんなに驚いてるの。ちょっと、ってか大分失礼よ」

カーテンが開かれると、そこには俺と同じく、鈴がベッドの上にいた。

「何でいるんだよ！？」

「あのね、私も怪我人なんだけど。ほら」

と左手を掲げて見せる。その左手は、ギプスで固定されていた。

「大丈夫なのか？」

「折れてはないわ。けど、念のためよ。あとは、疲れたから休んでいただけ」

鈴は何でもないように笑った。

その様子から、本当に大したことはないのだろう。

「って、ちょと待て。鈴、何時から起きてた？」

「結構前ね。少なくとも、アンタよりは先に起きたわ」

「じゃあさ。もしかして」

「全部聞いてたわよ。アンタの独り言もね」

「うわあああああ！！」

聞かれた。あのクソ恥ずかしい独り言を聞かれた。

「『本当に、かっこ悪いな』だっけ？　本当にそうね。独り言でかっこつけるなんて、かっこ悪いを通り越して痛いわよ」

「やめてえええええ！！　言わないでえええええ！！」

穴があったら入りたい。今すぐ自分で数メートルは掘って入りたい！

「気にしないでいいわよ。そういう言葉は師匠で慣れてるから」
「あの人と一緒にしないでくれ……」

あの人は特別だろう。なんというか、俺とは纏う空気からして違う。

俺が言ったのではただの痛い独り言だが、あの人が発するだけで官能的で魅惑的な言葉になる。

さすがは美鶴に女の扱い方を教えた人だ。

「まあ、冗談は置いておくとして。強くなりたいわね」
「鈴は十分強いだろ」

少なくとも俺よりは。今回の勝負、途中で邪魔が入ったとはいえ俺の負けだ。

本来ならあの瞬間、鈴が背後より斬り付けて終わっていたはずだ。

「今回は、俺の負けだ」
「いいえ、今回は引き分けよ」
「なんでだよ。あれは状況的に俺の負けだろ？」
「それは、状況的にでしょ。今だからこそそう言ってるけど、あの時アンタは素直に負けたの。少しでも足掻こうとしなかったの？」

それは、そうだ。少しでも何とかしようと、少しでも喰らい付こうと、何らかの行動はとっていたはずだ。簡単に負けを認めるなんてありえない。

「そうでしょ。なら、あの後どうなっていたかわからない。万が一にも、アンタが勝っていたかもしれないでしょ」
「そこは万が一なんだな」
「当然よ」

鈴が、薄い胸を張って言った。
「何か考えなかった？」
「いえ何も」
考えを読まれた！？
「まあ、いいわ。つまり、私は完全にアンタを潰さないと気が済まないの。だから、勝負は引き分け」
それを聞いて俺は、
「いや」
首を横に振った。
「あれは、俺の負けだ」
「なんでよ？」
「鈴は、あの時勝っていたはずなんだ。俺がどんなに足掻いても、勝てる確率は本当に万が一しかなくて。それでも、鈴は引き分けだって言うんだろう」
「だから、そう言ってるでしょ」
「そうなんだ。けど、俺は違う。俺も、万が一の確率で勝っていたと言うべきなんだ。けど、それが言えなかった。俺は、自分の万が一の可能性を信じられなかったんだ。だから、今回は俺の負けだ」
それは、俺の本心だ。心が、負けてしまったんだ。
「アンタ、本当にバカよね」

「そう思うよ」

素直に、鈴の言葉を受け入れて置けばいいのだ。そうすれば、負けなくて済む。少なくとも、負けはしない。そちらのほうが、正しいに決まっている。

でもその言葉を受け入れたら、

「本当に負けになるから」

「ホント、バカよね」

と鈴は笑った。俺も、笑った。

「じゃあ、今回はアンタに花を譲ってあげる。アンタの負け、あたしの勝ちでいいわ」

「悪いな」

「いいのよ。負けるが勝ちってことでしょ」

そして、鈴はまた笑った。見惚れてしまうほど、かわいらしく笑った。

「それじゃ、賭けのことだけど」

「あ、やっぱり有効なんだ」

「当たり前でしょ。でも、一夏にもチャンスを上げる」

鈴はベッドから降りると、俺に近寄ってきて。

近すぎるんじゃないかという程、顔を寄せて。

「答え合わせよ。一度だけ、あたしが何で怒ったか、それを答えるチャンスを上げる」

「もし、正解すれば」

「そうね、まあ、正解すればどっちでも同じなんだけど」
と鈴は考えて、
「とっておきのプレゼントでも贈ろうかしら」
「プレゼント？」
「そう、一生思い出に残るようなね」
そう笑う鈴に。怪しく笑う鈴に何故か、鈴の師匠の姿が重なった。
「黙秘権は？」
「無しよ。何でもいいから言ってみれば。万が一で当たるかもよ」
「万が一、か」
一つだけ、本当に一つだけ、予想がある。
それは、本当に万が一の可能性で。自意識過剰な考えで、外れてたらすごい恥ずかしい答えで。
でも、鈴や箒が言った『残酷』という言葉が当てはまる。何故、あれだけ怒ったか理解できる。
それが本当なら、確かに俺は残酷で最低で、鈴を傷つけたことになる。
なら、謝らなければいけない。
万が一の可能性でも、謝らなければいけない。
「あのさ、本当に万が一なんだけど」
「うん」
俺は口を開いた。
「あの言葉ってさ。俺が意味を勘違いしているとかないよな。よく

ドラマである、『毎日私の味噌汁を～』みたいな。そんな話じゃないよな」
「なっ！？」
それに、鈴は驚いたように口を開け、顔を真っ赤にして。
やっぱり間違えたか。怒らせたな、なんて考えた。
「やっぱり間違いか。鈴、ごめ……」
「……いよ」
「え？」
「正解よ、この鈍感バカ！！」
顔を真っ赤にして叫んだ。
「え、ええ？　えええええ！！」
「何でアンタが驚いてんのよ。アンタみたいな超絶鈍感野郎が正解して驚いてるのはあたしなのよ！」
やはり、顔を真っ赤にして言った。
それに、俺も顔が赤くなるのを感じる。
鈴が！？　俺を！？
「嘘だろ……」
「あんたは、何処まで……！」
「だ、だって。今までそんな素振り少しもなかったじゃないか」
「それはアンタが気が付かなかっただけでしょ！　いいわ、わかりやすい証拠を見せてあげる！」
と俺の襟を掴むと無理やり引き寄せて、

「……」
「……」
「……」
「……どう。これでわかった？」

恥ずかしそうに、鈴は言った。
待て、ちょっと待て。
俺は今、何をされた。
俺の唇と鈴の唇が、触れたような気がした。
いや、触れた。

「今のって、キス……」
「そうよ。あたしのファーストキスよ」

それに、俺はもう納得するしかなかった。
さすがに、鈴がファーストキスをただの友人に、こんなに恥ずかしそうにする訳がない。
だから、もう納得するしかない。

鈴は、俺のことが好きなのだ。

「あ、あの……」
「な、なによ……」
「ごめん」
「何で謝るのよ！」

だって、だって。

「俺。お前の気持ちに何年も気が付かなくて。それで、ずっと傷つけてて。それで……」

「ストップ！」

と鈴が言った。

「もういいわ。アンタがそういうヤツだって知ってるのよ。それに、もうそのことは折り合いが付いたの。だから、そのことはもういいわ」

「でも……」

「いい加減にしなさい！」

鈴が、また叫んだ。

「いい。それより聞きたいのは答えなの。あたしはアンタは好き。大好き。念には念を押すために言っておくけど、友愛じゃないわよ。美鶴が千冬さんを想っているのと同じ。キスしたいし、もっと言えば十八歳未満お断りなこともしたい。そういう好きよ。で、アンタはどうなの？」

どうなの、と言われても。

鈴は、大切な幼馴染だ。大切で、本当に大切な幼馴染。最高の友人だ。

でも、恋人としてはどうだ。鈴を、女の子として見たらどうだ。

確かに、鈴はかわいい。とてつもなくかわいい。

確かに、体は小柄だし、胸も小さい。でも、そこがまた鈴の魅力だと思う。

俺はロリコンではないが、それでも、とてもかわいい。

容姿も、性格も、とても魅力的だと思う。

でも、

「……わからない」

「わからない？」
「ああ、わからないんだ。鈴は、大切な幼馴染なんだ。最高の親友だ。でも……」
「あたしを、女として見たことがない」
「ああ……」

最低だ、と思う。
鈴に辛い思いをさせて、こんなに鈴に想われていて、俺なんかには勿体無くて。
でも、答えが出せない。

「アンタ、また変なこと考えてるでしょ。自分は最低だ、とかね」

だって、本当に最低だから。

「あのね。あたしだってそんなに簡単に返事がもらえるとは思ってないわ。もしすぐに返事がでるようなら、ぶん殴ってるところよ」
「でも、キスまでされて……」

そこまで言いかけたところで、

「キ、キスだとおおおおお！！」

保健室の扉が吹き飛んだ。

「な、何だ！？」
「一夏、キスとは何だ！　どういうことだ！」

そこには箒が立っていて、顔を真っ赤にして怒ったように俺に詰め寄ってきた。

「どういうことって……」
「鈴、どういうことだ！」
「えっと。ははは」

鈴は誤魔化すように笑う。すると、箒は余計に顔を赤くした。

「約束が違うぞ！　スタートは同じだと言ったはずだ！」
「その……。その場の勢いで。ごめんね」
「『ごめんね』じゃない！！」

状況がつかめない。
ただでさえ鈴のことで頭が一杯なのだ。
よし、これから何が起こっても驚かないぞ。
万が一、これで箒からキスされても驚かないぞ。

「一夏！」
「は、はい！？」
「鈴とキスしたのか！」
「しました！」
「お前のファーストキスか！」
「そうです！」
「ふざけるなあああああ！！」

と箒は叫ぶ。叫ぶと、頭を乱暴に掴み、

「……」
「……！？」

キスをされた。

「……」
「……」
それが数秒続いた。
「……」
「……っ！？」
唇をこじ開けられ、舌が入ってきたところで、
「いい加減にしろ！」
鈴が、箒を突き飛ばした。
「はぁはぁ。どうだ！」
勝ち誇ったように、箒は言った。乱暴にキスをしたせいか、唇が切れて血が出てる。
「一夏とディ、ディープキス……」
と恥ずかしそうに声が尻すぼみになる。
「とにかく、私の勝ちだ！」
「くっ！」
箒が勝ち誇ったように笑い、鈴が悔しそうに唇をかみ締めた。
俺は、その状況にやはり付いていけない。
確かに、キスされても驚かないとは言ったけど。

舌はちょっと、予想外というか。想像外というか。

「どういうこと……？」

「ああ、お前は。ここまでされて気づかないのか！　私はお前が好きなんだ。一夏が大好きだ！」

そして、また唇を奪われた。今度は、錆の味がした。

ここまでされたら、やはり理解するしかない。

箒も、俺が好きなのだ。

「何してるのよ！」

「鈴、お前は約束を破り先駆けをしたのだ。これくらいは正当な権利だ」

「そんな訳ないでしょ！」

鈴と箒が、叫びあう。まるで廊下でのケンカのように、戦いあう。

前はわからなかったその理由が、今はわかる。

俺なのだ。

信じられないが、この二人は。

どちらもタイプこそ違うが、間違いなく世間では美少女と呼ばれるほどのかわいさや美しさを持ったこの二人は、俺を取り合っているのだ。

美少女二人に挟まれる男。まるでマンガだ。

だが、これは現実で。

とにかく、俺が今すべきことは、

保健室が壊滅する前に、この二人の戦いを止めることだ。

『一夏、夕飯どうする？　よければ、あたしの部屋で酢豚食べない？』
『ダメだ。一夏は私と食堂で夕食を食べるのだ』
『ダメよ。食堂もおいしいけどたまには手作りも食べないと栄養が偏るわ』
『栄養バランスを考えれば問題ない！』
『箒。自分が満足に料理できないからって邪魔しないでくれる？』
『つ、作れないわけじゃない！　部活や訓練で忙しいから自炊する暇がないだけだ』
『本当に？　なら、今度お弁当で勝負しない？　審判はもちろん一夏ね』
『な、なんだと！？』
『あれ？　自信がないのかしら』
『そんな訳がない！　そ、そうだ。今は部屋に満足に食材がないのだ！』
『なら、明日の放課後にでも買いに行けば』
『ダメだ。平日の放課後は毎日部活と訓練で忙しいと言っただろう』
『なら何時ならいいのよ』
『……ら、来週。来週の月曜日だ！』
『わかったわ。来週の月曜日のお昼に勝負しましょう』
『望むところだ』
『それで一夏。今日の夕飯なんだけど』
『だから、一夏は私と食堂に行くんだ！』

などと、一夏が会話に混ざる隙を与えないで、鈴と箒が話す。互いに一歩も譲らないで、激しく言葉を交わす。
その会話を、一夏の服に仕込んだ盗聴器で聞きながら、
「だ、ダメだ。堪えろ、俺」

笑うのを懸命に堪える。
どうも、鈴と箒は自分の気持ちを一夏に伝えられたようだ。
勢い余って、伝えすぎた程に伝えられたようだ。
その会話の一部始終を、自分は盗聴されるのを嫌がりながら一夏たちの会話盗聴していたのだが。
まずは、素直におめでとうという気持ち。
それから、がんばれという気持ち。
最後に、一番。
他人の修羅場が、おもしろすぎるという気持ち。
それが本当におもしろくて、自分が予想していた以上のことが起きて、笑いを堪えられなくなりそうになる。
だから、もっと聞きたいという気持ちを抑えて通信を切る。
本当は、声を出して笑いたい。
けど、笑う訳にはいかないのだ。
なぜなら、

「織斑先生」
「どうぞ」

薄暗い部屋の中で、千冬が山田先生を向かい入れた。。
ここは、学園の地下五十メートル。レベル４権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だ。
その空間に、関係者でもない俺はいた。
もちろん、千冬や山田先生には内緒。天井裏で息を潜め、二人の会話に耳を傾ける。
コートとゴーグルで姿を隠し、闇に溶けるように二人を観察した。
俺が何故、こんなことをしているかというと、

「あのＩＳの解析結果です」

「ああ、どうだった？」
「はい。あれは……無人機です」

そう、あの謎のＩＳの正体を知るためだ。
そのためになんでこんなスパイみたいなことをしているかというと、理由は簡単。
千冬に聞いても教えてくれないからだ。
いくら何でも、生徒である俺に教師の千冬が機密事項を話すとは思えない。
だって、ありえないからだ。
ＩＳの無人機なんて、ありえないから。だが、それがありえてしまった。
その事実は、すぐさま緘口令が敷かれるほどの情報。
その事実が世界に知れれば、そのデータを奪うために何人ものスパイがこの学園に送られてくる程の情報だ。
いや、すでに手遅れかもしれない。
ここに来るまでに、俺はすでに何人かのスパイと接触した。それはどこの国に所属しているかわからないが、秘密裏に山田先生を追っていた。
この学園にスパイがいるのは、今更だ。いくら条約で不可侵と決められてても、いくら技術開示が義務付けられてても、出せない情報はある。
今回の件のように。
だから、それを調べるために各国はスパイを送る。
それは生徒に紛れていることもあるし、機材搬入などの業者に紛れていることもある。
そして、それを捕まえるために更識がいる。楯無がいる。
だが、今回の事件は大きすぎた。
学園関係者全員に緘口令が敷かれるほど大きい。
だから、各国の動きは速かった。

俺が侵入した時には、すでに先を越されていたほどだ。
だから、すぐさま無力化した。無力化して、楯無に押し付けた。
そしてすべてを追い越し、押し付けて、俺だけがここにいる。
俺だけが、話を聞いている。
ってあれ？　これじゃ俺がスパイみたいだな。
まあいいや。
とにかく、そういう訳だった。

「どのような方法で動いていたかは不明です。中枢機能が焼き切れていました。修復も、おそらく無理かと」
「コアはどうだった？」
「……それが、登録されていないコアでした」
「そうか」

やはりな、と千冬は続けた。俺も、同じ気持ちだった。

「何か心当たりがあるんですか？」
「いや、ない。今はまだ……な」

その千冬の顔は、戦士の顔だった。俺が惹かれた、戦士の顔だった。
俺はそれだけを確認すると、静かにその場を離れた。
そして、聞いた情報をまとめる。
そうだ、確信があるわけじゃない。今の情報じゃ、核心にはまだ遠い。
それでも、俺はどうしても一人の人物を思い出さずにはいられない。
天災の天才。俺の天敵。俺の恩人。いろんな感情が混ざり合って、どうとでも言える。どうとでも言えない存在。
あのバカウサギ、篠ノ之束の存在を……。

始まる戦い、蠢く闇（後書き）

これで一巻は終了です
次回より番外編で鈴の過去をお送りします
その後は、まだ未定です

「番外編・鈴」モテる条件（前書き）

今回より番外編です
番外編では主にキャラの過去に触れていく予定です
最初の番外編は鈴です

「番外編・鈴」モテる条件

「何でこんなことになったのかしらね」
「そうだな」

鈴がふと疑問を口にすると、隣で不機嫌そうに腕を組んでいる箒が答えた。
長い黒髪を一つにまとめたポニーテール。日本刀のように雰囲気を持つ鋭い眼に、整った如何にも日本美人といった容姿。体つきは鈴よりも発達しており、小柄な鈴の横に立つと少し、どころかかなりその差が強調されてしまう。

その箒が険しい顔で、

「セシリア、わかるか」
「そうですわね」

箒とは反対側、鈴を挟むような位置に立っているセシリアは困ったように笑う。
その仕草だけで、もとより洋風美人で可憐といった容貌に、さらに磨きがかかる。
それを見て鈴はむむ、と顔を歪める。
セシリアの容姿はさることながら、同い年の白人に比べればそ抜群とはいかないまでも、それが逆に整ったプロモーションを形成していた。
別に、鈴が可愛くないわけではない。むしろ、美少女といえる部類だ。
左右で結ばれた黒く艶やかな髪。日本人のようだが、鋭角的で艶やかな瞳は、中国人のそれだ。小柄で華奢な身体は、鈴のかわいさ

に磨きをかける。
まちがいなく、鳳鈴音は美少女だった。
それでもだ。
やはり、セシリアと箒の鈴に負けないくらいの美少女に挟まれると自分と対比され、気が重くなる。
主に胸が、比べられてしまう。だから、

「はぁ」

とため息をついた。のではなく、

「おいおい、姉ちゃんたち。ずいぶん調子に乗ってくれたようだな」
「あぁんっ！」
「俺たちの連れがずいぶん世話になったみたいだな」
「あぁんっ！」
「あたいたちが、少し世間の厳しさを教えてやろうじゃないの」
「あぁんっ！」

路地裏の狭い空間。都会の死角とも言える場所で人目にはまず付かない、そんな場所。
そこで鈴たち三人は、見るからにガラの悪そうな数十人の男女に囲まれていたのだ。

「どうしてこうなったのかしら」

鈴は、もう一度呟いた。
今日は日曜日。
ゆとり教育と世間で騒がれる昨今。そんな中、鈴たちが通うＩＳ学園は土曜日も含め週六日という授業日程で学園に通っている。
それも当然。

ＩＳ学園は選ばれたものしか入れない、所謂エリート校と呼ばれる学園だ。
しかも、世界規模でだ。
世界でも４６７機しかないＩＳの操縦者を育てる学園で、その生徒は日本だけではなく世界中から集められる。
世界を担うエリート。そのエリートを育てるには、普通の授業では足りないのだ。
そんな訳で、一週間でも唯一の休日である日曜日。
鈴たちは、女三人で仲良く街へと遊びに来たのだ。
目的地は、鈴と箒が小学生時代を過ごし、また美鶴と一夏の故郷でもある街。
基本的に、想いを寄せる一夏が絡まなければ仲がよい鈴と箒。その二人で週末の予定を話し合っていたところ、帰郷の話が出た。そこに、美鶴の恋人でもあるセシリアも混ざり、この街へと遊びに来た。
来たのだが……。

「あれがいけなかったのではないか」

そう箒は言った。
あれとは、鈴たちがこの街を散策している途中のことだ。
女の子が、目の前にいるガラの悪い男たちに絡まれていた。その女の子は、鈴が通っていた中学の制服を着ており、明らかに嫌がっている。
その光景が、鈴には信じられなかった。
この街で、そんな光景を見ることが信じられなかった。
周りを見ると、通行人は顔をそらし見て見ぬ振りをしている。
誰も、少女を助けようとしない。
それが、気に入らなかった。
別に、偉そうなことを言うつもりはないが、いい年をした大人が

何をしないでいるのは気に食わないし、この街であんなバカなヤツがいること自体が気に食わない。
だから、鈴は飛び出した。飛び出して、不良たちをなぎ払った。
鈴は中国の国家代表候補生であり、個人的に中国拳法とちょっとした武術を嗜んでいる。
いくら男が相手でも、体格で劣っていても、多勢に無勢でも、負けることなんてなかった。
実際、ものの数秒で不良たちを撃退し、少女に礼を言われた。
それから、気を取り直して街を散策して、久しぶりに見る風景に気分を浴していたところ。
いきなり現れた不良たちに連れられて、このような状況になったのだ。
さっきの不良たちが、仲間を連れて仕返しに来たのだ。

「まあ、あの状況では鈴さんは間違ったことはしていませんわ」
「そうよ。悪いのはあたしじゃなくて、あのバカたちよ」

と言うと、さらに不良たちが怒ったように、

「ざけんなよ！　人の悪口は言っちゃダメとお母さんに教わらなかったのか！」
「あぁんっ！」
「弱い者虐めもだぞ！」
「あぁんっ！」
「確かに、俺たちは勉強ができない。だがな、お前たちは持っていない思いやりの心は持っているんだよ！」
「あぁんっ！」

いっせいに騒ぎ出した。
その言葉に、鈴は頭を捻る。

弱いもの虐め？　思いやりがない？
それはむしろ、そちらの方ではないだろうか。
嫌がる中学生を無理やりナンパするのは、彼らにとっての思いやりの心なのだろうか。

「意味がわからないわ」
「ああ、お前たちにはそうだろうな。いくら女尊男卑の時代だからって、やっていいことと悪いことの区別が付かないようなヤツにはな！」
「あぁんっ！」
「本当はこういう方法は気に入らないんだけどな。言葉で伝わらない相手は、少し痛い目を見なけりゃわからないんだ！」
「あぁんっ！」
「少し、反省してもらおうか！」
「あぁんっ！」

と、明らかにけんか腰になり拳や武器を構えた。

「なんだか話がかみ合っていませんね」
「そのようだな」
「でも、むこうはやる気みたいよ」

別に、それ自体は問題ない。
鈴は当然として、箒もセシリアも強さに関しては何の心配もない。
三人で戦えば、無傷で勝つことができるだろう。
けれど、鈴とセシリアの立場がそれを許さない。
国家代表候補という国の名前を背負う二人は、つまらないことで問題を起こすわけにはいかない。もうすでに遅い気もするが、それでもだ。
だから、面倒だけれでもこの場は戦わずに場を沈めなければなら

ない。
こちらが手を出すわけにはいかない。
「おい、特攻隊長が来たぞ！」
その時、不良の一人が声を上げた。
不良たちの群れが二つに割れ、そこにできた道を二人の男女が歩いてくる。
その空気は、不良たちのものとは違う。
見た目的にはそう変化は無いが、研ぎ澄まされた雰囲気が明確に違う。
強い。そう思った。
鈴よりは弱いが、それでも多少は厄介だなと思う程度には強い。
「アニキ、こいつらです。この街の空気を乱すのは」
「あぁんっ！」
「余所者の癖して、調子に乗ってるんです」
「あぁんっ！」
「アネキ。こいつらにこの街の決まりを教え込んでください」
「あぁんっ！」
不良たちが歓声を上げる。
この二人が、この不良たちのリーダー格なのだろう。
その二人は、鈴たちの前まで来ると真っ直ぐ三人を。
というか鈴を見つめた。そして、
「お久しぶりです、鈴の姉御！」
「中国からお帰りになったのですね、姐さん！」
深々と頭を下げた。

その姿に、不良たちと箒、セシリアは呆然とした。

「ただいま」

鈴は、軽く返事をした。

「そちらのお二人はご学友ですか？」

「そうよ。あたしより先に一夏や美鶴の幼馴染だった篠ノ之箒。それに、美鶴の恋人のセシリア・オルコットよ」

「は、はじめまして……」

「ごきげんよう、ですわ……」

いきなり紹介され、困ったように挨拶をする二人。

「一夏隊長の幼馴染！？」

「千冬姉御じゃない総隊長の恋人！？」

それに、思わず身をすくめるほどの大声を出す。

「きっと、二人とも立派な方なのだろうな」

「つまり、俺たちの新しい姉御か」

と驚きの結論を出す。

箒とセシリアはそれにえ？　と驚くが、鈴はそれを気にした様子もない。

「アンタたちこそ、元気にしてた？」

「もちろんです。姉御だけでなく、総隊長たちまでいなくなった今、組をまとめるのは俺たちの役目です」

「その期待に応える為、日夜精進しています」

「そうなの？　一夏や美鶴は置いておいて、弾と蘭はどうしてたのよ？」
「お二人は……」
男が、悲しそうに顔を伏せた。涙を堪えてるいるようにも見える。
その只ならぬ雰囲気に、その知り合いに何か不幸なことでも起きたのかとセシリアと箒は思った。
「弾副隊長はご実家の食堂のお手伝い、蘭参謀は学校で生徒会長となり多忙となったためにチームを離れました……」
どこか寂しそうに男は言った。
それに、セシリアたちは思わず拍子抜けするが、鈴は男たちと同じく悲しそうな声で、
「そうなの。一番に離れたあたしが言うことじゃないけど、辛かったのね」
「はい」
そのやり取りに、今まで黙ってみているしかなかった不良や箒たち。その一人が、恐る恐る声をだした。
「隊長。そいつら、知り合いですか？」
「バカヤロウ！　そいつらとは何ごとだ！！」
「すみません。こいつら、最近入ったばかりの新入りでして。姐さんのお顔を知らないんです」
「なるほど。そうなんだ」
「いいか、お前たち。こちらの方はな、アタイたちチーム『戦人』の女組初代総隊長、鳳鈴音さんだ！」

それに、

「「えええええええええ！？」」

と全員が驚きの声を上げる。

「おい、姉御に手を上げられたというのはどいつだ」

「こ、こいつらです」

「本当に、鈴の姐さんがお前たちに手を上げたのか！」

「あ、あの、その……」

鈴が撃退した不良の一人の首下を掴むと、女は脅すように絞り上げる。

「いいか。姐さんはアタイの憧れで、目標なんだ。その姐さんが、本当にお前たちに一方的に手を出したのか！」

「正直に言え。もしお前が命に懸けてもそうだというのなら、俺たちも命を懸けて道を間違えた姉御眼を覚まさせる。だが嘘だと言うのなら、お前の目を覚まさせる」

どうなんだ！　と二人が恐ろしい形相で問い詰めるから、ついに不良は耐えられなくなる。

「ち、ちがいます！　本当は、俺たちが強引に誘ってた女の子を助けるために手を出されたんです！」

「なに！？　お前は嘘だけではなく、そんな人様に迷惑をかけるようなことまでしていたのか！」

「そ、そうです！」

「いいか！　俺たち『戦人』は美鶴総隊長が高みを目指す者ために作った地域密着型不良グループなんだ！　ご町内の平和と平穏を守

り、地域の人々が笑って暮らせる街を作る。その中で俺たちは常に切磋琢磨し、戦士としてより高みを目指すために集まった集団なんだ！」
「その名を、お前は汚したんだ。これがどれほどのことかわかってるのか！！」
「だ、だって……。このグループに入ったら、女の子にモテるって聞いたから……」

それに、男女はより声を張り上げる。

「いいか。女ってのはな、人間っていうのはな、かっこいいヤツに惚れるんだよ！！　お前みたいないい加減な気持ちじゃない、本当にかっこいい背中をした漢に惚れるんだ！」
「俺たちはな、総隊長や特攻隊長のような強さに惚れたから、このグループに入ったんだ！　女が欲しいなら、まずは自分を磨け！男を磨いてから出直して来い！　わかったな！！」
「は、はい！！」

それを聞くと、女は不良を地面へと投げつける。そして、

「姉御、このたびは俺の舎弟がご迷惑をお掛けしました」

と地に手を着け土下座した。女もそれに習い、頭を地面へとこすりつける。

「舎弟の不始末は、隊長である俺の不始末です。俺の誇りでは安いかもしれませんが、これでお許しください」
「それは同じく隊長でありなあら、舎弟の教育をしっかりしなかったアタイも同罪です。申し訳ありませんでした」

やはり、その凡そ信じられない光景を不良たちはただ眺めるだけだ。

「ああ、もういいわ。気にしてないから、そんな真似はやめなさい」

鈴は慌てて、二人に顔を上げるように促す。

「で、ですが……」

「それでは姐さんだけではなく、総隊長たちにも示しが……」

「いいから、顔を上げなさい！」

無理やり二人を立たせると、ハンカチを取り出し顔や服の汚れを落とす。

「姉御、そのようなことをしたらハンカチが汚れてしまいます。一夏隊長ならともかく、俺には勿体無い……」

「いいから、これ以上舎弟の前で見っとも無い姿は見せないの。ハンカチは汚れたら洗えばいいけど、名誉や誇りは汚れたらそう簡単にきれいにならないのよ」

「姐さん！」

男は涙ぐみ、女は鈴を抱きしめた。それに鈴は顔を赤くしながらも、どこか嬉しそうに笑う。

そして、その後もしばらく言葉を交わすと、

「それでは、姐さん。アタイたちはこれで失礼します」

「お時間があれば次は総隊長や一夏隊長と遊びに来てください」

「もちろん、箒のアネキやセシリア姉御も歓迎します」

不良たちを連れて去っていった。

「さて、それじゃ気を取り直して街の散策に行きましょうか」
「行けるか！！」
「鈴さん、説明を要求しますわ！！」

明るく笑う鈴に、箒とセシリアは詰め寄った。

「あの不良たちはなんだ！」
「美鶴やあなたたちはこの街で何をしていたんですの！」
「昔馴染み、じゃダメ？」
「ダメだ！！」
「わ、わかった。説明するから！」

二人を引き離して、息を整える鈴。
少々長くなるが、説明をするしかないだろう。

「えっとね……」

そうして、鈴は昔を思い出す。きっかけは、そうだな。
家裏の、空き地での出会いからだろう。

「番外編・鈴」モテる条件（後書き）

次回より、他作品のキャラがクロスオーバーで出てきます
ただし、その作品の能力が使えるのではなく、あくまでキャラだけです
これは一人を除いて新しいキャラ設定考えるのがめんどくさいという理由で出すので深い理由はありません
そういうのが嫌いな人はお気をつけください

「番外編・鈴」小さな猫と大きな猫（前書き）

今回よりクロスキャラが出てきます
苦手な方はお気をつけください

「番外編・鈴」小さな猫と大きな猫

その日、鈴は両親が経営する中華料理屋の裏手にある空き地へと来ていた。

日課である、拳法の鍛錬をするためだ。

といっても、誰かに教わっている訳ではない。独学だ。

強いて言えば、前に住んでいた街で同じく両親が開いていた中華料理屋。そこに娘とよく来ていた激辛麻婆豆腐好きの性悪神父が少しだけ教えてくれただけだ。

それも、友人であったその娘が健康のためと学んでいたものだから、なんとなく始めただけだ。それもすぐに飽きたが。

その時、神父が浮かべていた『予想通りすぐに飽きたか。根気のないやつだ』というような意地の悪い笑みを思い出すと腹が立つが、それはとりあえず置いておく。

さて、なんでその飽きてやめた拳法の鍛錬を行っているからというと、原因は一人の男だ。

好きな男という訳ではない。むしろ逆で、大嫌いだ。

いつも自分のコンプレックスでもある体系のことでバカにしてくるし、何よりすぐ乱暴をする。暴力的で、いつもケンカに飢えている。

いつもいい加減なことばかり言ってるし、よく女の子に声をかけてナンパな性格をしている。

とにかく、碌でもない男なのだ。

それが自分の好きな少年の友人というのだから、なおさら気に入らない。

虐められていた自分を助けてくれた、ヒーローのような少年。初恋の相手だ。

なのにその少年は、自分よりもあのバカと一緒の時のほうが楽しそうなのだ。

そう文句を言ったら、

「一夏が俺とばかり一緒にいる？　悔しかったら俺より強くなって奪い取ってみれば」

なんて意地悪く笑うのだ。

だから、鈴は少年を自分のものにするために拳法の鍛錬を再開したのだ。

何時かあのバカを倒して、

「鈴って強いんだな。美鶴なんかよりも全然すごいや。それによく見たらすごいかわいいし。好きだ、鈴。俺と結婚してくれ」

とまではいかなくても、少しくらい自分を見てくれるのではと考えてのことだ。

しかも、少年も何かの武道をやっているらしく、共通の話題にもなる。

一石二鳥だ。あのバカを見返すことを考えれば三鳥だ。

というように、鈴は空き地へとやってきたのだ。

そこは人気のない場所で、鈴以外に訪れるものは殆んどいない。いないのだが……。

今日は先約がいた。

「は？」

その先約の姿を見ると、鈴は呆然とした。その姿を見たら、そうするしかなかった。

白を基準として、所々に黒い模様がある身体。体格は太目の三頭身。どこか愛嬌のある顔立ちをしていて、それはパンダを思わせる。

というか、

「パンダ……？」

パンダそのものだった。

もちろん、本物ではない。よく見れば、その身体が作り物の着ぐるみであることがわかる。背中には、漢字で『七ツ夜』と書かれており、頭には黒の星マーク。

どうみても、本物ではなかった。

『なにジロジロみてるんだ？』

パンダが、そのような文字が書かれたプラカードをどこからか取り出した。

『人の顔をそんなに見つめるなんて、もしかして俺に気があるのか？　小さなレディ』

「人じゃなくてパンダじゃない！」

なんて、随分自意識過剰なことを言ってきた。書いてきた、か？

それは置いておき、ありえない、鈴にはすでに好きな人がいるし、なにより、パンダが嫌いなのだ。

それというのも、自分が虐められた原因というのも、名前を繋げると『リンリン』というパンダみたいな名前になるからだ。

だから、鈴はパンダが嫌いなのだ。

「っていうか、何でパンダがこんな場所にいるのよ。動物園から脱走でもしたの？」

『夢を見るのは年相応でかわいいと思うが違う。残念ながら人間で、この姿は着ぐるみだ。幻滅したか？』

「冗談に決まってるでしょ！」

すでに、サンタクロースの正体は父親だとわかっている。そんな幻想はすでにない。実はお湯を掛けると人間に戻る、などという妄想もしていない。

「あたしが聞きたいのは、なんでパンダの着ぐるみを着た不審者がこんな場所にいるのよ」

『実は、住んでいた家から追い出されたんだ』

「追い出された？　出された笹がマズイとでも文句言ったの？」

『なかなかユニークなことを言うレディだ。残念ながら、食事に関する問題ではない』

「じゃあどうしたの？」

『痴情のもつれという奴だ』

驚いた。このパンダは恋愛をしているというのだ。相手はやはりパンダだろうか。大穴で白熊かもしれない。

『浮気がばれてしまった』

しかも、完全にパンダに原因があった。

「アンタ見たいなパンダを好きになる奇特な人物がいるだけでも驚きだけど、浮気する甲斐性まであるの」

『こう見えてモテるからな。相手が俺を誘惑するんだ。男として断る訳にはいかないだろう』

どうも、このパンダは雄らしい。

『そんな訳で、身包み一つ。いや、着ぐるみ一つで追い出されてしまった』

「うまいこと言ってるつもり？　つまらないわよ」
『やれやれ。愛想笑いの一つでもしたほうが、男受けがいいぞ』
などとかっこつけながら、肩をすくめる。パンダの癖に、その姿が妙に様になってた。

「それはいいけど、ここを出て行ってくれる」
『何故だ？』
「あたしが今からここを使うからよ。邪魔なの」
『ここを？』

パンダは空き地をぐるっと見回す。

『ここを一人で、余すことなく使うというのか？　さすがに、それは無理だろう』
「うるさいわね。あんたがいるの集中できないの！」
『なら、別にいいだろう。それとも、ここは小さなレディの家の敷地なのかい？』
「そ、そうじゃないけど……」
『ならいいだろう。それとも、人目を気にしながら街を歩き回り、やっと落ち着ける場所を見つけて身を休めていた俺を追い出すほど、レディは俺が嫌いなのかい？』

そこまで言われると、さすがに鈴も文句は言えなかった。
ここを無断で使っているのは鈴も同じだし、パンダは嫌いだが、別に中の人物まで嫌いになるつもりはない。
ただ不審者で、余り係わり合いになりたいとも思わないが。
「というか、その着ぐるみ脱げばいいじゃない。そうすれば、もっといい場所で休めるでしょ」

『言っただろ、着ぐるみ一つだと。この下は下着以外に来ていないし、服を買う金もない。ここ以外にゆっくりできそうな場所がないんだ』
「それは……」
思ったより、切羽詰った状況のようだ。浮浪者ならぬ浮浪パンダ。パンダの浮気が原因とはいえ、随分厳しい彼女のようだ。
「……わかったわ。けど、あたしの邪魔はしないでよ」
『女性に迷惑をかけるようなことはしないさ』
なんて、パンダの癖に紳士的な態度を取る。
鈴はそれだけ注意すると、気を取り直して鍛錬を始めた。
息を整え、集中する。そして、イメージを浮かべた。
それは、かつて習った型の動き。あの性悪で大嫌いで思い出すだけでも腹が立つけど、それでも冗談のように強かった神父の動きを思い出す。
そして、それをトレースするように身体を動かした。
中国拳法の一連の型を、ひたすらトレースする。動作を、ひたすら繰り返す。
繰り返し、繰り返し、繰り返す。
この動きが基本であり、ひとつの技を一直線上に往復し功夫をつけるそうだ。
これで本当に強く慣れるかは疑問だが、あの神父がそう言っていたなら信じるしかない。仮にも神に仕えているんだ、嘘は言わないだろう。
それを一時間ほど繰り返し、少し休憩をする。準備していたタオルで汗を拭い、水分を補給する。
そこで、

「……」

パンダが、こちらを見ていることに気が付いた。

「なに？」

『今の動き、八極拳の金剛八式か？』

「知ってるの？」

それに鈴は驚いた。

見た目で何かの拳法とはわかっても、拳法の名前と修行内容までわかるとは思わなかった。

『ああ。だが、どうも違うな』

「違うって何が？」

『もう一度やってみろ』

というので、一連の動作を繰り返す。その途中で、

「なに！？」

突然、パンダに腕をつかまれた。

『ここだ。この時、腕と足の形はこうだ』

パンダは鈴の身体を動かし、体勢を変える。

『これでやってみろ』

「う、うん」

言われた通りに動かすと、驚いたことに、先ほどよりも動きがよ

くなった。イメージの中の動きと重なった感じだ。
「すごい……」
『これは初歩の型だが、ここで間違えると後々痛い目を見る。今までの動きは忘れて、今の動作を繰り返すんだ』
「わかった！」

と言ったところで気が付いた。
あたしは、何を不審パンダに拳法を教わってるんだ！？

「ちょ、ちょっと！」
『何だ？』
「邪魔しないでって言ったでしょう！　それに、許可なく乙女の身体に障らないで！」
『ああ、すまない。気分を損ねたなら謝ろう』
「ええ、損ねたわ！　だからもう邪魔しないで！」

キツく、パンダに言い聞かせる。
パンダは鈴から離れると、元の位置に戻り再び腰を下ろした。
それを確認すると、鍛錬に戻る。
そして、繰り返す。ひたすらに繰り返す。
今までの動作、ではない。
パンダに言われた、今までとは少し違う動作だ。
繰り返して、繰り返して、繰り返す。
そして、何だか少しだけ、強くなれた気がした。

「ごちそうさまでした」

目の前の少年が、行儀正しく手を合わせた。
鈴が思いを寄せる少年、織斑一夏だ。
両親がおらず、姉も不在がちな一夏は夕飯時にはこの店で食事を取ることが多い。
それは今日も同じで、酢豚定食を綺麗に食べ終わったところだ。

「あんた、本当に酢豚好きね」
「ああ、大好きだ。めちゃくちゃおいしいからな」

と嬉しそうに笑うのを見て、思わず見惚れてしまう。
そして、何時かあたしの酢豚を毎日のように食べさせたい。って、毎日！？　それってつまりけっこ……。何言ってんのあたし！？
とか考えたとことで、

「何マヌケな顔してるんだ？」

一夏の隣に座っているもう一人の男が言った。
その男は自分と一夏の仲を邪魔する間男、と鈴が勝手に思い込んでいる少年。師河美鶴だ。

「まったく。普通にしてればかわいいのにな。そんなアホみたいに笑ってたら嫁の貰い手がつかんぞ」

などと大変失礼なことを言ってきた。

「うっさいわね。大体、何であんたがここにいるのよ。自分の家で食べたらいいでしょう！」
「この店は客を選ぶのか。なかなか大きくでたな」
「くぅぅ……」

それを言われると、鈴は言い返せない。美鶴は特別マナーが悪いわけではないし、代金もしっかりと払っている。
まさか、単に気に入らないからという理由で、店主でもない鈴が追い出すわけにはいかないだろう。

「鈴、落ち着け、美鶴も、あんまり鈴を虐めるなよ」
「別に虐めてはいない。からかってるだけだ」
「なお悪いわ！」

と突きを出すのだが、それはあっさりと美鶴に避けられる。だが、美鶴は少し驚いて、

「うん？　何だか前よりも鋭くなってるな。無駄が消えたというか。何かあったのか？」
「そうなのか？」

そう言われて、鈴はその理由に気が付いた。
あのパンダのおかげだ。パンダのアドバイスが、生きたのだ。

「ま、まあね。何時までも、あたしを甘く見てないほうがいいわよ」
「胸の成長具合は甘く見ざるをえないけどな」
「死ね」

と手を出すのだが、

「うわ！？」

美鶴に盾にされた一夏が、慌てて鈴の腕を掴む。
一夏に手を握られた、と一瞬嬉しくなるが、すぐに気を取り直し、

「なにするんのよ！」
「危ないだろう！」
二人で文句を言った。
「店内で暴れるほうが危ないだろ。周りのお客さんの迷惑を考えろ」
正論だった。正論だが、この怒りは収まらない。
「まあ、そういうことだ。俺たちはそろそろ帰るから、余り迷惑掛けるなよ」
「年上みたいなこと言わないでよ」
「年上なんだよ」
そう言って、一夏と美鶴は店を出た。
「あれ？　一夏くんと美鶴くん帰ったの？」
店の置くから母親が顔を出した。
「うん」
「そう、残念ね。もっと美鶴くんとお話したかったわ」
どういう訳か、この母親は美鶴がお気に入りなのだ。騙されているのだ。
年上の女性に対して妙に礼儀正しい美鶴は、この母親を騙して取り入ってるのだ。
あの女好きは、人の母親にまで手を出そうとしているのだ。
だから、鈴は美鶴が大嫌いなのだ。

「鈴。あなたの分の夕食も準備できてるから食べちゃいなさい」
「はーい」

そう返事をして、店ではなく住居となっている部分に戻る。
この店は、一階が店で二階三階が住居となっているのだ。
そして台所、そこに準備されている夕食を暖めなおす。
店のものとは違うが、それでも手が抜かれることもなく、温かくておいしい夕食だ。
漂う匂いに胃が刺激される。
今日もよく動いた。いつも以上に、鍛錬に身が入ったほどだ。それだけ、身体も食事を欲しているのだろう。
とそこで、

「……あのパンダ。ご飯どうするんだろう？」

空き地には、やはりパンダがいた。他に行く場所がないというのは本当なのだろう。
パンダは、空き地へとやってきたパンダに気が付くと、

『どうしたんだい、レディ？　夜遅くに出歩くのは余り関心しないな』
「ここは家の近くだから大丈夫よ」

それより、と鈴は続けた。

「あんた、夕食はどうするつもりだったの？」
『別に、どうもしないさ。パンダだから、そこらで笹でも探すさ』

「あんた人間なんじゃなかったの？」
『草食なんだ。最近流行ってるだろ、草食男子』
「意味が違うでしょう！」

どうも、誤魔化されている気がする。

「本当のことを言いなさい」
『……どうも、ここは中華料理屋の裏手らしい。もう少し時間がたったら残飯でも漁ろうと思ってた』
「やっぱり……」

そんなところだろうと思った。無一文だと言っていたこのパンダが、満足に食事を取れるとは思えない。
鈴は呆れたように、

「その中華料理屋、あたしの実家なんだけど」
『そうなのか？』
「そうなの、それで、残飯なんか漁られるとこっちが迷惑なのよ」
『汚すつもりはない。迷惑もかけないが、ダメか？』
「ダメよ」

鈴の拒否を許さない強い口調。それに、パンダは諦めたようで、

『わかった。ここに置いてくれるだけでも感謝してる。野草や野鳥でも狩って飢えを凌ごう』
「随分ワイルドなパンダね。……って、そうじゃなくて」

鈴は、家から持ってきた包みを渡す。
パンダは不思議そうにそれを見たが、鈴が再び渡そうとする動作を見せると、その包みを受け取った。

『なんだ、これは？』
「開ければわかるわ」

パンダは、着ぐるみの手で器用に包みを開ける。そこから出てきたのは、小ぶりのボールのようなものだ。

『おにぎりか？』
「そうよ」
『毒か？　やはり邪魔者の俺を殺そうとしているのか？』
「なんでそうなるのよ！？」

鈴がパンダの頭を叩く。

『ああ、すまない。女性から食事を貰っていい思いをしたことがないんだ』
「そうなの？」
『ああ。俺が世話になっていた家の女性はみんな料理が壊滅的でな。食べると数日は苦しむことになる。仕方なく、俺とレディと同年代の一人息子が台所を預かっていたほどだ』
「それは、ご愁傷様……。でも安心しなさい。特別においしいとは言わないけど、死ぬほどまずいこともないから」
『そうか。だが、何故これを俺に？』

そう言われて、鈴は言葉に詰まる。
理由は簡単で、先ほどの感謝をしたいからだ。
このパンダのおかげで、少しだけだけど目標に近づけた。そのお礼がしたかったのだ。
けど、この妙な言動ばかりするパンダに素直に礼をするのは何か納得がいかない。

「別に。あたしの家の残飯が荒されると迷惑だと思っただけよ」
『なるほど。……なるほど』
と何故か二回繰り返す。
何を納得したのだろうか。

『理由はわかった。ありがたく頂こう』
「ええ、そうしなさい。……そういえば、どうやって食べるの？」
『口からに決まっている。それとも、レディはまさか頭から食事をするのか？』
「そんな訳ないでしょう！　その着ぐるみでどうやって食べるのかってことよ！」
『普通に脱いで食べるが？』

それ以外にどうしろと、とパンダは言いたげだ。
あ、そんなにあっさり脱ぐんだ。もったいぶったり中の人はいないとか言ったりしないんだ。設定とかどうでもいいんだな、このパンダ。
まあ、いいけどね。と鈴は気を取り直す。
パンダは、頭を手で掴み、

『惚れるなよ？』
「惚れるか！」

パンダが、頭の部分を外す。そして出てきたのは、

「ふう。夜風が気持ちいいな」

年齢は、高校生くらいだろうか。まだ幼さを残しながらも、それ

でも鋭い目線。冷たい印象を受ける顔立ち。ニヒルに微笑を浮かべ、それがかっこつけてるとかではなく、とても自然で似合っていた。

「それに、今夜は月が綺麗だ」

夜空を浮かべ、笑った。それだけで、完成された一枚の絵のようだ。胴体がパンダなのは残念だが。

ともかくだ。

つまり男は、すごいイケメンだ。ものすごく、カッコイイ。

思わず見惚れてしまうほどに。

「どうしたんだい。小さなレディ」

今度はプラカードではなく、声を発する。その声がとても甘く、やはり男に良く似合っていた。

これは、マズイ。本当に惚れてしまうかも知れない。

「おや、顔が赤いようだ。具合でも悪いのかな」

余りにも自然に、顔を寄せる男。それに、いっそう顔を赤くした。

「だ、大丈夫よ！」

マズイ、この男はマズイ。

何がマズイかというと、一夏と同類だ。余りにも自然に、女性を虜にする。

そういう、部類の男だ。

「ならいいが。それより、早速食事を頂こう。せっかくのレディが用意してくれたんだ、食べなければ失礼というものだ」

包みを解き、まずは一口と被りつく。
「こ、これは……」
「なに、どうしたの！？」
何か驚いたように、男はおにぎりを見つめた。
まさか、何か失敗でもしたのだろうか。
「普通の、おにぎりだ」
「……はぁ」
その言葉に、一気に脱力する鈴。
「あんた、もう少し普通に食べられないの？」
「ああ、すまない。だが、余りにも普通なもので。……不味くない。女性の食事が不味くない。ああ、これが本当の女性の手料理か」
ただご飯を適当に握っただけのおにぎりに、何故か感激したように涙を浮かべる。
鈴としては、ただのおにぎりにそこまで感動されると、嬉しいという気持ちより困惑してしまう。
「別に、そこまで喜ばなくても」
「ああ、すまない。ただ、本当においしかったんだ。ありがとう、小さなレディ」
そう柔らかく笑うから、鈴は顔を真っ赤にする。
「べ、別にお礼なんていいわよ」

「俺が勝手に感謝してるだけだ。いらないなら、そこらの野良猫にでもあげてくれ」

そう笑う男に、やはり何も言えない鈴。

「そ、そういえば！」

と無理やり話題を変える。

「アンタ、何か武術でもやってるの？」

「どうしてだ？」

「だって、あたしの武術の名前とか知ってたじゃない」

ああ、と男は納得したように頷いた。

「まあな。だが、八極拳は俺の本分じゃない。知り合いの医者がやっているから、少しかじっただけだ」

少し、にしては詳しかった気がする。少しかじった鈴よりは、確実に詳しい。

「それじゃ、どんな武術なの？」

「一子相伝の古武術のようなものだ。もっとも、一族は俺を残して皆死んでしまったがな」

と、肩をすくめる男。何とも思っていないという様子だ。

だが、鈴はそんな気分にはなれずに、

「ごめんなさい……」

「謝るようなことじゃない。話したのは俺だ。それに記憶も曖昧な

子供の頃の話だ。両親の顔も満足に覚えていないし、実感もない。
今は別の家族もいる」

もっとも、追い出されたがな。と男は笑った。

「でも、ごめんなさい……」
「やれやれ、困ったな。女性を悲しませるなんて、男として失格だ。
どうしたら、笑った顔を見せてくれるのかな」

男が困ったように笑う。

「なら、名前を教えて」
「名前？」
「そうよ。何時までもアンタやパンダ呼ばわりじゃ嫌じゃない」
「ああ、困った」

と、男は顔を歪めた。

「女性に名乗らないなんて……。また失格だな」
「本当にそうね。そんなのだから、彼女に家を追い出されるのよ」
「まったくだ。レディの言うとおりだよ」
「違うわね」

鈴は悲しそうな顔から一転。
いつもの勝気な笑顔で、笑う。

「あたしの名前は鳳鈴音よ」
「では、鈴ちゃんと。ああ、この響きは君によく似合ってるよ」

やはり、笑った。女性を惹きつけるように笑った。

鈴は顔を赤くしながら、

「そ、それで……。あんたの名前は？」

「志貴。七夜志貴だ。よろしくね、鈴ちゃん」

それが後の中国代表、鳳鈴音と殺人貴、七夜志貴の出会いだった。

「番外編・鈴」小さな猫と大きな猫（後書き）

はい。最初のクロスキャラは月姫から参加、七夜志貴でした
一応ヒントはあったのですよ
鈴の移動技法とか。まあ文体ではわかりにくかったですけど
これからもクロスキャラは出てくる予定です。主に美鶴の関係で
いつ出てくるかは秘密です。本当出るのかはわかりません
それでは、ご意見・ご感想お待ちしています

「番外編・鈴」中華娘と殺人貴（前書き）

志貴のエロカッコイイ感じが出てるか不安です

「番外編・鈴」中華娘と殺人貴

それから数日が立った。

『なかなか良くなってきたな』

「まだまだよ。これじゃまだあのバカは倒せないわ」

鈴は日課の鍛錬を続け、それに志貴に指導する。夜になればこっそり鈴が食事を持ってくる。そんな毎日が続いていた。

「アンタ、何時までここに居るの？」

『なんだ。やはり迷惑なのか？』

志貴は食事以外に、着ぐるみを脱ごうとしない。家を出る際に着ぐるみを着ていたかも謎だが、何故そんなにも固執するのだろうか。

「そうじゃないけど。最近親がアタシが毎晩食べ物持って出かけてるのに気が付いたみたいなのよ。そろそろ、差し入れも限界よ」

さすがに毎晩、一人娘が外出をしていれば怪しまれる。それと同じく、食料も減っているのだ。どこかでこっそり動物を飼っているとでも思われているのだろう。

確かに、パンダといえばパンダだが……。

その元凶である偽パンダを見ながら、

『そうか。さすがにこれ以上、鈴ちゃん迷惑を掛けるわけにもいかないな』

「別に、迷惑じゃないけど……」

むしろ、感謝しているほどだ。
志貴がこの空き地へ着てから、鍛錬の充実感が上がっている。指導してくれる人がいるだけで、これほどまでに違うものかと感心させられた。
できれば、これからも指導をして欲しいとさえ思う。

「ねえ、志貴」
『なんだい？』
「ここからいなくなったら、もうあたしに拳法教えてくれない？」
『ああ。もともと、八極拳は門戸外だ。本格的に習いたいのなら、どこかの道場にでも通ったほうがいい』
「でも、あたしは志貴に習いたいんだけど」

と寂しそうに鈴は呟いた。

『おや？　これはこれは……。鈴ちゃんがまさか、そんなに俺のことを好いていてくれるとは。かわいいレディに好かれるなんて、男としては光栄だ』
「ち、違うわよ！　ただ、知らない人に習うより気心知れた相手のほうがいいと思っただけよ！」

と、鈴は赤面する。
志貴はどうも、こうやってキザというか女たらしというか。そういった種類の言葉をよく使う。
パンダ顔で言われてもバカなだけだが、素顔を知っている鈴にとってはまったく違う。
志貴にそんな甘い言葉を囁かれたら、女性ならだけだって惹かれてしまうだろう。
「それに、志貴がやっている古武術だっけ？　それも習ってみたい

し」
『それはダメだ』
急に、強い口調となる志貴。
鈴としては軽い気持ち、ちょっとでも志貴と一緒に入れて強くなれればと思っただけだ。
なのに、志貴の態度は明らかに違う。
有無を言わせぬ拒絶だ。
「ど、どうしたの？」
『あ、ああ。すまない。俺みたいな粗末な男が、鈴ちゃんみたいな女の子に教えるわけにはいかないと思っただけさ』
それは嘘だ。それくらい、鈴にもわかる。
だがそれを聞いても、志貴は答えてはくれないだろう。
『それより鈴ちゃん。今日は用事があるんじゃなかったのかい？』
そう言われて、思い出す。母親に買い物を頼まれていたのだ。
すでに日も沈みかけてるし、早くしたほうがいいだろう。
「そうね。それじゃ、あたしは行くわね。今日も夕食を持ってくるから楽しみにしてなさい」
『ああ、楽しみにしているよ』
鈴はそう告げると、空き地を後にした。
それからしばらく後だ。

頼まれた買い物も終わって、鈴は商店街を歩いていた。
お釣りは鈴のお小遣いにしてもいいと言われていたので、それで志貴にお土産を買おうと思ったのだ。
何がいいだろうか。パンダだから、笹？

「笹ダンゴでいいかな」

そして、先ほどのことを聞こうと思った。
何故、あれほど慌てたような、焦ったような、そんな態度を取ったのか。
何時もの漂々とした態度が微塵もなかった。
いや、顔は見えなかったが。とにかくだ。

「気になったなんだから仕方ないわね」

笹ダンゴを餌に、話を聞きだしてやろう。それでダメだったら、志貴の前で一人でおいしそうに笹ダンゴを食べるのだ。きっと悔しがって、洗いざらい話してくれるに違いない。
そう思い、笹ダンゴを二人分購入すると買い物袋とは別、財布など大切な物が入っているポーチに大事にしまうと、家へと足を向ける。

「おい、待て」

その時だ。後ろから、声をかけられた。

「はい？」

どうも自分へと向けられたもののようで、振り返る。
そこには、大柄で見るからに粗暴な男が三人立っていた。

「……はい？」
「おい、こいつがそうか」
「は、はい……」

本当に何ごとだろうか。鈴は状況がまったく飲み込めなかった。
何故、こんな見るからに不良だろう男たちが何故自分に声をかけるのだろうか。
そんな鈴を無視して、男の一人が声を出した。
その影から小さな、怯えるような声がする。

「……アンタ」

よく見るともう一人、鈴と同年代の少年がいた。しかも、鈴が知っている人物、クラスメートだ。
その中でも、嫌な相手。鈴の名前がパンダのようだと真っ先に虐めてきた四人の少年の中の一人だだ。
もっとも、その日に一夏が四人を相手に大立ち周りをして勝利を収め、それ以来ちょっかいを出すことはなくなったが。
それに、それがきっかけで一夏と出会い好きになったのだから、それなりに感謝してもいいかな、なんて思ったりもしている。
その少年は怯えたような顔で、

「アイツが、鳳鈴音です」
「そうか。こんな小娘が」

どうも、この不良たちは鈴を探していたらしい。さて、何故だろうか。

「なあ、お譲ちゃん」

「な、何でしょうか……」
「お兄ちゃんたちと、少し遊ばないか」
その顔は不器用に笑っていて、少しでも鈴を安心させようとしているのがわかった。
だから、鈴は思った。
ヘンタイだ。
間違いなく、小さな女の子しか愛せない特殊性癖の持ち主だと思った。

「い、嫌です」
「そう言わずに、少しだけ。怖いことしないから」

そう笑う不良の顔が、とても怖かった。
幾ら武術を多少なりと嗜んでいるからといって、年上の男性は怖い。圧倒的体格さで下心丸見えに話しかけられれば、どうしようもなく恐怖してしまう。身体が鉛のように思い。
助けを求めようと周りを見ても、誰も助けてくれない。
子供から大人、男女問わずに遠目で見ては避けていくだけだ。

「なあ、お譲ちゃん」

不良が、一歩近づいてきた。

「やだ……」

鈴も、一歩下がる。

「さあ」

もう一歩近づいてきて、

「いやあああああああああ！！」

鈴は大声で叫んだ。すると、その影響か嘘のように重かった身体が軽くなる。そして、全力で逃げ出した。

買い物袋も投げ捨てて、がむしゃらに走った。

「逃げたぞ！」

「追うぞ！」

すると、やはり不良たちも追いかけてくる。

体格差もあり、距離はぐんぐん縮まる。

しかし、鈴は路地裏へと飛び込み、細く曲がった迷路のような道で相手を撒こうと試みた。地の利は鈴にあった。

『おいおい、甘いぜ。この路地裏は俺の庭のようなもの。ここでやる鬼ごっこは俺が最強だ』

などと、あのバカが言っていたのを思い出した。

悔しいが、その言葉が今はありがたい。

少なくとも、あの不良よりも鈴のほうが地理に詳しい。ならば、撒けないはずがない。勝てないはずがない。

鈴の予想通り、家の近くまで不良に見つかることなく来ることできた。

あの角を曲がれば、家は目の前だ。

その油断が、いけなかった。

「見つけたぜ」

不良たちが、そこにいた。
家への道を塞ぐ様に、不良たちが笑っている。
「な、なんで……」
「あの小僧に家の場所を聞いておいたんだよ」
甘かった。あの少年がいる時点で、家の場所を特定されていると考えるべきだった。が、それはあの状況で鈴に要求するのは酷というものだ。
「くっ」
鈴は踵を返し、逃げる。だが、ここまで来たら逃げ切るのは不可能だ。
すぐに追いつかれて、周りを囲まれてしまう。
そこは、空き地の目の前だ。人通りの少ないここでは、誰かが通りかかるなんてまずはないだろう。
それに万が一通ったとしても、
助けてくれるとは、限らない。
それが、鈴が先ほど見た現実だ。
人は、自分に都合が悪いことがあるとすぐに見捨てる。
あの日も、一夏以外は鈴を助けてくれなかった。誰もが、鈴を見捨てていた。
その一夏も、ここにはいない。誰も、鈴を助ける人はいない。
「志貴だって、ここにはいない」
空き地に目を向けると、そこには誰一人としていない。寂れた空

間があるだけだ。
先ほどまでいた、パンダの姿は見れなかった。
何故、いないのだろう。
鈴が、機嫌を損ねるようなことをいったから。邪魔者みたいに扱ったからか。
とにかく、志貴の姿はなかった。

「手間掛けさせてくれたな、お譲ちゃん」
「悪いが、一緒に来てもらうぞ」

不良たちは、鈴を威圧するように近づいてくる。

「ねえ、なんで。何でよ。何であたしなのよ！」
「あん？」
「わざわざそいつに家の場所まで聞いて、何であたしを追いかけてくるのよ！」

不良たちと一緒にいた、クラスメートを睨む。

「お、お前がいけないんだ……」

と少年は言った。

「お前がいけないんだ！　お前が、俺たちにやられないからいけないんだ！」
「な、なによそれ？　あんた、まさか一夏に負けたことの逆恨みで、あたしを売ったの！？」
「違う！！」

少年は泣きそうな声で言った。

「お前も、一夏もそうだ。仕返しをするつもりだったんだ！　他のクラスの奴も集めて、少し痛い目見せようと思っただけなんだ！　なのに、五年生の美鶴って奴が……」
「美鶴？　何であのバカの名前が出てくるのよ？」
「お前と一夏を待ち伏せしていたら、美鶴って奴に俺たちが返り討ちにされて。二十人もいたんだぞ。それなのに、まったくかなわなかった。『今日はこれで勘弁してやるよ。次鈴と、ついでに一夏に手を出そうとしたら許さないからな』なんて言うから」

それはそうだ。幾ら数を揃えても、美鶴が何の技術もない小学生に負けるはずがない。
それよりもだ。鈴は、そんなことがあったなんて知らなかった。一夏も知らないはずだ。
あのバカが、あたしを守ろうとした？

「なら、何でこんなことになってるのよ！」
「あの美鶴が悪いんだ。六年生や、中学生まで相手にするから」

冷静さもなく、泣きながら少年は話すから細かいことはわからないが、大筋はわかった。
どうも、美鶴が返り討ちにした相手の兄弟に、小学校の番町らしき人物がいたらしい。今時番町ってなんだよ、と思うが、その番長が弟の仇討ちと『五年生が調子に乗ってるんじゃねえよ。その四年生二人も合わせてギタギタにしてやる』などという理由でケンカを売ったらしい。
それも、数人でリンチにしようとしたそうだ。
当然、それも美鶴は返り討ちにする。その次は、中学生になったそうだ。
そしてそれが藁しべ長者のように積み重なり、信じられないこと

にこの街で一番の不良グループ相手にするまでになったそうだ。

「あのバカ……」

そのバカのバカみたいなできごとに、鈴は呻いた。
あのバカは、一体何をやっているのだろうか。
一夏や鈴にバレずに、影ながら守ってきたとでも言いたいのか？
それも、文句の一つも言わずに。
会うたびに、何時もケンカ腰になる鈴に、文句の一つも言わないでだ。

「まあ、そういう訳だ。悪いがお譲ちゃん。ちょいと、人質になってもらおうか」

やはり、そういう訳だ。
鈴を人質に、美鶴をボコボコのギタギタにするつもりなのだろう。
美鶴といえど、何人もの高校生相手には分が悪いだろう。それに、鈴というお荷物が加われば、負けるのは確実だ。
鈴という餌にまんまと釣られて『何人質なんかになってんだよ。ダセーな』とか笑いながら、負けるのだ。
あのバカの性格は、わかっている。大嫌いだったから、わかってるのだ。

「はは、どうしよう」

鈴は、困ったように笑う。もうどうしようもないのだ。
鈴一人で、この状況を打破する余裕はない。
もう、大人しく連れて行かれて、美鶴が目の前で一方的にやられるのを見るしかない。
だから、鈴は大人しく、

「うん？　何のつもりだ、お譲ちゃん」
拳を構えた。足を踏み込み、真っ直ぐと相手を見据える。
「まさか、俺たちとケンカしようってのか？」
「まさか。だって、あたしが勝てるわけないじゃない。痛いのは嫌いなのよ」
声が震える。それだけじゃない、全身が恐怖に震える。
怖い、目の前の男たちが怖い。
当たり前だ。鈴はまだ小学生で、女の子なのだ。
今すぐに逃げたいほどだ。
でも、逃げられない。
なら、どうする。戦うというのか？
それはバカだ。勝てない勝負をする理由があるのか。しかも、一方的に負けて、大切な女の子の身体に傷がつくかもしれないのだ。
戦う理由なんて、一つもない。
「でも……」
戦わなければいけない。
あのバカは、必要もないのに今まで戦ってきたのだ。
そして、また戦うのだ。
鈴と一夏を守るために。勝てる可能性は低いのに。
だから、鈴は戦わなければいけない。
少しでも手傷を負わせて、美鶴が楽をできるようにするのだ。
「しょうがない。お譲ちゃんには少し怖い目を見てもらうだけで済ませようと思ったんだが。痛い目も見てもらうしかないな」

「あ、それいいっすね。どんな悲鳴なんだろうな」
「うわ。お前そういう趣味だったのかよ」
などと、男たちは笑った。だから鈴は、
「あああああああ！！」
恐怖を振り絞るように叫び、踏み込んだ。
毎日毎日繰り返してきた動作。
目の前にいる男の胴を狙い、鋭い一撃を放つ。
「かっ！？」
男が呻く。
やった。そう思った瞬間だ。
頬に熱が走り、鈴の身体が吹き飛んだ。
「痛いじゃねえか。クソガキ」
男は腹を抑えながらこちらを睨んでいる。大したダメージはなさそうだ。
鈴の小柄な身体では、攻撃に重さが乗らなかったのだ。
「うわ、かっこわるいな」
「あんな子供に何やられてんだよ」
「黙れよ。これからガキにオシオキするんだからよ」
男たちは下卑た笑みを浮かべると、
「さて、それじゃあオシオキの時間だ」

鈴に近づいてくる。
それを見ながら、やっぱりダメだったか。なんて諦めて。
痛いのはやだな。なんて泣きそうになって。
怖いよ。と叫びそうになって。

「誰か、助けてよ」

と呟いた。

『まったく、人が来たから隠れてみれば。これは何かのパーティーかい？』

何処からともなく、黒い影が現れた。
その影は話すことなく沈黙を守り、

『ああ、それともつまらない演目か。役者は悪の三下に、そいつらに襲われる可憐なお姫様』

それはここ数日見慣れた姿で、でも本当はこんな場所では見ることなんてないはずの姿。

『そして、それを救う殺人貴かな』

パンダ姿の志貴だった。

「番外編・鈴」中華娘と殺人貴（後書き）

次で番外編は最後です
いつかセシリア番外編もできるのだろうか

「番外編・鈴」鳳鈴音の戦い（前書き）

もう七夜と鈴のカップリングでよかったんじゃね？と思う作者です
ただそうすると七夜がロリコンになるからなぁ

「番外編・鈴」鳳鈴音の戦い

「なんだ、てめえは！？」
「ふざけた姿しやがって、俺たちをバカにしてるのか？」

なんて、不良たちが喚いた。
それを気にする様子もなく志貴は、

『大丈夫かい？　鈴ちゃん』
「大丈夫じゃないわよ！」

怖かった。本当に怖かったのだ。
一人で、あの不良たちに立ち向かうのは本当に怖くて、今にも泣きそうだった。
そして、ついに涙がこぼれだした。
志貴が現れたことで、緊張の糸が切れたのだ。
涙が、ボロボロと零れ落ちた。

「怖かった、怖かったよう……」

と泣きながら、志貴の胸に飛び込んだ。といっても、パンダの着ぐるみのふさふさした感触しかないのだが、それを思いっきり抱きしめた。
志貴は、優しく鈴の頭を撫でる。

『ごめん。でも、俺が来たからもう大丈夫だよ』
「本当？」
『もちろんだ』

そう言うと、志貴は不良たちと対峙する。

「あん？　俺たちとヤロってのか？」

「こいつ、頭おかしいんじゃないのか？」

「あんな姿しているからな」

不良たちは、やはり志貴をバカにしたように笑う。

自分たちが負けるとは、思っていないのだ。

『そんなに余裕でいいのか？　逃げるなら……いや、もう遅いか』

志貴が一歩踏み出した、と思ったら姿が消えた。

『寝てな』

「がっ！？」

そう思った瞬間、不良の一人が宙を舞っていた。

一瞬で、志貴は不良たちのもとへと移動したのだ。しかも、着ぐるみというおよそ戦いには向かない姿でありながら。

「やろう！」

一人が拳を振りかぶる。だが、

『遅い』

その不良を蹴り上げる。と思った瞬間には、残りの一人を掴み地面へと叩きつけた。

それはまさに、一瞬のできごと。

一呼吸の中に、志貴は三人を倒してしまったのだ。

『運がよかったな。大凶にあたるなんて、選ばれた人の証だよ』

なんてキザなセリフを言った。

「て、てめえ……」

不良たちが傷ついた身体で、ノロノロと動き出した。どうやら、意識は失わなかったようだ。

『手を抜いたのは後始末が面倒だからだ。さっさと退け。さもないと……殺すぞ』

その一言は、余りにも怖かった。『殺す』と言った瞬間、志貴から何かが放たれた気がした。

とても怖い、何かが。

それが殺意とわからなかったのは、鈴に向けたものではなかったから。

だが、不良たちは違う。

顔を青くすると、蜘蛛の子を蹴散らすように逃げ出した。

『さて、残る役者は……』

志貴の視線の先には、少年が一人残っていた。その少年は、涙と恐怖を浮かべている。

『どうする、鈴ちゃん』

志貴は、処分を鈴に任せるようだ。

「お、俺は悪くない……。もともと、そっちが大人しく虐められないからいけないんだ。俺は悪くない……」

そういう少年の、情けないことばに、

「……あんな連中とはもう縁を切りなさい。得することなんて何もないわよ」

「え……？」

「もう帰りなさい。あまり遅くなると親が心配するわ」

その言葉に、少年は拍子抜けしたようで、しばらく黙ると、逃げるようにその場から消えた。

『よかったのかい？』

「もういいわ。……疲れた」

『これにて終了でございます、かな』

「ええ、そうね。本当に、疲れた」

と鈴の身体が崩れる。それを志貴が支え、

「あれ、身体が動かない。どうして……？」

なんて言うと、また涙が流れ落ちた。身体は震え、力が少しも入らない。

「ねえ、どうしてかな……。はは、おかしいな……」

『鈴ちゃん。よく、がんばったね』

「志貴……」

そして、しばらく静かに泣くのだった。

「志貴って、すごい強いのね」

鈴が、隣で笹ダンゴを食べている志貴に言った。
まだ目は赤いが、もう涙は止まっており声にも落ち着きが戻っている。
それでも、今のまま家に帰ると両親を心配させるから、しばらく時間を置くために、今は志貴と話していた。
そしてそれ以上に、今は志貴の隣にいたかった。

「そんなことないさ」
「そんなことあるわよ。さっきの瞬間移動、あれって志貴が言っていた古武術？」

それに、志貴は困ったように笑う。

「まあ、そんなものかな」
「そうなんだ」
「うん」
「じゃあ、本当は何なの？」

すると志貴は、やはり困ったように、

「まったく。人の秘密を探ろうなんて、礼儀がなってないレディだ。藪をつついて蛇、それどころか鬼が出てきたらどうするんだい？」
「笹ダンゴ、食べたんでしょう。その代金くらい払いなさいよ」

自分の手に持っている笹ダンゴを見ると、志貴は最後の一口を食べる。

「どうしても聞きたい？」
「どうしても聞きたい」
「おもしろい話じゃないよ？」
「それはあたしが決めるわ」

すると志貴は、観念したようにため息をつく。

「どうして、俺の周りの女性はこうも我侭が多いんだ」
「女尊男卑の世の中よ」
「ＩＳか。まったく、あのアリスにも困ったものだ。自分で不思議の国を作って楽しんでるんだからな」

と、志貴は呟いた。それは余りにも小さく、鈴には聞こえなかったので、聞き返そうとしたが、

「さて、俺の話だったかな。さて、どこから話したものか」

そう、考えるような素振りを見せる。

「俺の家は、昔からの旧家でね。とある職業を国のお偉いさんや資産家から仕事を請け負って生計を立ててたんだ」
「何をしてたの？」

それに、

「暗殺さ」

そう、志貴は答えた。

「あん……さつ……？」

「そう。もっと言えば、人殺し。依頼人にとって不都合な人物を消すのが仕事だったんだ」

「ひと、ごろし……」

呆然と、鈴は志貴の言葉を繰り返した。

暗殺。人殺し。

およそ、普通の人生を送っているただの小学生である鈴にはまったく関わり合いのない話だ。

「ほら、面白い話じゃないだろう」

「そんなこと……」

「顔が言ってるさ」

自分の顔に触れてみると、引きつっているのがわかった。

そう、これは本当の話しなのだ。

聞くだけでは、嘘にしか思えない。だが、嘘ではない。

志貴の態度で、それがわかった。

それがわかる程度には、志貴のことをわかっていた。

「やめようか」

「……続けて」

聞きたくない。聞きたい。

二つの感情が混ざり合う。

だが、鈴は聞いてしまったのだ。志貴の過去に。

寂しそうに笑う、志貴の過去に。

両親のことのように、志貴が触れられたくない過去に触れてしま

ったのだ。
なら、最後まで聞かなければならない。
それが鈴の責任だと、幼心に思った。
「まあ、そんな感じの家だったんだ。そして俺はそこの嫡男、跡取りだ。だから、子供の頃から暗殺術を仕込まれた。いずれ家を継ぐために」
だがそれも無駄だったがな、と志貴は自嘲気味に笑った。
「人を呪わば穴二つ。ある日、家に襲撃があった。理由はわからないが、いくらでも思い当たる。恨みを買ったのかもしれないし、色々と裏の事情を知るから邪魔だったのかもしれない。とにかく、一族郎党老若男女問わずに皆殺し。そんな中、母親が何とか俺を逃がしてくれてな。生き残ったのは俺だけだよ。……どうして泣いてるのかな、鈴ちゃん」
「だって……」
志貴が、泣きそうに笑っているから。それでも、泣かないから。
だから、鈴が泣くのだ。
「まったく。一晩で二回も女の子を泣かせるなんて。地獄の閻魔への挨拶を考えないとな」
「どうして、そんなことが言えるの……。どうして泣かないの……」
「俺は救われたからな」
「救われた？」
志貴は冷たく笑って、
「家族が死んだ後、俺は一人で生きていかなければならなかった。

理由が理由なので他人に頼るわけにはいかないだろう。それで盗人紛いのことをして生きてきたんだが……、ある時ミスってな」
「失敗したの？」
「そうだ。金持ちそうな家を見つけたから侵入したんだが、あっさり見つかった。それも、俺と同い年の女の子だ」
「同い年の女の子！？」

それに、鈴は思わず声を上げる。
それがどれくらい昔の話かはわからないが、それでも当時から志貴は力があったはずだ。それを、大人ではなくただの女の子に見つかったというのだ。

「ただの？　まさか！」

大げさに、志貴は否定する。たしかに志貴が見つかったのは驚いたが、そこまで否定しなくてもいいのではないか。

「見つかった後、気絶させようとしたんだが、あっさり迎撃された。その上、ホッケースティック持って嬉々として俺に戦いを仕掛けてきたんだぞ！」

それは、確かにただの女の子ではない。ただの女の子は、自分を襲ってくるような不審者に、逆に襲い掛かったりしない。

「それって、本当に女の子？」
「信じられないがな。その後、死合ったんだが、俺が負けた」
「うそ！？」
「本当だよ。途中から、本気で戦った。殺そうとも思った。それでも負けた。その後、ソイツが言ったんだ。『君は強いな。同い年でここまで僕と戦えた子供はひさしぶりだ。だけど、その眼が嫌いだ

な。途中までは楽しそうだったのに、今は何だ。ただ理由もなく、なんとなく生きているような眼だ。本当に、気に入らない』ってな。実際そうだった。俺は楽しかったんだ」

殺し合いが、とは言わない。言わないでも、志貴が言おうとしている言葉がわかった。

「酷いだろう？　家族が目の前で殺された後だっていうのに、目の前の相手を殺すことで頭が一杯だった。それがとても楽しくて、相手がとても愛おしくて、殺したいと思った。その後正気に戻って、思い知らされたよ。俺は殺人鬼なんだって。生きているのもおこがましい、化物なんだってね。それで、本当に空っぽになった。唯一会った、母親が望んだように生き延びようという想いもなくなった」

「それで、どうしたの？」

「そんな俺を見て、ソイツは言ったんだ。『何を死のうとしているんだい。君はまだ生きているだろう。なら、戦いたまえ。生きているなら、君は戦士だ。戦士なら、戦うことによって全て解決できる。君の空虚も、戦うことで埋めることができる』そう笑ったんだ」

なんと無茶を言う女だと、鈴は思った。

家族を失って、独りだった志貴に、何て無茶を言うんだと思った。

「そうか？　俺は感謝しているくらいだ。何もなかった俺に、生きる理由をくれたんだ。戦う。確かに無茶だが、アイツと戦っている間は何も考えずに済んだんだ。歪んで感情だったが、それでも、生の実感はあった。俺がアイツを求めていたから。アイツが、俺を求めてくれていたから」

だから、と志貴は笑った。

「俺は、アイツに救われたんだよ。人でなしだった俺に、居場所をくれた。俺を家族と言ってくれる人たちも、友達と言ってくれる人たちも。アイツがいたから、ここまで生きて来れたんだ」

志貴は、優しく笑った。

「志貴は、その人が大好きなんだね」

「まあな。もっとも……」

と肩をすくめる。

「今はこんな目に合わされてるけどな」

「それは志貴が浮気するからでしょ」

今度は、二人で声を出して笑った。心から、笑った。

「ねえ、志貴。やっぱり、あたしに武術の指導してくれない？　もちろん、暗殺術ってのもね」

「それはダメだよ、鈴ちゃん。これは人殺しの術だ」

「でも、あたしを救ってくれた技でもあるでしょ？　別に、人を殺したい訳じゃない。ただ、もっと知りたいのよ」

「何を？」

「志貴のことよ」

大好きな、志貴のことを。

かっこつけで役者のような甘いセリフばかり言う、浮気者で女たらし、そのくせどこか抜けていて、そして、とても優しい志貴のことを。

大好きな、殺人貴のことを。

「まあ、世話のかかる弟みたいなもんだけどね」
「弟？　兄じゃないのかい」
「じゃあ、お兄ちゃんで。情けない兄を持つと、妹が苦労するわね」
「面目次第もないね」

それじゃあ、と志貴は立ち上がった。

「俺はそろそろ帰るよ。なんだか、アイツの顔が見たくなった」
「惚気？」
「さて。明日、何時もの時間にここにいるようにするよ」
「それじゃあ……」
「及ばずながら、ご指導役を務めさせていただきます。小さなレディ」

それに、鈴は満面の笑みで、

「こちらこそよろしくね、志貴お兄ちゃん！」

その後、家に帰る志貴を見送り家に戻ると、怒り心頭の母親が鈴を迎えた。

「鈴、こんなに遅くまでに何やってたの！」
「ご、ごめんなさい……」
「しかも、これはどういうことかしら！」

と母親は、鈴が投げ捨ててきたはずの買い物袋を掲げる。

「どうしたの、それ！？」
「美鶴くんが持ってきてくれたのよ。通りに落ちていたのを見つけ

たらしいわ」
「美鶴が……。それで、美鶴はどうしたの？」
「用事を思い出したからって帰ったわ。明日、お礼を言いなさい」
それに、鈴は首を縦に振った。
「それで、鈴。何をやっていたのかしら。本当に心配したのよ」
「ごめんなさい」
ともう一度謝る鈴。
その理由は言えないが、ただ謝る。
買い物をきちんとできなくてごめんなさい。
帰るのが遅くなってごめんなさい。
そして、怒りながらも安心したような声色の母親に、頭を下げる。
心配をかけて、ごめんなさい。
その夜は、鈴は遅くまで両親に怒られることと成った。
鈴に落ち度があるのは事実だが、それの大本の原因である美鶴を少し怨んだことを追記しておこう。

次の日。
学校に行く途中、一夏との待合場所まで行くと、そこには全身を包帯で巻いた美鶴が立っていた。
「おう、鈴。おはよう」
なんて、そのミイラ男のような姿の美鶴が、何時ものように声を上げる。
「ど、どうしたのよ！　その怪我！？」

昨日まではこんな怪我はしていなかったし、母親も何も言っていなかった。つまり、その後で何かがあったのだろう。

「それが、俺もわからないんだ。さっきここに来たら、この姿の美鶴が立っててさ」

「それ、大丈夫なの？　腕、折れてるんじゃないの？」

ギプスで固定された左腕を見る。

その他にも、頭は頭部の半分以上に包帯が巻かれ、左目が隠れている。服の間の隙間からも本来は見えるはずの肌色はなく、白一色だ。よく見ると、血が滲んで赤くなっている場所もある。

どうみても、こんなところで立っていていい怪我ではない。すぐに入院すべきだ。

「大したことないさ。昨日、デパートの自動ドアで挟まれたんだよ」

「そんな訳ないでしょ！　ああ、もう。すぐに家に電話して迎え来てもらいなさい！」

「どうしてだ？」

「すぐに病院に行くのよ！」

だが、美鶴は軽く笑うと、

「何だよ、鈴。まるで俺が怪我人か病人みたいなじゃいか」

「どうみても怪我人でしょ！」

「人を見た目で判断するなよ。大体、今時の子供は甘いんだよ。少しの擦り傷ですぐに消毒だ絆創膏だ。そんなもの、ツバで十分だ」

何時ものように、美鶴はただ笑っていた。よく見ると、痛みで顔が引きつっているのがわかる。それでも、美鶴は笑った。

「あんた……。まさか！？」

そこで、鈴は原因に心当たった。昨日、不良たちが言っていた言葉。

不良たちと、美鶴はケンカしたのではないのか。それで、こんな怪我をしたのではないか。

いや、違う。

その考えを、鈴は否定した。

あの不良たちは、鈴を人質にとってから美鶴を襲うつもりだった。だが、それは失敗したのだから、不良たちが手を出すのはおかしい。

必要ないと判断したのかもしれないが、それでも、昨日で一度にそこまで結論を出し行動するのは早急ではないだろうか。

「それより、鈴こそ大丈夫なのか？」

「何が？」

「昨日、帰り遅かったんだろう。買い物袋は道に放置されてるし。あんまり心配かけるなよ」

その、優しい声に安心したというような瞳。鈴を心から心配するような、美鶴の声で、鈴は今度こそ全てがわかった。

美鶴は、鈴を救出に向かったのだ。おそらく状況的にそう判断したのだろう。もしかして、不良に追われていたという情報を、人伝に聞くなどして入手したのだろう。そして、家に帰っていないということから、不良たちにさらわれたと結論を出したのだ。

その結果が、この怪我だ。やはり、美鶴でも無事ではすまなかった。

だが、それでも美鶴は笑っている。

学校を休まないのも、事態を大事にして鈴たちに心配をかけないようにするため。もしくは、鈴を守るためか。

証拠はないが、鈴はそう確信していた。

だって、それが鈴の知っている美鶴だから。
「大丈夫よ。心配かけたわね」
だが、そのことを鈴は言わない。ただ、
「ありがとう、美鶴」
この時、鈴は初めて美鶴の名前を呼んだ。
美鶴のことが、大好きになった瞬間だった。

「……とまあ、こんな感じかしら」
これは、美鶴や一夏にも言っていない話だ。この二人だから、話せた話だ。

「いや、鈴の師匠の話はわかった。というか、師匠はあの人なのか。そういう意味では驚嘆すべき話題ではあった」
「さすが美鶴さん。昔からそういうところは変わりませんわね」
「本当ね。普段は女好きのバカだけど、何だかんだで問題を一人で抱え込むんだから」
「困ったものですわね」
まったくだ、と鈴は思った。
「それより、肝心のグループのことはどうなったんだ？」
「そうですわね。まだ続きがあるのでしょう？」

そうだったわね、と鈴。

「その日の放課後ね、不良たちに待ち伏せされてたのよ。その不良たちも、ところどころに怪我をしていたわ」
「本当か？　それは大丈夫だったのか！？」
「うん、大丈夫だったわ。美鶴があたしたちを守るように一歩前に出たんだけど」

その時の光景を思い出して、鈴は思わず噴出しそうになる。当時は呆然としていたが、今となって思い出せば笑うしかない。

「突然、不良たちが美鶴に頭を下げたのよ。『女とダチを守るために、俺たちと戦う姿に惚れました。歳なんて関係ない。俺たちのアニキになってください！』ってね」
「そ、それは本当ですの……？」
「本当よ。その中でもリーダーっぽいのが『俺たちを負かしたアニキなら、きっと立派なグループにしてくれると信じている。頼む、この通りだ』ってね」
「さすがというかなんというか……」
「それが、あのグループの始まりなのですか？」

その通りだった。
あのお調子者のバカは快くその話を引き受け、グループのリーダーとなり名前を「戦人」とした。そのまま周囲のグループをも吸収、合併。さらには美鶴の戦う姿に惚れたという男たちも加えて、その力はさらに高まった。
中学生になるころには、最初期の高校生メンバーは諸々の事情でグループを去った。その代わりに、十分な実力をつけていた一夏と鈴、その頃友人になった五反田弾をも巻き込み隊長へと祭り上げられてしまった。

すると今度は一夏の持てスキル、また女でありながらＩＳに乗らなくても男たちに負けない強さを持つ鈴の影響か女性もグループに入ってきた。
そして、「戦人」の理念はただ一つ。
戦士であること。
その理念を美鶴はどんな時でも体現し、多くの者に慕われる隊長となっていた。
この妙なカリスマ性や指導力は親からの遺伝かもしれない、と鈴は思った。

「っていっても、別に大したことはしなかったんだけどね」
「他のグループとの抗争のようなものはなかったのか？」
「それはマンガの読み過ぎ。迷惑行為をするようなバカの鎮圧はしたけど、それだけよ。別にケンカがしたい訳じゃないもの。ただみんな、強くなりたかったのよ」

鈴は、グループで過ごした日々を思い出す。
一夏や美鶴、弾とバカみたいに遊んでは、たまにグループに顔を出してまた騒ぐ。嬉しいことに、自分を慕ってくれている娘もいたから簡単な護身術も教えたりした。
おもしろそうなイベントがあれば参加したし、祭りで出店を開いたこともある。
学期末には学力が不安なメンバーを集め、五反田食堂を借りて勉強会も教わった。そこで協力してくれた弾の妹、蘭が何故か参謀して迎えられ、鈴と二人でグループの二大アイドルとなったりもした。

「本当に、楽しかった」

そこで、鈴は歩みを止める。その視線の先には、空き地があった。

「鈴さん、ここは？」
「あたしが師匠と会った空き地よ。この裏が、あたしの家だったの」
鈴は懐かしむように、そして寂しさを含んで言った。
「あたしが引っ越した理由って知ってる？」
そう訊ねると、二人は首を振って否定した。
「あたしの両親ね、離婚したんだ。親権は母親にあって、母さんと一緒に中国に帰ったの」
「そう、だったのか……」
気まずそうに顔を伏せる箒とセシリア。二人とも、形は違えど家族に関する問題を抱えていた。だから、鈴の辛さもわかるのだろう。
「別に、そんな顔させるために言ったんじゃないわ。ただ、二人には知っておいてもらいたかったのよ」
「何をですの？」
そう訊ねたセシリアに、鈴は自信に満ちた顔で答えた。
「あたしの決意よ。あたしは、父さんも母さんも大好きなの。また一緒に暮らしたい。それは母さんにも言ってあるし、学園に来る前に父さんにも会って伝えてきたわ。難しいかもしれないけど、それでも、あたしはまた家族みんなで、この街でお店を開くの」
鈴は言った。
「まっ、背水の陣ってやつよ。ここまで言ってうまく行かなかった

らかっこ悪いじゃない？」
「ああ、確かにそうかもな」
「本当ですわね」

鈴は笑った。箒も鈴も笑った。
本当に楽しそうに、笑ったのだ。
それが、今の鈴の日常。
大好きな男の子と、大好きな幼なじみと、大好きな親友にライバルと笑いあう日々。
目標に向けて常に邁進し、前に進む。
それが、

「それでね、何時かはあたしと一夏が店を継いで幸せな家庭を作るんだ」
「なに！？　それは聞き捨てならんぞ！　一夏は渡さん！」
「家庭ですか。わたくしも、何時かは美鶴と……」
「ははは！」
「何を笑っているのだ！　今日こそ決着をつけるぞ！」
「ふふっ。仲がよろしいですわね」
「恋敵（しんゆう）だからね」
「宿敵（ライバル）だからな」

それが、鳳鈴音の戦いだ。

「番外編・鈴」鳳鈴音の戦い（後書き）

これにて番外編は終わりです。次からは第二巻に入ります
キャラが崩壊しまくっています
さてどうしよう・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3918x/

IS-戦いを求めるもの

2011年11月22日03時12分発行